



天香學園狂騷曲

天香學園狂騷曲

《宝探し屋》子育て奮闘記

さん

紫 桐子



この物語は九龍妖魔學園紀のパロディ小説です。
発売元とは一切関係ありません。



【葉佩 九龍】

《ロゼッタ協会》から派遣された、《宝探し屋》。その実態は《秘宝》を飲んで若返ってしまった《協会》のトップハンターの1人。実年齢は30代前半くらい。そんな年齢なので、内縁の妻がいたり、息子が2人いたり。基本的には子煩悩で、優しい。皆守や八千穂の面倒もよく見ている。



【アンリ】

葉佩九龍の実子。12月で10歳になる。預けられていた孤児院が戦火に巻き込まれ、弟の彩と日本にやってきた。家族が大好きで、ママが作ってくれたコアラのぬいぐるみが大好き。皆守らバディも大好き。ママ譲りの黒髪に青い瞳。日本のロボットアニメにハマったようだ。



【彩】

葉佩九龍の養子。7月で8歳になった。アンリと孤児院から焼け出され、葉佩を頼って日本へやってきた。アンリとは違い、日本語が若干不自由。人見知り。ママが作った羊のぬいぐるみを抱え、家族の愛情の中で育っている。ゲームに興味津々。



【菱木 亮太】

《ロゼッタ協会》諜報部所属の職員。26歳。若いが秀才であり、諜報部長代理として日々働いている。葉佩の内縁の妻の弟だが、葉佩に対して恐ろしく強圧的な態度を取る。なぜか一人称が俺様であり、慥無礼な態度。子供たちを心から心配している。

ここまでのあらすじ！

こんにちは。俺は葉佩九龍。しがない《宝探し屋》です。

順調に天香遺跡を攻略中ですよ。茂美ちゃんと大蔵ちゃんが守る区画を終えたけれどねエ……
濃いね！ 濃い！ 特に茂美ちゃん。

甲太郎ちゃんじゃないけれど、本当に「あァ、もう、ごめんなさい」と言いたくなるんだよねエ……何なんだろうねエ……

いやしかし、俺も人間だねエ。まさか風邪ひくなんて。

季節の変わり目は辛いね。みんなも気を付けようね。

しかし、學園はキナ臭いイベントがオンパレードだねエ。

《隣人倶楽部》なんて、名前だけ聞くと、本当に怪しげな感じしないかい？ あれ？ そういう感慨を持ちちゃう俺がオジサン過ぎる？

ま、そういうことに熱中するのも青春ですよ。明日香ちゃんは純粹だからねエ。甲太郎ちゃんには望めないことだけでもね。

ま、そんなこんなで天香學園はいつも通りキナ臭いです。

俺はね、お仕事したいんですよ。本当は。

でもね、そも出来ない理由があったりなかったりするもんだから、ダラダラと時間が過ぎてく。《秘宝》には《秘宝》の事情もあるしねエ。

あァ、いつになったら終わるのかねエ～……

ま、卒業式まで時間があるから、それまでには何とか片付けたいもんだね。

閑話休題（十月十五日～十月二十一日）

十月十五日。

教室一一二時限目休み時間。

「明日の土曜日、遊びに来るかい？」

葉佩の言葉の前半に八千穂は見事食いついたのだが、

「え?!」

「試験勉強も兼ねて」

後半部分にガックリと首を垂れる。

「……どっかでご飯とかア、そういうのじゃないのオ？」

「んふふッ。土曜日曜と、亮太と子供らが出かける約束してるんだって。日曜日、静かにしっかりと勉強しようよ～。……ね、明日香ちゃん」

「……九ちゃんが明日香のことイジメる～……！」

「い、イジメてなんていないよ～！ ひ、酷いなア……そんなつもりはないのに……」

「明日香もお出かけしたい～！」

黙っていた皆守が「はア……」と溜息を吐いた。

「俺は勉強する気なんざさらさらないが……八千穂にはその必要性を感じるな」

「ヒドッ！」

「勉強合宿なんてするとは思わなかったが……」

「学生だし、ね、楽しいでしょ？」

ブツブツ言っていた八千穂だったが、流れには逆らえなかった。赤い数字が見え隠れする試験結果に泣くよりは、自分よりも遥かに出来る葉佩に出来ない部分を訊いた方が自分のためになると、熟考に熟考を重ねた末、ようやくそこに行き着いたのである。

昼休み少し前。

アンリと彩はピンク色の怪獣スーツに身を包み――猫スーツは洗濯待ちである――電算室にいた。PCの前に非常に印象的な真ん丸いシルエットが陣取っている。間違いなく肥後だ。

「大蔵兄ちゃん！」

「あ、アンリくんと彩くんでしゅ」

「授業は？」

「体育は苦手でしゅ。それならここで、學内コミュニティーサイトのグルメレポを書いている方がいいでしゅね～」

「へ～……」

わかっているのかいないのか。

恐らくはまったく理解していないアンリはそう相槌を打って、「あ」何かに気付くと彩と二人

で自分のリュックを漁った。

「見て見て！ 通販で買ったの！ チョコポテチ！」

「彩はコンビニ新製品……ゴルゴンゾーラチーズ味のポテチ……」

「大蔵兄ちゃん、ポテチ好きって言ってたからあげるね！ プリクラ交換してお友達だし、これからもずっと仲良くしてね！ 僕たちからだよ！」

肥後は殊の外嬉しそうに笑うと、ぷくぷくした手でアンリと彩の頭を撫でる。

「嬉しいでしゅ！ ……アンリくんと彩くんは、とっても優しい子でしゅね」

「『汝、自らを愛するが如く、汝の隣人を愛せよ』」

彩は言う。アンリも頷いて、弟の言葉に続いた。

「『レンジのニンジンアイス』って何のことかわかんないけど、でも、パパが『仲良くしてくれる人にはたくさんたくさん仲良くしてあげるといい』って言ってた！ だって、仲良くしてくれるってことは、僕もとっても嬉しいもん！」

「……アンリくんは……ちゃんと自分のことも好きなんでしゅか？」

彩はアンリを見る。肥後と彩に見つめられたアンリは一瞬キョトンとした顔を見せたが、すぐにニッコリと笑った。

「自分が好き？ ……ん～と……難しいことはわかんないけど、みんな楽しくて、みんな幸せだったらいいなァ。そうすれば、僕、すごく嬉しい！」

肥後は「そういうことでしゅか～」と大きく頷いた。

「幸せの押し付けじゃなくて、みんなで幸せを楽しめばいいんでしゅね～……。ボクもひっくるめて幸せになるように頑張ればいいんでしゅね～」

「よくわかんないけど、そうだよ！」

アンリは無責任に大きく頷く。彩はアンリを見て、肥後へと視線を移す。年上の友人と視線が合うとコクリと頷いた。肥後は手にしたチョコポテチの封を開けつつ、

「ボクは葉佩くんにも、キミたちにも、とってもとっても助けられたでしゅ。だから、ボクはボクに出来ることで葉佩くんを助けるでしゅよ」

「……みんな、バディ」

彩は再び頷くと、小さく微笑んだ。

「お邪魔いたしますウ～」

昼休みの保健室。

暢気に弁当やら菓子パンを広げるいつもの面子が揃う中、のんびりとした声が室内に響いた。

「あれ、椎名サン？」

「こんにちはァ」

「どうした？」

瑞麗の問いに、リカはニッコリと微笑む。

「新しい着ぐるみが出来たので、お届けにあがりましたのオ」

そう言って、大きな紙袋からゴソゴソと取り出したのは――

「色違いのピンクの猫と、リュックに似せて作ってみたコアラと羊ですウ」

やり遂げた感のあるリカの微笑み。それ以上にアンリと彩の興奮といったらなかった。ガバッと立ち上がり、おもむろに怪獣スーツを脱ぐと、リカが差し出したコアラスーツと羊スーツを着込む。

「ぴったり～！」

「……羊……」

コアラを着こんでご満悦のアンリと、幸せそうに頬を染める彩。その様子にリカは嬉しそうに手を一つ叩いて微笑む。

「喜んでいただけて、本当に嬉しいですウ。九サマからいただいた変わった布で作ってみましたのオ～」

「……ま、また、増えた……」

呆れ果てたような皆守の声。

「頻繁に洗濯しても大丈夫だねエ。んふふ」

笑う葉佩。

「リカちゃん、ありがとねエ」

「あ、いえ……そんな……」

頬を真っ赤に染め、リカは両手で顔を隠す。

「リカに出来ることはこれくらいですからア」

「俺は、本当に仲間に恵まれてる……」

葉佩は嬉しそうに呟くと、ポケットからキャラメルを取り出した。

「リカちゃん、今はこんなものしかないけれど」

「あ、リカ、キャラメル大好きですウ」

「生キャラメルっていうのをお取り寄せしてるから、届いたらすぐにリカちゃんにあげるねエ」

「ありがとうございますウ」

一人一人の好きなものをすべて理解しているらしい葉佩は、ニッコリと微笑むとリカの小さな掌にキャラメルの箱を載せた。

土曜日。

葉佩九龍宅――朝。

「えーと……必要なものは……携帯は亮太が持ってるからいいでしょう？ ……あとは……お泊りするのに着替えと……」

「パパ～！」

「はァい？」

「デジカメ貸して～！」

「この間買った奴？」

「そう！」

「何撮るの？」

「いろんなもの！」

「使い方がわからなくなったら亮太に訊くんだよ？」

「は～い！」

デジカメをコアラリュックの中に詰めるアンリは、いつでも出かけられる状態の彩に訊いた。

「彩は忘れ物ない～？」

のんびり屋の兄とは違うしっかり者の彩は頷く。葉佩は微笑んでその光景を眺めている。二人の性格の違いは愛すべき個性だ。思わず傍に寄って抱き締めてしまう。子供たちも嬉しそうに父に抱きついた。

「もうすぐ亮太が迎えに来るよ。そしたら、パパは学校に行ってきます」

「うんッ」

「初めての泊りだね」

今一度、亮太に預ける子供らの着替え等の入ったバッグの中を確認して、葉佩は微笑む。

「ちゃんと、ここに帰ってきてね」

3 - C教室――三時限目休み時間。

「じゃあじゃあ、九ちゃん、出がけにそんなことアンちゃんたちに言ったの？ アンちゃんはともかくとしても、彩ちゃんは言葉の意味に気付きそうだよね～」

「……だって～」

「亮太だっていきなりお前から子供を取り上げるようなことはしないだろうよ」

うだうだと、自分の席の机に額を押し付けてゴロゴロと転がる葉佩の後頭部に、「鬱陶しい！」と皆守のチョップが入る。

八千穂は「ん～」と唸ると、後頭部を押さえて呻く葉佩に訊いた。

「じゃあ、今日明日、アンちゃんたちはいないんだ」

「こないだ言っただろ。いないからお前のための勉強合宿をするってな」

「ううう……そうだった……」

項垂れる八千穂の様子に葉佩は苦笑する。

「ま、まァ、そうなるねエ……。明日のお夕飯の前には戻ってくると思うんだけど……」

だが、次の瞬間、目をカッと見開いて呟いた。

「帰ってこなかったら……どうしよう……？」

その視線は皆守を見つめていた。皆守は「はァ～……」と大きな、それはそれは大きな溜息を吐いて頭を掻く。

「お前、自分の息子を信じたらどうだ……」

「甲太郎ちゃんにお説教されたァー……」

「少しのことで絶望するな。……って俺が説教したらいけないのか?!

どつき漫才状態の皆守と葉佩に笑顔を向けた八千穂は、

「ん～……何か、土日のことで悩んでるのバカらしくなってきちゃったな～……そうだ。今日は午後から何しようかな～。ね～、九ちゃん、皆守クンッ」

彼女の言葉通り先程までの鬱屈した表情はなりを潜め、『すべて世はこともなし』という顔をして午後のことに頭を悩ませ始めている。

葉佩九龍宅――夜。

室内に干された猫スーツを見て、葉佩はぼんやりしている。

「普通は、出先でガキがホームシックにかかってピーピー泣くもんだが……何でお前が泣きそうな顔してるんだ？」

「な、泣いてないよ！」

「……必死に否定すると怪しまれるぞ」

アロマに火をつけた皆守が「馬鹿な奴だ」とボソリと呟き、買って来たばかりと思しきカレーレシピ集を広げる。

「亮太はあれで面倒見がいい――甘やかしすぎなきらいがあるが、まァ、子供らと上手くやってるさ。……明日、どれだけの戦利品を持ってアンリと彩が帰ってくるのか楽しみだな」

皆守の視線が、テレビの下に詰まっているロボットアニメシリーズと緑色の蛙型宇宙人のDVDに注がれる。

「……また増えるんだろうな」

「あ、うん、たぶん、増えるねエ……」

「彩はゲームを山ほど買ってくるだろうな。……葉佩、コーヒー」

「ああ、はいはい」

キッチンに行った葉佩の耳に、風呂に入っている八千穂の暢気な鼻歌が聞こえてくる。

「……」

その鼻歌は第九。たぶんはJ-POPばかり鼻歌で歌っている八千穂だが、今日は珍しくクラシックの中でも超有名な曲をチョイスしてきた。

皆守のコーヒーの支度をしながら、八千穂の鼻歌に合わせてドイツ語で歌っていく。

葉佩の歌は音程が一切崩れることなく、皆守の耳に届いていた。間奏部分をハミングしながら、なおも歌い続けつつ、皆守のコーヒーをテーブルに運んできた。

「……何で第九……」

「素敵な歌詞だよねエ」

「いや、そうじゃなくて、だ。……どうして第九を歌いだしたのか訊いてるんだがな」

「明日香ちゃんが鼻歌歌ってたから」

「そうかよ」

葉佩は自分の前にジンジャーエールを置き、「ふ～」と溜息を吐いた。

「歓喜よ、美しい神の閃光よ、

楽園からの娘よ、

我らは情熱に満ち、

天国に、汝の聖殿に踏み入ろう。

汝の神秘的な力は、

引き離されたものを再び結びつけ、

汝のやさしい翼のとどまるところ、

人々はみな兄弟となる」

「は？」

「有名な和訳だよ。『人々はみな兄弟となる』……バディみたいじゃない？」

「何言ってるんだ」

「おや、お気に召さない？」

葉佩はグラスに口をつけた。

「希望と喜びに溢れた素晴らしい歌詞だよ？」

「……」

皆守の眉間に皺が寄るのを、葉佩はどのように見つめていたのか。

「電子ピアノ買ったから、一曲披露しようか」

駄々っ子を宥めるように、苦笑交じりに葉佩は言う。皆守の口からは、言葉ではなく溜息が漏れた。

「は～い、聴きたい聴きたい！」

風呂から出てきた八千穂が大きく手を上げて微笑む。黄色地にデフォルメされたパンダの顔があちこちプリントされたパジャマを着ていた。アンリと彩が見たら絶対にほしがりそうなパジャマである。

「おや、明日香ちゃん、おかえり」

「えっへへ～。ただいま、九ちゃん」

「……何弾くんだよ？」

「お前さん方が知っていそうな曲をね。……そうだなァ……ああ、《革命》のエチュードとかは？」

八千穂はバスタオルで頭をワシワシ拭きながら、「あ」と声を上げた。

「聞いたことだけある。名前を」

「甲太郎ちゃんは？」

「……さァな？」

「このコは本当に音楽に興味がないねエ」

苦笑した葉佩は、居間の隅に置かれているピアノに近付くとカバーを外す。

「なかなかのもんですよ～。俺の腕も」

と言いつつも、葉佩はブツブツ呟いている。

「個人的には《革命》よりも《ワルトシュタイン》の方が好きなんだけどなァ……ん～……でも、知名度でいったら絶対的に《革命》……いやいやしかし……」

「九ちゃん、何を困ってるの？ 『とりあえず《革命》！』じゃダメなの？」

「飲み屋の注文みたいだな……」

皆守はゴロゴロしつつ、楽譜と睨み合っている葉佩の背中を見た。

「おい、オッサン」

「オッサンじゃないよ～……！」

「とりあえず、一曲弾いてみたらいいだろうが。人を待たせるな。質の悪い演奏会だな」

「はいはい……わかりました～……」

葉佩は鍵盤に手を置く。一拍後に生み出される音は、確かに本人が「ピアノで食べていくことは出来るよ」と言うだけのことはあった。八千穂は目を真ん丸にしたまま、時折瞬きをするくらいしか動けず、皆守はいくら音楽に造詣がないといってもその音に圧倒された。時折音楽の授業の後でクラスメイトの女子が手慰みに弾くようなものとは一線を画している。

鳥肌が立った。

元々、《革命》自体がドラマティックな様相を呈するピアノ曲である。練習曲という区分に入るものだが、ただ練習曲というには、あまりにも惜しいほどの美しさがあった。

最後の音の余韻が消え、「ふ～……」と溜息を吐いた葉佩の背中に、八千穂の「ブ～ラボ～！」という声と千人の観衆にも勝る拍手、そして、皆守のやる気ない拍手が贈られる。

「……何でお前、《宝探し屋》やってんだ？」

皆守の疑問はもっともだった。葉佩は振り返ると、スッキリしない微笑みを浮かべ、「え、え～……？」と頬を搔く。

「だって、ねエ……いろいろと事情があるんですよ～。んっふふふ～」

答える気はないのだろう、そんな笑い方だ。

「九ちゃん、すごいねエ！ ね、ね、次は何を弾いてくれるの?！」

「気が滅入りそうなのはやめてくれよ」

「む、難しいことを言うねエ……」

欠伸交じりの皆守の一言は、葉佩の十八番を封じる形となる。

「じゃ、じゃ……しょうがないなァ～……」

ピアノソナタ系は諦めた。短くて派手なものがいいだろうと、葉佩は楽譜のコピーをめくる。

「え～と……う～んと……ああ、これにしよ～っと」

「何々？」

「《黒鍵》のエチュード。右手はずっと黒鍵だけ弾いていくんだよ。面白いでしょう？ 短いし、ぱっと聴きは派手だし。甲太郎ちゃんも、これなら飽きずに聴ける！」

「妙なところに自信を持つな！」

皆守の罵声に首を竦め、葉佩は苦笑して鍵盤に触れた。

「明日は朝からお勉強ですよ」

深夜番組を見ている皆守と八千穂に葉佩は言う。

「わかってる？ わかってるよね？ 特に、明日香ちゃん」

「何であたしだけ……ッ!？」

「一番成績が不安だからに決まってんだろ……」

「皆守クン、早く寝たら?! いつまでも起きてないで寝なさい！」

「俺はいいんだよ。朝寝坊しても。……八千穂みたいに勉強がすぐさま必要なわけでもないしな」

ニヤリと笑う皆守。

「これは、八千穂のための勉強会だ」

八千穂はプーッと膨れ、目の前の空グラスの中から氷を一つ取り出すと、悔し紛れに隣に座っていた葉佩の浴衣の襟を掴んで中に放り込む。

「ひ……ッ！ 冷た……ッ！」

アワアワとする葉佩を見て溜飲を下げたのか、八千穂はニコリと笑うとテレビの続きを見始め、皆守はニヤニヤしながら「取って～、取って～」と騒ぐ葉佩を観察した。

窓を叩く雨の音で目が覚めた。

「う……ん……今何時……」

七時半である。

「あ、お弁当……ん？ あれ……今日は……何曜日……？」

葉佩は自分が居間の床に寝ているという事実を普段と鑑み、ようやく、

「ああ……日曜日だ……」

と得心いったようである。

「朝ご飯、何がいいかねエ……。ねエ、彩……あ、そっか」

いつもなら、イヤホンをしてテレビの前に座っている彩の姿がない。

「……やっぱり、寂しいねエ……」

溜息を吐いて、浴衣を直しながらキッチンへ向かう。

一方、その頃の亮太の住処では――

「……おはよう」

「うむ。彩は早いな」

「……うん……」

羊のぬいぐるみを引きずった彩は、キッチンで朝食の支度をしている亮太の服をギュッと掴

んだ。

「どうした？」

「……ギューして……」

「？」

「父、してくれる……」

羊を離し、両手を差し出した彩を見て亮太は頷く。

「そういうことか」

亮太はしゃがむと、床に膝をついて彩の細く小さい体を抱き締め、

「おはよう」

と頭を撫でた。彩は嬉しそうに微笑むと、少しだけ赤くなって羊を引きずりながら部屋に戻る。

。

「……うむ、よくあんな父親と一緒に住んでいて真っ直ぐ育つものだ……」

小首を傾げつつ、チーズを包んだオムレツを焼く。

「教育が行き届いているわけでもないのに……？ はて……難しいものだ」

そうこうしているうちにアンリも起きたらしく、彩と同じようにコアラを引きずってキッチンにやってくると、

「ギューして～」

と手を伸ばした。アンリも同じように抱き締めてやると、

「えへ、えへへへへへ」

とニコニコ笑い、コアラをギュッと抱き締めて部屋に戻っていく。

「……わからん。……いや、もしかしてこれがスキンシップというものなのだろうか……」

妙に納得しながら、亮太は朝食の続きを作る。

「……うむ、親にこんなことをしてもらった記憶がない。……うちの親では、まず考えられんな……その代わりに姉さんがいたわけか……」

和やかな亮太たちとは打って変わり、再び葉佩宅。

「……パンは」

「買い忘れた……」

「で？」

「ホ、ホットケーキミックスがあったから……」

「わ～いわ～い！ あたしホットケーキ好きだよ～！」

「朝から……ホットケーキ……」

「文句言わないの！ 皆守クンは～！」

少々元気がない葉佩は困ったように笑って食卓に着く。

「おい、ホットケーキなのは百歩譲って許してやる。が……」

皆守の右手が、葉佩の頭をガッと掴む。

「イタ、イタタタタタ……！」

「その面がむかつく」

「イタタタ……！ し、仕方ないでしょ……！ ちょ、ちょっと寂しいー」

「今まで一人だっただろうが」

「ううう……」

葉佩の目が皆守と八千穂を交互に見て、伏せられた。

「い、いつも、そうなんだよね。わかってるんだよ」

苦笑した葉佩を見て、皆守はその頭を解放し、八千穂はホットケーキを切っていた手を止める。

「今回みたいに潜入型の遺跡って、絶対に周りの人と仲良くなっちゃうんだよねエ……で、どうしてもそこを離れなきゃならないときって来るわけじゃない？ ……一人になりたくなくて、毎回、苦しいんだよ。最近はアンリと彩もいたし、こうして甲太郎ちゃんと明日香ちゃんがいてくれるから何とかしてるけど……これ、一人になったら辛そう……」

「九ちゃん……」

八千穂は「あ」と何かに気付いたように顔を上げる。

「……学園の遺跡が終わったら……九ちゃん……」

「んふふ、それは、ね。でも、俺は卒業までいるつもりだから。《協会》も何も言わないでしょ。言ったとしても、無視するからいいよ」

「おいおい……」

「俺は、日本の学校をちゃんと卒業したことないからねエ。高卒資格云々よりも、『仰げば尊し』を歌ってみたいんだよ」

葉佩は真っ赤になって、「この歳でこんなこと言うなんて恥ずかしい～……！」と顔を隠している。内心、「まったくだ」と大きく頷く皆守だったが、八千穂は大いに感動した様子で「うんうん」と頷いている。

「そうだよね、さよならは寂しいもん！ 卒業まで一緒にいて、それからみんなでどこかに向かって歩き出そうよ！」

「そうだねエ、明日香ちゃん……。アンリと彩も、きっと……」

葉佩は口をつぐみ、皆守を見た。

「甲太郎ちゃん」

「んだよ」

「二人とも、元気かなア……」

「亮太はお前よりも子供の機嫌取るのは上手いぞ」

「あ、皆守クン本当のことを」

「ヒィィィィ……！ 何ですってエエエ……！」

ボッサボッサの頭を抱え、葉佩は床に倒れ伏して静かになった。

「……ほっとこうぜ。とっとと食って、八千穂の勉強を見なければ」

「う、うわ～、皆守クン……厳しいィ～……」

放置された葉佩は凹んだまま、十分ほど動かなかった。

頭から煙が出そうなほど勉強した——と思っている八千穂は、十一時過ぎに、甘いミルクティーを葉佩に淹れてもらって休憩していた。

「……おい」

「ん？」

「この調子で全教科終わると思ってんのか!？」

「が、頑張れば……」

「このペースじゃ無理だねエ……」

皆守の前にもコーヒーを置いてトレーを抱える葉佩は苦笑する。

「で、でも、せめて一教科くらいは範囲終わらせたいねエ……」

「一教科くらいは出来るよ～……」

「……無理だ……絶対に無理だ……」

皆守は溜息を吐き、自棄のようにコーヒーの入ったマグカップを掴んで呷る。

「どっかにご飯食べ行こうよ～」

「はア……ッ?!」

空気を読まない。むしろ、読む気など微塵も感じさせない八千穂の言葉に皆守の堪忍袋の緒が綻び始めているのがはっきりくっきり見て取れる。

「お前、自分の前に広がる絶望の海が見えてないわけじゃないだろうな!？」

「ピザでも取ろうか……？」

素っ頓狂な声を出した皆守の顔色を伺いながら葉佩は引きつり笑いを浮かべる。

「ほ、ほら、新商品の、ドライカレーピザ！ これ、美味しそう！」

八千穂はプーと頬を膨らませ、

「遊びに行こうよ～！」

と葉佩の服の袖を掴み、ゆさゆさ揺する。

「あ、明日香ちゃん、イイコにしてたら、オジサンが後でいいもの買ってあげるから！」

必死に二人の機嫌を取る葉佩に安息の時はない。

「リョタ兄ちゃん！ あれは何？ 屋上からいつも見てるんだけど、わかんないの」

アンリが指差した巨大な建物を見て亮太は答える。

「……あれは、都庁だ。日本が好景気を謳歌し、この世に不況などないと思っていた証……。世界を読みきれない愚か者の建てた、消えることのない暗黒のオベリスクだ」

「……オベリスク……形、違う……」

「物の譬（たと）えだ。……本来、オベリスクというものは、古代エジプトの偉大なるファラオが、己の偉業を示すために建てたもの。……都庁はバブルという幻想に惑わされた人間たちが

、血迷った己の無知をさらけ出したのを後世に知らしめるためのオベリスクだ。知らしめるという意味では、間違えた造りではないな」

アンリと彩の手を引き、歩きながら亮太は言う。

「いいか、二人とも。愚か者とは学ばん人間のことだ。人はすべてを学ぶことができる。学ぼうとする志は誰にも曲げられん。学ぼうとする心というものは、無知を知る心から生じる。無知の知。それこそが人類の英知を生み出してきたものだ。自分が物を知らんということを知る者は、何よりも賢い。……この世に果てはない。歩こうとすれば、どこまでも歩いていけるだろう」

「……」

アンリはキョトンとして亮太を見つめる。まったく理解していない。

彩はしっかりと頷き、

「……わかった」

と答えた。亮太は二人の手を強く握り、続ける。

「……俺様は最近考えるのだ。姉さんがどうしてお前たちの父を選んだのか……」

「パパを？」

「……父を……？」

「うむ」

頷いた亮太は、ふと足を止めた。

「カフェがあるな。……歩き通しで疲れただろう。ケーキでも食べるか？」

「食べる！」

「……チーズケーキ……」

「うむ」

幸い席は空いており、アンリはチョコムースケーキ、彩はレアチーズケーキ、亮太はモンブランを頼んだ。ドリンクは三人とも、ホットのミルクティーだ。

「先程の話の続きだが」

亮太の言葉に、並んで座った子供二人は顔を上げる。

「ママがパパのどこが好きかってお話？」

アンリはクリッと小首を傾げる。

「そうだ」

「……父、優しい……彩、アンリと同じ、言った……」

「そうだよ。それに、パパはママのこと、た〜くさん大事にしてるよ」

「うむ。……あの男、間が抜けているが、愛情のバケツにだけは穴が開いていないらしい。……お前たちを見ていると思う」

「？ そう？」

「うむ。……あの父親でよかったと思うか？」

アンリと彩は顔を見合わせ、コクコクと頷く。

「思うよ！」

「彩も……」

「……そうか」

亮太はその頬に僅かな苦笑を浮かべた。

「こ、甲太郎ちゃん、何とか、何とか二教科終わったよ……！」

「……奇跡だな」

寄ってたかって八千穂に試験範囲を叩き込んだ二人は、英語と数学が終わったことに対して驚きを隠せない。

「……」

八千穂は疲れ果て、口からエクトプラズムを吐き出しそうな状態である。

「……今、何時だろうねエ……」

「もう四時だな。八千穂、そろそろ學園に帰るぞ」

「……ふアい……」

ガタピシと音がしそうな動きで、八千穂は顔を葉佩に向ける。

「……イイコにしてたから、何買ってくれるの？」

「覚えてた……！」

「物に釣られてたのかよ！」

八千穂は自分の持ってきていたバッグの中から、ゴソゴソとファッション雑誌を取り出す。

「明日香、このバッグがほしいの」

八千穂の指差したものを見て、男二人は顔を引きつらせる。

「……十五万で書いてあるな」

「……書いてあるね。このブランド、すごく高いんだよね」

「明日香、このバッグがほしいの！」

「……わかりました。明日の午後にでも探します……」

「葉佩、お前、援助交際の弱みを握られたオヤジか！」

「これは正式な取引だよ、皆守クン！」

「だそうですよ、甲太郎ちゃん……」

六桁程度ならばトップハンターにははした金であるが、いきなり十五万のバッグを請求されるとは思わなかった。「最近の子供は恐ろしいんだねエ……」と溜息を吐きつつ可愛い妹分の顔を眺める。

「何てね～、ウソウソ」

八千穂はニッコリ笑うと、次のページの靴を指差した。

「これがほしいな」

「……あ、普通の値段」

「これがいいな」

「わかったよ。探してくる」

「えへへへへ」

皆守は呆れ果てたような様子で八千穂と葉佩のやり取りを眺めつつ、アロマに火を点けた。

「あ、そろそろガキども帰って来るんじゃないか？」

「でも、亮太から連絡ないよ？」

「……亮太んちに居ついたのか？」

「え……ッ?!」

この世の終わりのような顔をした葉佩に、皆守は「ああ、悪かった悪かった」とポンポンと肩を叩く。

「お前はまだ、愛想を尽かされるほどのポカはやってない」

「ひどい……」

よろよろとその場に泣き崩れる葉佩のH. A. N. Tが鳴った。

「アンリ！」

H. A. N. Tに飛びつく。

「彩！」

メールを開ける。

『もうすぐかえるよ』

「アンチャンから？」

後ろから覗き込んだ八千穂にコクリと葉佩は頷く。

「よかった……帰ってきた……」

「……お前、つくづく人の言葉に踊らされるんだな……」

コツンと灰皿に皆守は灰を落とす。躍らせた本人が何を言っているんだと言いたかったが、葉佩はグッと言葉を飲み込み、

「う、うう……」

と唸るだけに留めた。彼にしては、充分大人の対応である。

「アンリと彩の顔を見て帰るか」

「だね～」

皆守と八千穂は學園に帰る支度を始め、葉佩は子供たちを迎えるために家の中を片付け始めた。

「ただいま～！」

「……ただいま」 元気な子供たちの声。

「お帰り！」

玄関先まで出迎え、アンリと彩を抱き締めていた葉佩の頭上から、

「邪魔するぞ」という、無愛想な声が響いた。

「あ、亮太、いたの」

子供たちに頬擦りしながら亮太を見上げる葉佩に、

「……ボンクラ……殴ってもいいだろうか」

と強く拳を握り締めつつ亮太は尋ねる。

「……んふふ？ ヤだ」

葉佩は微笑んで立ち上がると、子供たちに「手を洗って嗽をするんだよ」と言い含めて頭を撫でてから亮太に向き直った。

「どうぞ、上がって。明日香ちゃんと甲太郎ちゃんもいるし」

「うむ」

「試験勉強してたんだ」

居間に入ると、八千穂が「やほ～」と手を上げ、皆守が「よう」と口だけで挨拶する。

「そうか。中間試験か」

腰を落ち着いた亮太は、片付け途中だった八千穂の問題集を手に取り、「ほゥ」と一人頷く。

「大して難しくはないが」

「亮太くん……頭いいんだねエ……」

「何を言っているのだ？」

亮太はパタンと問題集を閉じた。

「俺様は常に首席だったが」

「しゅ……！」

ふ～……と八千穂が目眩を起こして後ろへ倒れる。

「明日香姉ちゃん！ あわわわわわ……」

「お姉ちゃん……」

アンリと彩は一緒に支えたが、「ぷきゅ」という声とともに八千穂に潰された。

「八千穂、お前が重いから、ガキが潰されてるぞ」

「……だ、だって……首席っていったら……学年トップだよ？ 神鳳クンクラスだよ？」

「亮太の話聞いてなかったのかよ。こいつ、大学はスキップしたって言ってただろうが。頭はいんだよ。たぶん、神鳳以上に」

「神鳳……？ 首席なのか？」

「大体そうかなァ」

八千穂がアンリと彩の上からどいて、「ゴメンゴメン」と笑いながら謝るのを見ながら、皆守はアロマに火を点けて「ふ～」と溜息を吐いた。

「で？ 亮太は部活もせずに勉強ばかりしていたとか？」

「いや。そんなことはない。部活動もきっちりしていたが。内申書の問題があるだろう」

「……現実的な方から話が飛んできたな」

「俺様は吹奏楽部だった」

「ぶ……ッ！」

皆守は嘔き出し、八千穂はぽか～んと亮太を見た。

——い、意外だ……！

吹奏楽、という雰囲気ではない。どちらかといえば、「文学部にいました」とか「バスケット部でした」という方がしっくり来る気がする。

亮太にとったらば、甚だ失礼な話であるのだが。

「吹奏楽部で、何吹いてたの？」

「俺様はサクスを吹いていた」

「……似合いそう……」

八千穂は頷く。アンリと彩は首を傾げ、「さっくすって何だろね？」とボソボソ言っている。

「文化祭はバンド活動もしていたぞ」

「バ……！」

破壊力がある発言だった。

「文化祭くらいは多少羽目を外しても、《生徒会》もうるさくない」

「文化祭……楽しいもんねエ……」

「亮太がバンド……軽音部自体がないから、にわかバンドということか……」

皆守はブツブツ言いながらアロマの灰を灰皿に落としている。

「見てみたいもんだがなァ」

「卒アルに載っているぞ」

「それだ！」

揃って声を上げた皆守と八千穂に、アンリと彩がビクッと体を震わせる。かなり驚いたらしいアンリは、目にうるうると涙をためている。

「ビックリ……した……」

「アンリ、大丈夫……」

兄の頭を撫でつつ、彩も左手をドキドキしているらしい胸に当てていた。

「亮太、確か二十六だとか言ってたな」

「うむ」

「八年前——九十六年の卒業アルバムだね！」

「明日、図書室に行って見てみようぜ」

妙なところで意気投合した八千穂と皆守は頷きあう。そこに、キッチンから葉佩の声がかかった。

「明日香ちゃん、甲太郎ちゃん、ご飯食べてく〜？」

「食べてく〜！」

「ついでに食べてく。飯代が浮くからな」

「亮太は〜？」

「食べる」

「了解〜」

亮太、皆守、八千穂がしばらくいるとわかった瞬間、アンリと彩の遊んで攻撃が始まった。

「試験の日程見た？」

「見たよ～」

「数学と英語と一緒にあるって……何これ地獄？」

「んふふふふ。ま、頑張りましょう～。中間だし、期末に比べたら科目は少ないから何とかなるでしょ」

「九チャンは出来るからそういうこというんだよ～！」

ガンッ！

叩かれた机の上に載っていたシャープペンシルと消しゴムが一瞬浮いた。

皆守が留守の月曜日、二時限目休み時間。

葉佩は「ん～……」と八千穂の顔を眺め、ニコッと笑った。

「ヤマ、張ってみる？」

「その言葉待ってた～！」

「お、そういうことなら俺も一口乗らせてもらうかな」

葉佩と八千穂は声のした方に視線を向ける。

「おや、大和ちゃん。体はどうだい？」

「今日はなかなか調子がいいらしい。……試験のヤマを張るなら、俺もその話を聞きたいもんだな」

皆守の席の椅子を引っ張り出し、夕薙は悠然と笑う。

「外れても責任持たないよ～？」

悪戯っぽく笑い返した葉佩を見て、八千穂は、

「外したことなくせに、九チャンたらア」

彼の肩を軽く押す。

「んふふふふ」

笑っている葉佩。夕薙は顎を撫で回し、片目を眇める。

「その勘の良さには感服するな」

「おやおや」

微笑む葉佩の視線が、何気なく夕薙を通り越して廊下へ向かったときのことだ。

「あァーッ！」

素っ頓狂な声にクラス全体が葉佩に注目していた。葉佩は「あ……」と真っ赤になって慌てて廊下に出て行く。

「……葉佩、最近落ち着きないなァ」

苦笑する夕薙に、

「あ、はは、そ、そだね～」

八千穂が引きつった笑いを浮かべて、出て行った葉佩の背中を見る。葉佩が振り返った。

「や、大和ちゃん！」

「ん、どうした、葉佩」

「後で、ヤマ張ったとこ、コピーして渡すね〜！」

「おう、期待してるぞ」

「うん！」

葉佩はそのままの足でどこかに行った。

「……九ちゃん……」

苦笑する八千穂に、夕薙は唇の端に僅かな笑みを浮かべる。

「……葉佩さん、何をしているの？」

ドキン！ と心臓が飛び跳ねた。葉佩はゆっくりとそちらを振り返る。白岐が不思議そうに葉佩を見下ろしているのではないか。チャイムが鳴った後の踊り場。屋上に通じる階段の一番下に座っていた葉佩がボソボソと喋っていたからだ。

「あ、幽花ちゃん……」

「アンリさんだけ？ 彩さんはいないの？」

「へ？」

——何で知ってるんですか——ッ？！

顔に描かれている。

「アンリさん、泣いているの？」

尋ねた白岐にアンリは「うん」と小さく頷く。「知ってたんだね。それならいいや」と葉佩は白岐に事情を説明した。

「何でも、彩と喧嘩したんだって……。この間怖い思いしたのに、また廃屋街に行こうとしたアンリを彩が止めたらしいんだけど……。アンリが行くって聞かなかっただけらしいんだよね。そしたら、彩が『知らない』ってどっか行っちゃったって。……。アンリ、いきなり心細くなったらしくてね、さっき教室覗いてるのに気付いて……」

「……そう」

「彩は泣きたいことがあると一人で泣くコだから……。どこか一人になれるところに行ったんだと思うんだ」

白岐は僅かに首を傾げ、ゆるりと一つ頷いた。

「……温室……」

「温室？ 彩が？」

「ええ。……行ってみましょう」

白岐は葉佩に背を向けて階段を下り始めた。

「待って待って〜！」

葉佩はメソメソ泣いているアンリを背負い、白岐の後を追う。細い彼女の背は常に凜とした空気に包まれ、神聖だった。

温室の鍵が開いていた。

彩は温室の中に入ると、リュックを外し、猫スーツを脱いで端の方に寄せる。

「……く……ひっく……」

泣きながら、温室の中を歩いた。

たくさんの植物があり、彩が前に見上げたブーゲンビリアがまだ鮮やかな赤い苞を一面につけている。

「……ひっ……く……」

アンリが危ない目に遭うからと思って、一生懸命止めたのに、アンリは聞かなかった。一生懸命な彩の気持ちを踏みにじられた気がして、泣きたくなった。

「知らない……」

アンリを置いて校舎を出ると、めそめそと泣きながら温室に来たのである。

白岐がいるかもしれない。そんなことを考えながら。白岐なら、何か話を聞いてくれそうな気がした。傍にいても何も言わなさそうだし、植物の話をたくさんしてくれるかもしれない。

そんなことを考えた。

葉の手触りがまるでビニールのようなアカンサスが時期外れの花を咲かせている。彩の背丈ほどもある花穂に見入りながら、涙はやはりポロポロと零れ落ちた。

ラベンダーの大きな株もあった。全草から香りが漂っているが、皆守のラベンダーとは香りが違う。そして、それは彩の背丈よりもずっと大きかった。

「……！」

音がした。

彩は咄嗟に草むらの中に飛び込んで身を隠す。

――父……

白岐と、血相を変えた父、そして、恐らく背に背負われているであろうアンリの三人が温室に来た音だったようだ。

葉佩はぐるりと温室内を見回した。

「あ、きぐるみ……」

彩の猫スーツが畳んで置いてあった。

「アンリ、ちょっと下りてくれる？」

「……うん」

葉佩は猫スーツとリュックを回収し、白岐を見る。

「彩、いるねエ」

「そうでしょう？」

白岐は一箇所を指差す。

「あそこに」

突然指を差された彩は驚いて尻餅をついた。ガサッとラベンダーの茂みが動き、葉のようなラ

ベンダーのような、あまりいい香りとはいえない匂いを周囲に撒き散らす。

「彩」

葉佩はそちらに向かって手を伸ばす。

「彩、おいで」

彩の手が茂みから伸び、葉佩の手を握る。

「……父……」

「彩……アンリを止めてくれたんだってねエ……ありがとね」

「父……！」

彩は葉佩に抱きつくと、小さく肩を震わせる。

白岐はアンリの頭を撫で、言う。

「よかったわね……」

「……幽花姉ちゃん……」

「心配していたのでしょうか……？」

「……うん……」

「……無茶をしては、駄目よ」

「うん……」

葉佩は彩の頭を撫でながら言う。

「ねエ、彩。……何かあれば、パパに言うんだよ。……パパはそのためにいるんだからね」

「うん……」

「ん。……ルイちゃんが心配してるといけないから、保健室に帰ろうねエ」

アンリは一人、しょぼくれていた。

温室に残るという白岐を残し、三人は校舎へと戻る。その道すがら。

「……パパは、僕と彩のどちらが大事なの？」

「え？」

「……僕と彩、どちらが好きなの？」

「どっちなんてないですよ。二人とも俺の息子だもの」

「……」

「アンリ、どうしたの？」

「……うエ～ん……」

泣き出したアンリに葉佩は心底困り果てた気がして眉を曇らせる。

彩は少し俯くと、使い慣れた言語で言った。

「僕はお父さんの本当の子供じゃないから、きっと、アンリの方が大事にされてる」

「ちょ……！ 彩……ッ?!」

彩は続ける。

「僕、甲太郎お兄ちゃんに頼んで寮にいる。……お父さんとアンリはお家に帰っていいよ」

「どうしてそうなるの？ 彩？ どうしたの？」

それ以上、彩は言わなかった。

「親父は部活か」

「.....うん」

「.....しかし、何で俺がここにいるとわかった？」

「彩、わかる.....」

彩はボソボソと皆守の傍で呟いている。

夕焼けに照らされる屋上。壁に背を預けて夕焼けを眺めている皆守の隣に、膝を抱えた猫スーツの彩がいる。羊リュックの中から箱ティッシュを取り出し、皆守は彩の顔中の涙と、鼻水を拭いた。

「.....アンリもなァ.....何があったんだか.....」

「.....彩.....アンリに嫌いになって.....たら.....」

「.....？」

彩の言葉に、皆守は一瞬固まる。妙な日本語だ。先程から彩が語る言葉は、時折皆守を悩ませる。前後の文脈を考えるにも、あまりにもセンテンスが短い。だが、彩の頭の中を考えれば、おのずと答えは出てくる。

「アンリはワガママだからな。.....彩のことを嫌いなわけじゃない」

「.....父、困ってた.....」

「.....だろうな。で？ 俺んどこに来るのか？」

「ダメ？」

「駄目とは言っていない。.....好きにすればいい。晩飯はカレーだぞ」

「.....甘いの」

「.....わかったよ。.....ったく.....」

葉佩は確かに落ち込んでいた。

彩に聞いてもあれ以上の言葉は返ってこなかったし、彩が皆守のところに残ったことで父を独占出来るはずのアンリもずっと泣き通しで手がつけられない。だが、そんな子供たちのことを考えると葉佩まで落ち込んでいるわけにはいかなかった。問題ないように振舞うことしか出来ない。

——これは、反抗期、という奴ですか.....ね？

誰に訊いているわけではないが、心の中でどこかに尋ねている。

「アンリ」

ベッドに潜り込んでずっと泣いているアンリを布団ごと抱き締める。

「今日はパパと一緒に寝よっかねエ。どう？」

「……」

返事は啜り泣きだけ。

「……アンリ……」

——俺が泣きたい……どうしたら……？

「今日は、何か食べたいものある？」

「……オ、オムラ、イ、ス……」

「ん。わかった。中のご飯は何味にする？」

「ケチャップ……」

「了解。……少し、待っててねエ。ご飯にするからねエ」

ベッドから立ち上がった父を追うように、アンリもベッドから出てくる。

「パパ……」

「ん？ どうしたの？」

「パパ……！」

「アンリ？」

「……うエ～ん……」

「アンリ……どうしたの？ 何があったの？」

困り果てた。

「……あれ、彩ちゃん……？」

呼ばれて皆守の部屋に来た取手は、部屋の真ん中にちょこんと座っている彩に目を瞬かせた。

「……どうしてここに？ はっちゃんは……？」

「よう、取手。夕飯まだだろ。カレー食ってけよ」

「あ、うん。ありがとう……」

テーブルの上にはすでに三人分用意してある。

「……アンちゃんもいないんだ……？」

「ああ、いない。……話によると、喧嘩したみたいだな」

「ケンカ違う……」

彩は首を横に振る。

「……明日、葉佩にでも訊けばいいさ。……彩は、日本語で上手く伝えられないからな。……汲み取ってやれないのが気の毒だ」

「……そうだね。……彩ちゃん」

取手は微笑むと彩の頭を撫でる。

「僕でよければ、話し相手になるからね」

「……ありがと……」

彩は小さく頭を下げる。

「明日になれば、また変わるさ」

皆守はテーブルに着くと、彩の頬を撫でた。

「甘めにしておいた。感謝しろよ」

「甲太郎お兄ちゃんのカレー、美味しい。大好き」

ニコッと小さく笑った彩に、取手は「そうだね」と頷き、皆守は照れ隠しなのか、そっぽを向いた。

『彩は泣いてない？』

『泣いてない。おとなしくしてる。ゲームばかりしてるがな』

『それならいいんだけど……』

『アンリは？』

『アンリはずっと泣いてるよ……』

『そうか。彩はアンリに嫌われたと思ってるぞ』

『ウソ！……困ったね。アンリはどう思ってるんだろう』

『俺に訊くな』

『だよねエ。ありがと。彩のことよろしく』

『昼飯と晩飯、おごれよ』

『了解』

皆守とのメールのやり取りの一部始終だ。

葉佩のベッドの中に、薄手の牛柄きぐるみパジャマを着たアンリがいた。父のメールの中身を覗くことなく、ただ、くっついてる。

不意に、アンリが葉佩を呼んだ。

「パパ……」

「ん？ アンリ、どうしたの？」

泣きすぎて、鼻の頭と頬が赤くなって、全体的に腫れぼったいような顔をしている。色が白いため、とかく目立った。涙を堰き止める堤防はとうの昔に決壊しているから、アンリはまた目にいっぱい涙をためて葉佩を見上げている。

「……僕、彩に嫌われちゃったのかな……」

「どうして、そう思うの？」

H. A. N. Tを枕の下に押し込め、アンリの額にコツンと自分の額をつける。

「だって……パパに『僕と彩、どっちが好き？』って訊いたら、彩、すごく悲しそうな顔したの」

「……」

「パパは彩をすぐに捜しに行ったでしょ？……僕がもし、また廃屋街に行ったら、パパ、捜してくれるのかなって……。すごく怒られて、パパにまで嫌われたらどうしようって……いっぱい

考えてたらわかんなくなっちゃった……。パパは彩のこと、ギューしたけど……。僕のことギューしてくれなかった……」

「アンリ……」

葉佩は眉を八の字にしてアンリを懐にギュッと抱き締める。

「ごめん……。パパが悪かったね。気付かなくてごめんねエ……」

「パパ……」

アンリはぐじゅッと涙をこぼし、父の浴衣に顔を押し付けた。

一方、天香學園男子寮。

「いいか、彩」

「うん」

「カレーというのは、最低四つのスパイスで出来る」

「うん」

「クミン、ターメリック、コリアンダー、チリの四種類だ。これがベースになる。これにマスタードシードが入ったり、シナモンが入ったり、ベイリーフ、カレーリーフなんかが入ったりするんだ」

「うん。……ふア～……」

「眠いのか？」

「……甲太郎お兄ちゃんのお話、楽しい。彩、たくさんたくさん覚える。嬉しい」

「そうか。ならいいが。でな……」

子守唄代わりに、延々とカレー蘆薈を彩に傾けていく皆守は、パジャマ代わりに借りた皆守のTシャツに袖を通した彩を見る。半分眠そうだ。

「豆カレーにはヒングという……」

それから五分ほど喋っていたが、ヒングまで話が来たとき、彩はスヤスヤと眠りに就いた。

「……俺も寝るか」

大きな欠伸を一つ。

明日は一体どうするのだろうか。

葉佩のバタバタで、見ようと思っていた九十六年度の卒業アルバムも確認出来ていない。

アンリが元に戻っていれば、また彩と二人で手を繋いで校内をあちこち見て回るのだろうか。

たかが子供の喧嘩に振り回される親。――いや、子供が大事だからこそ、振り回されているのかもしれない。

そんなことを思い、隣でスヤスヤと寝息を立てている彩を見つめる。

「葉佩が親で、お前、幸せか？」

皆守は僅かに眉間に皺を寄せるが、

「……俺だったら、あんな親は――」

苦笑に変わっていた。

「願い下げだぜ」

「あらら？ おはようございますウ～、皆守くん」

マミーズの店先を掃除していた舞草が顔を上げる。

「よう」

「九龍くんは一緒じゃないんですか～？」

「息子なら一緒だ」

「あ～、どっちの息子さんですか？ 影があるけど、一人だけですよね？」

「彩の方だな」

舞草はニコッと笑うと、彩がいる辺りに手を伸ばした。

「あ、フカフカしたものが！」

「声がデカイんだよ……ったく……」

ぼやいた皆守の横から、小さな声がした。

「……おはよう」

彩の声に、舞草は「おはようございま～す」と頭を下げ、着ぐるみの彩をギュッと抱き締める

。

「フカフカ～！」

「だから、騒ぐなって……」

「あ、みっなかっみク～ン！」

背後から聞こえてきたよく通る声に、皆守の眉間に深い深い皺が寄る。

「……うるさいのが増えた……」

「あ、八千穂さ～ん！」

「奈々子チャ～ン！」

どうして遠くから挨拶するのだろうか……皆守にはわからない。そして、近付いてきてもそのままのテンションで話し始める。下を向くと、彩の影がなくなっていた。

「んな！ あいつどこ行った!？」

「わ、ビックリした～……どしたの？ 皆守クン？」

辺りを見回しても、光学迷彩のこと、早々見つかるものではない。内心大きく舌打ちをして皆守は八千穂を見た。

「彩が、いなくなった……」

「えエ～?!」

「捜してくる」

「あ、あたしも～！」

バッグを担ぎ直した八千穂は舞草に「じゃ、またね～！」と手を振って、走り出した皆守の後を追った。

「あ、気をつけてくださいね～！ 頑張っ～て～！」

舞草の声援を背に受けて走り出したはいいが、皆守に当てがあるわけではない。

「彩が行きそうなところ……」

「昨日は温室にいたって、九ちゃんが行ってた」

「温室か……開いてるのか？」

「どうかな～……白岐さんがいれば開いてるかも……」

「白岐か……」

中庭の向こう。ガラス張りの温室の中に、白岐の姿が見えた。独りでの温室のドアが開き、閉まる。白岐は何か気付いたようにそちらを向くと誰かと会話しているような素振りを見せている。

「いるな」

「うん。……どうしよう、皆守クン……」

「白岐に預けておけば問題ないだろ。……彩なら、自分から危ない場所に行くこともないだろうし、何かあれば、瑞麗にでも泣きつくさ」

「……だといいいけど……」

珍しく心配顔でいる八千穂だったが、「あ」と明後日の方を指差した。

「九ちゃんだ」

「……葉佩だな」

アロマに火を点け、皆守はようやく人心地ついたというように大きく溜息を吐いた。

どうにも、この親子に振り回されている。いつかビシッとやってやらなければ……というよりも、皆守ならば墓の下に埋めることも可能なのだが、どうしてそれをしないのか。

「八千穂」

「なァに？」

「教室に行くぞ」

「うん。わかった。……九チャ～ン！ おっはよ～！」

二人の方を振り向いた葉佩の顔はひどく疲れていた。無理矢理浮かべる笑顔がまた痛々しい。一度寮に行ったのか、すでに制服姿だ。

「……おはよう」

葉佩は軽く手を挙げる。

「どうしたよ、オッサン」

「オッサンじゃないよ～……」

声に張りが無い葉佩は苦笑して、「はァ」と溜息を吐いた。

「アンリは？」

「寮にいるって。……彩と顔を合わせたくないみたい。……彩に嫌われたんだと思い込んでて…
…あのコね、思い込むと一直線なんだよね……」

一晩中、アンリを抱きかかえ、宥めすかしていたのだろう。眠そうな目が物語っている。

「教室に行ったら……寝ます……」

「そうしろ、そうしろ。……屋上で寝るか？ 俺もどうせ屋上だ」

「も～……二人とも授業受けようよ……」

八千穂の溜息交じりの声は、葉佩と皆守の耳には届かない。
それもまた、いつものことだった。

時をかけて攻略する少女～ただし、運動不足

十月二十二日。

彩とアンリは相変わらずだった。

アンリは父と一緒におり、彩は皆守、取手、黒塚と男子寮を渡り歩いている。

「……もう、金曜日だよ……」

げっそりした葉佩の顔。随分糞れたような印象を受ける。

毎日誰かしらに丁重にもてなされ、様々な話を聞いている彩だけが、やたらと生き生きしているのがミソである。

アンリはこれまた相変わらず、彩と入れ違いに男子寮に引きこもっている。

「アンリはどうしてそんなに頑ななんだ？」

皆守の疑問ももつともである。あまりにも長い。

「あのコね、ホント、疑い出すと長いんだよ。言ったでしょ。思い込んだら一直線だって。……でもね」

皆守と手を繋いでいるらしい彩の頭に手を置き、葉佩は言う。

「アンリは彩に会いたいんだよ。寝言で彩のこと呼ぶんだ。『彩、ごめんね』って」

校舎に近付くにつれ、生徒の声が大きくなって来る。何か、バタバタとしている雰囲気伝わってきっていた。

「何だ？」

皆守は斜に啞えたアロマパイプを空いている方の手で外すと、啞え直してから声のする方へと視線を向ける。

「向こうだねエ」

葉佩も視線を巡らせ――

「え?!」

「……何だ、おい……とんでもないな……」

「二つ……」

彩の小さな声が聞こえる。

そう。彩の言うとおりに、石が真っ二つに割れ、その傍にぐったりした男子生徒が倒れている。生徒たちは、その男子生徒の周りを十重二十重と取り囲み、じっと見下ろす。

それだけにとどまっているのは、男子生徒がどうやら放課後に襲われたらしいということがわかっているからだ。私服姿で校舎のすぐ脇で倒れているとなれば、施錠されてから何らかの方法で校舎内に入ろうとした、校則を破ろうとした、という過程が成り立つ。

學園内では犯罪者のようなもの。関わりたくはないが、好奇心には勝てない。

「……葉佩」

凜とした女性の声に、葉佩は振り返った。

「ああ、ルイ先生」

「大方の予想通り、この生徒は夜間に襲撃されたらしい。夕方にはこんなところに倒れていなか

ったようだからな」

「だろうね。……あんな大きな石まで真っ二つ。あ～あ、至人ちゃんの嘆き悲しむ顔が見えるよ
うだよ……」

わざとらしく肩を竦める葉佩に瑞麗は言う。

「これは警告のようなものだ」

「うん。わかってるよ。……さて、さて……今晚辺り、お祭りかねエ」

「さァな。せいぜい気をつけることだ。何かあれば、遠慮なく保健室のドアを叩くがいい」

「そうします」

小声でボソボソと言葉を交わした後、瑞麗は生徒たちの間を通り、倒れている生徒の傍へと歩
み寄った。

「……面倒臭いことだ」

アロマの煙が漂う。皆守の呟きに葉佩は「そう？」と首を傾げた。

「俺は手の内を見せてもらったから、面倒だってことはないけれどねエ」

そして、「んふふ」と笑う。

「彩、保健室に行つてなさい」

「……うん」

「何かあれば、教室か、屋上に」

「……うん」

彩の影が、ペタペタと校舎の中へ入っていくのを見送り、葉佩と皆守は揃って腕を組むと溜息
を吐く。

「……すごいよねエ。《執行委員》……」

「まァなァ……あ～……眠い……」

「教室行ったら、朝寝と洒落込みたいところだよ、俺もねエ」

「そうはさせませ～ん！」

グッと皆守と葉佩の肩の間から八千穂が顔を出し、二人の腕をギュッと掴んだ。

「おっはよ～！」

「出た……」

うんざりしたような皆守の声。葉佩はニコッと微笑んで八千穂を見る。

「おはよう、明日香ちゃん」

「えへへッ。おっはよ～。……ね、ね、ところで何かあったの?！」

「ああ、ちょっとな。石が真っ二つになって、その傍に男子生徒が倒れてた。それだけだ」

「へ～、すごいね～」

すごいね～、の一言で済ませた八千穂に葉佩は苦笑して、皆守と八千穂を見た。

「さ、教室に行こう」

「は～い」

「はいはい……眠い……」

葉佩と皆守の腕にぶら下がっている八千穂は、「あ」と何かを思い出したらしく、目をキラキ

ラさせて言った。

「あのねあのね！ 来る途中でテニス部の後輩に聞いた話があるんだけどね」

「ああ、教室に行ったらな」

「も～、早く話したいのに～！」

「うるさい女だな……」

「皆守クンが年寄り臭いの！」

「……な、何を……?! 葉佩と一緒にするな！」

「ヒド！ 何その言い草！」

いつもの朝のはずだった。

まさかあんなことになるなど、この時点では誰も何も、考えつかなかったのだ。

「……ツチノコ……」

皆守と八千穂の絵を見て――その絵を描いた画伯二人の自信満々な顔を見て、葉佩はその場を逃げ出したくなった。

「どっちも違うよ～！」

頭を抱えて教卓の上に額をぶつける。

「ツチノコはそんな生物じゃない～！ 二人とも、わかってないよ！ ツチノコって言ったら、地域によっては億単位の懸賞金も出てるUMAなの！ そんな可愛らしいぬいぐるみみたいな蛇じゃないし、そんな鬼と金太郎を足して二で割ったような何かでもないの～！」

皆守と八千穂の肘鉄が同時に葉佩の後頭部に降った。

「だッ！」

「お前、自分が何を言ってるか、わかってるのか？ 当然わかってるよな。お前が間違えている」

アロマをぷかぷかさせている皆守の目は真剣だ。

「九ちゃん、私が描いたの似てるよね？」

ニッコリ笑う八千穂の頬に浮かぶ笑顔もどこか真剣だ。

「古人曰く――」

その声に、皆守と八千穂は揃って顔を上げ、葉佩の上からようやく肘をどかした。

「『我々は、皆、真理のために闘っている』」

この言葉に真正面から反発したのは八千穂だったが、この後の皆守の行動を鑑みるに、恐らく、八千穂よりも腹が立っていたのだろう。七瀬の理論に真っ向から対立する理論でもって彼女の言葉を叩き潰すという、何とも大人気ないことをやり遂げた。

「一時限目、音楽だったな……先、行ってるぞ」

言うだけ言って、皆守は音楽室へと向かう。

「……甲太郎ちゃん、何であそこまで……」

仕方ないコだよーと葉佩はぼやく。

「随分だよね～……月魅だって、そんな風に言いたかったわけじゃないのに、揚げ足取るみたいにあんなこと言ってさ～……」

そう言った八千穂だったが、「ふ～」と溜息を吐くと七瀬を見た。

「じゃ、あたしも音楽室行くね。……待つて～、皆守ク～ン！」

「やれやれ、甲太郎ちゃんにも困ったもんだねエ」

「いえ、私は平気ですから……」

葉佩に慰められて頬を染める七瀬は小さく頭を下げた。

「では、私はこれで……」

教室を出ていく彼女の背中を見送り、葉佩は自分も音楽室に行こうと、席へ教科書を取りに向う一歩目を出した、そのとき。

「どけ、女」

「あ……すみません……」

葉佩の視線が七瀬の方を見た。和服を着た男に頭を下げて、その脇を足早に通り過ぎていこうとしている。和服の男の目が葉佩に向いた。

「……おや……？」

隻眼、眼帯の男は自分を見つめる葉佩に気づき、つかつかと教室に入ってくると、こう言った。

「お初にお目にかかる。拙者参之『びい』に世話になっておる真理野剣介と申す。つかぬことを訊くが、そなたの名前は？」

「葉佩九龍だよ」

しれっとした葉佩の答え。真理野の目が眇められる。

「そうか。やはり、そなたが……」

真理野との第一種接近遭遇は、真理野が己の正体を潔くさらしたところで雛川の出現により中断された。――が、こっちはこっちで、どうにもよくわからない方向へ進んでいる。

「学校では話せない内容なの……。今晚七時に、私の家に来てくれる？」

真理野の告白など頭からすっ飛びそうなほどに驚いていた。葉佩の笑顔が消えたのだから、その衝撃は推して知るべしである。

「……お願いね？」

「あ、は、はは、は、はははい」

「あら、もう、こんな時間。授業に遅れちゃうわね。引き止めてごめんなさい」

「え、あ、はい……」

教室を出て行く雛川の背中を見送り、葉佩は雛川の話というものがどんなものなのか、頭の中で描いてみる。

「う～ん……大体、そんなもんかねエ……」

學園のことか……自分のことか。

「まさか【愛】の――!?」

「あ、九ちゃん、まだこんなところにいた！」

「ひィ！」

ありえないことを考えたのを見咎められた気がして飛び上がりそうになったが、出来る限り平静を保って八千穂に向き直る。

「おや、明日香ちゃん、どうしたの」

「いつまで経っても来ないから、迎えに来たよ！」

「あ、ごめんごめん」

「……でね、ちょっと別件もあって」

「？」

「彩ちゃんが、音楽室に来てるの」

「はひーッ?!」

八千穂は素っ頓狂な声を上げた葉佩の首根っこに腕をひっかけ、言う。

「教室の隅っこで授業受けたいんだって。ちょうど皆守クンと葉佩クンの傍だからいいかな～って」

「いいかな～……て」

そこまで言ったとき、予鈴が鳴り響いた。

「大変大変！ 時間時間！」

「ちょ！ 待……ッ！」

葉佩はそのまま音楽室に連行され、彩と一緒に音楽の授業を受けることとなった。

昼休みに入っすぐ、葉佩は廊下で一人の生徒と行き会った。

夕薙大和。

酷く現実主義の彼を見る葉佩の目は、いつもと変わらない。

「UMAなんてものは、その存在を発見されたためしがない。『明らかにならない』というのは、『明らかに出来ない』という意味もあるだろう。すべてが不明なまま。それを考えれば、奇跡だの、呪いだのと一緒に、UFOやUMAなどは存在しない、ということだ」

制服の裾を強く引く気配。彩が明らかに夕薙の意見に反発しているが、葉佩はにこやかに頷く。

「そうだねエ」

一言。

夕薙は葉佩にかく語りながら、自分自身に何かを言い聞かせているように見える。『奇跡だの、呪いなどは存在しない』――口に出して言わなければならないほどの何かがあるのだろう。

否定を並べるには、それなりの理由がある。肯定するのは簡単なのだ。ただ、首を縦に振ればいい。否定するのは理由を述べねばならないという労力が要る。だからというわけではないが、葉佩は首を縦に振った。首を横に振る理由が見当たらなかったからかもしれない。

彩にしてみれば、「夕薙という人は、なんて面白くない人間だろう！」と声を大にして叫びたいに違いない。自分の父は、「UMA、UFO、いるに決まってる！」と言うタイプの人間だからだ。

けれど、その父は夕薙の意見に頷き、その後も二言三言会話をしながら、夕薙を伺うように言葉を選んで話をしている。皆守や、八千穂と話すときのような快活さはなかった。どこか、何か、引っ掛かっている。そんな話し方である。

不意に、彩の頭を誰かが撫でた。はっとして目を上げると白岐の白い指が目の前を行き過ぎていく。

「やア、白岐」

「こんにちは、幽花ちゃん」

「こんにちは。……そこをどいてくれる？」

彩は葉佩の制服を引っ張った。葉佩は頷いて、「どうぞ」と白岐に道を開けたが、夕薙は違った。

「！」

彩の手が葉佩の腕を引っ掴む。ガクッと体が引っ張られかけるが、葉佩はじっと我慢して、引きつる微笑みを浮かべながら、彩の体を、「落ち着きなさい」と言いたげに、ポンポンと優しく叩く。

葉佩は床を見た。

窓から差し込む光に、彩の猫スーツの影がプルプルと震えている。

「……」

夕薙と話していた白岐の視線が葉佩を見て、その後ろで震えている彩を見る。そして、小さく微笑んだ。

「……葉佩さんが一緒なら、考えてもいいわ」

彩は白岐の笑顔を見て、父を掴む手の力を抜く。葉佩は白岐に答えた。

「俺は、いつでも、喜んで」

屋上――一昼。

皆守の隣に座った彩は、黙々と弁当を食べている。葉佩は空を見上げる皆守を見た。

「……どうしたの？」

「……こんな牢獄から抜け出して、どっか遠いところに行ってみたくなるな……」

彩は食事の手を止め、ぽん、と肉球付きの手で皆守の膝を叩いた。

「何だよ？」

「……彩も」

「そうか。彩もか。葉佩は？」

「俺も、だよ。……世界は広いからねエ。自分で歩ける限りは、どこまでも、どこまでも、行きたくなる。……元々、ひとところに定住出来る人間でもないから尚更だよ。……天香に卒業までいたいなんて、そこまで長くいたいなんて思うのは初めてだからねエ。けれど、そう言われちゃうと、どっか遠くに行きたくなるねエ～……」

「やっぱり、そうだよな。……風の向くまま、気の向くまま、流されていくのも悪くないよな……」

風によって形が変わっていく雲。彩は空を見上げ、口の中の卵焼きを飲み込んで言う。

「彩、戦争で日本に来た。甲太郎お兄ちゃんたちと会えた。……よかった」

皆守は葉佩が持ってきた小さなスコッチエッグをフォークで突きながら、彩を見ていた。

「……そう、思うか」

「……うん。……戦争、怖い……でも、今、楽しい」

「そうか……」

「だから……早く……アンリと……お弁当食べたい……」

めそっ、と彩は目にいっぱい涙をためる。

くしゃくしゃ、と猫スーツの上から彩の頭を撫で、皆守は自分を見つめる葉佩を見て口を曲げた。

「何だよ」

「ううん。……運命なんてものは、どっちにどう転がるかなんてわかりゃしないんだよねエ。政変で焼け出されなければ、彩もアンリも日本に来ることはなかった。俺が《秘宝》を飲まなければ、甲太郎ちゃんたちには会えなかった。……『人生万事、塞翁が馬』ですよ。楽しまなきゃもったいない。遊園地のアトラクションみたいなものなんだよねエ。怖いことも、楽しいことも、様々にある。だから、人生は投げたらいけない。……ね？ もったいないでしょ？」

言葉を切った葉佩は、彩のお茶の蓋を開ける。

「だから、アンリも一時だけ。……たまたま、今、そういうふうになっているだけ。……そう思ってる。だから、彩。大丈夫。アンリは彩のこと嫌いになってない。安心おし」

そう言って、葉佩は溜息をつく。

「そう、俺は信じたいんだよ」

「信じたいといえば」

皆守はカレーパンの袋をまるめ、葉佩の差し出したゴミ袋に入れてから言う。

「しかし、ここに来るまで何人にツチノコの話を書かされたことか。そんなに信じたいのか、アレの存在を」

「願いが叶うらしいからねエ～。懸賞金かかっているし」

葉佩は笑っている。

「それにしたって、会う人間、会う人間。ツチノコ、ツチノコ……鬱陶しいったらない」

皆守はすっかり耳にタコ状態らしい。彩は父と友人の会話を聞きながら首を傾げていた。

「……父」

「ん？」

「ツチノコ、何？」

「あア、彩は知らないんだねエ」

葉佩は弁当箱を片付ける。

「ツチノコっていうのはね、こんな形の……」

いつも持ち歩いているクロスワードパズル本の片隅に絵を描いていく。なかなか写実的で上手い。葉佩は芸術系に特化しているようだ。

「蛇——と言われているね。まア、ノヅチじゃないかとか、いろいろ言われてはいるけれど、実物を見た人はいないんだよ」

「……蛇……嫌い……」

真っ青な顔をして彩は皆守の傍に寄る。

「いない。安心しろ。……曲がりなりにも新宿だぞ。東京のド真ん中にそんなもんがあるか」

吐き捨てる皆守に、葉佩は面白そうに笑った。

「おやおや。大和ちゃんと同じこと言ってるよ」

「うるさいな」

「……まア、いるいないは別にして、この学園は本当に娯楽に飢えてるよねエ……。上から下へのお祭り騒ぎだよ。明日香ちゃんなんて捕まえる気満々でいるからね。さっき見たら、虫網持って走り回ってたよ」

「八千穂はそういう奴だ。……ああ、そういや彩は加賀智は平気なのにツチノコは嫌なんだな」

「……嫌い……」

「ああ、わかったわかった。そんな顔するな」

嫌悪と恐怖の入り混じった、何とも形容し難い顔をしている彩の頭を撫でた皆守は体を起こした。

「そろそろ、昼休みも終わるか？」

「おや。じゃあ、彩。保健室に戻っていてね」

「うん」

「じゃあ、行こうか、甲太郎ちゃん」

「あア。……面倒臭い……早退するかな……彩を保健室に送りながら考えるか」

その日、皆守が葉佩を最後に目撃したのは、階下へ向かう皆守と彩に、いつも通りの優しい微笑みを浮かべて手を振った姿だった。

パニックを起こしていた。鏡に映った自分は見慣れた優男ではなく、文学少女だったのだ。

「お前が七瀬じゃない？ ……ノイローゼか何かか？ そういう話は瑞麗にでもするんだな」

「ほ、本当なんだよ！ 俺は——！」

「ああ、はいはい。そろそろ五時限目が始まるぞ。お前は教室に戻った方がいいんじゃないか？
俺は早退するが。これからは不審者にせいぜい気を付けろ。……じゃあな」

あまりにもな仕打ちだと、神を恨んだ。皆守ならば信じてくれるかもしれないと思ったのが間違いだった。

「甲太郎ちゃんのバカ……」

去り行く皆守の背中に呟いても、その声は聞きなれた自分の声ではない。

「ル、ルイちゃんなら……ルイちゃんなら……」

それこそ、一縷の望みを託すのは瑞麗以外にいなかった。

体が思うように動かない。ああ、もっと早く走れるはず。走れるはず。転びそうだ。大丈夫。でも、違う。月魅ちゃんになるなんて、俺はどこに……入れ替わったのかな……

様々なことが頭を駆け巡っていく。

保健室の戸に手をかけ、開ける。

「……？」

瑞麗が書類から僅かに顔を挙げ、煙管を持つ左手を軽く上げた。

「ああ、葉佩。入りたまえ」

「……」

「？」

瑞麗は振り返り、「七瀬か」と首を傾げた。

「おかしいな。葉佩の氣を感じたのだが……」

「葉佩九龍です！」

「は？」

ポカーンとした瑞麗の口元から煙が立ち上る。

「廊下で月魅ちゃんと正面衝突して、その衝撃でどうも入れ替わっちゃったみたいなんだよ～！」

身振り手振りを交えて七瀬＝葉佩は早口にまくし立てる。

「そうか。お前が葉佩だとすれば、私が感じた氣に間違いなかったわけだな。……興味深い現象だ」

煙管の灰を灰皿に叩き落す瑞麗。いつも彩とアンリがいる衝立の向こうで、ゴソゴソ動いている気配がある。ひょこつと彩が顔を出した。

「……父……？」

彩はトコトコと葉佩の傍により、頷く。

「父。……見える。父の姿、見える」

「彩……」

「彩は『見える』のだろう？ 氣を読むのと同じ原理かも知れんな。まア、とにかく座って私の話を聞け」

気が気でないらしい葉佩は落ち着きなくあちこち視線を飛ばしている。傍らの彩をギュッと抱き締めている姿は、葉佩九龍が初めて見せる未知への恐怖に他ならない。

瑞麗は憐れな相談者に、自らが知る限りの知識から求めうる見解を述べ、こう締めくくった。「慌てるのは当然のことだと思うが、この事実を他者にあまり話さないに越したことはないと思う。お前を屠ろうと狙っている者もあるのだろうか？ ……お前の体——七瀬が心配ならば、これ以上の他言は無用だ。いいな？」

この時点で、葉佩は雛川に謝りのメールを入れようと心に決めた。雛川の悩み相談も重要かもしれないが、《執行委員》である真理野を優先すべきだと《宝探し屋》としての職務意識が頭をもたげていた。それに真理野と雛川の時間は見事にブッキングしている。

ならば、《執行委員》を取るだろう。

「わ、わかったよ、ルイちゃん。……俺にもいろいろと用事があるから、これで……」

「うむ。……気をつけて行けよ」

「うん。ありがとね」

とは言っても、不安で胸がはち切れそうだ。彩はそんな父に言う。

「大丈夫。……彩、父わかる。一緒……」

「ありがとね」

七瀬のふりをして、自分を捜す。

何ともまァ、不思議な感覚である。

幾人かの証言で、自分が——葉佩九龍の体が図書室にいるということを掴んだ。

その間、何気なく葉佩を捜す月魅を演じていたわけだが、さすがに演劇部のトップスタァ。そんなことは『お茶の子さいさい』である。

「月魅ちゃん……？ 月魅ちゃん……」

トントン、と図書室の戸を叩く。

「俺だよ、葉佩だよ……」

ついこの間、彩に読んでやった絵本に似ている。『七匹の子山羊』だったか……

「……は、葉佩、さん……？」

図書室の中から自分の声がした。葉佩の顔が引きつる。自分が女言葉で喋っている。正直、ゾツとした。「顔が見えなくてよかった」と、心底思った。自分が目に涙を溜めて自分を見つめているなんて、考えただけでも怖気が走る。

「葉佩さんにぶつかって、目が覚めたら葉佩さんで、慌てて図書室に入って、鍵を……かけました……。ど、どうしましょう……。もし、もし戻らなかったら……！」

「そんなことお言いでないよ。大丈夫。何とかする」

当てはないが。

口先だけでも言っておかねば、どうにも自分が落ち着かなかった。そう信じたいことを口でいい、自分を納得させる。

——人間、落ち着きが大事だよねエ……

と考えつつも、頭の中は一向にまとまらない。

「葉佩さん、励ましてくださるんですね……ありがとうございます……！ 私、ここで元に戻る方法がないか探してみます。葉佩さんも、私として頑張ってくださいね！」

「うん。……が、頑張るよ……あ、そうだ。俺のポケットの中の物、一通りもらえないかねエ。俺も月魅ちゃんの持ち物をそっちに渡すから」

ドアが少しばかり開き、手が出る程度の隙間が出来た。そこから自分の震える手が寮の部屋の鍵やらH. A. N. Tやらを手渡してくる。少々背筋が寒くなる光景だ。差し出される手が間違はなく自分の手だと思ふのがまた恐ろしい。客観的に自分の手を眺める日が来ると思わなかった。

「月魅ちゃんのポッケの中身、渡しとくねエ～」

葉佩も七瀬に持ち物を渡し、その場を後にした。

――不安だ……

「アンリ？」

皆守は帰って来るなり、葉佩の寮の部屋を覗いた。

「あ、甲太郎兄ちゃん……」

泣きそうな顔をする。皆守は「仕方ないな……」と溜息を吐き、靴を脱いで部屋に上がると、アンリの頭をぼんぼんと撫でた。

「どうした」

「……ひ、一人……寂しい……よ……」

「そうだな。一人は寂しいな」

静かに泣き出したアンリに、皆守は言う。

「なァ。彩も、寂しいって言ってたぞ」

「う、嘘だもん……。彩、僕のこと、もう、きっと嫌いに――」

「そんなことで嫌いになったら、俺はとっくの昔にお前の父親を蹴り殺してるぞ」
事実だ。

蹴り殺すどころか、《墓》の下だ。

「け、蹴り殺……！」

アンリの目が真ん丸に見開かれる。皆守は「はァ……」と大きな溜息を吐き、アロマに火を点ける。通学バッグを置き、綺麗にメイクされた葉佩のベッドの上に容赦なく寝転がった。

「言葉のあやだ。言葉のあや」

「……」

「お前の父親は、確かにいろいろとイライラすることが多々あるが、俺の親友だからな。一回り以上も歳が違う人間に親友も何もないかもしれないが」

「友達？」

「ああ、そういうことだ」

そう言って、大きな欠伸をする皆守。

「アンリ、ゲーム消して昼寝しようぜ。絶対にその方が有意義だ」

「お昼寝？ ゆ〜いぎ？」

「一番いい選択肢ってことだな」

「……うん」

父親であり親友である人間がどういった状況に置かれているのか、この二人はまったくわかっていない。

アロマが終わるのを待っていたかのように、皆守は制服の上だけ脱いで、ベッドに潜り込む。

「なァ、アンリ」

「なァに？」

同じようにベッドに潜り込んできたアンリの青い目が皆守を見た。皆守は言う。

「彩は、会いたがってるぞ」

「……うん……」

「よし。寝ようぜ」

「うん」

七瀬の姿で寮の部屋に戻り――「葉佩さんに用なんです」と適当に言い訳しながら部屋に戻ると、いると思っていたアンリがいない。

「……」

「父」

彩が葉佩の腕を引っ張る。敏い息子が指差したベッドには、どう見ても何者かが昼寝をした跡がある。アンリの背よりも遥かに大きく乱れたベッドは、皆守もいたことを示している。

「ゲーム機ないねエ」

「隣」

「そっか。それなら、心配要らないね。彩も、甲太郎ちゃんのところにいなさい」

「……ついてく」

「彩。今日はダメだよ」

葉佩は屈んで彩と視線を合わせると、至極真面目な顔をした。そして、彼にわかるアラビア語で伝える。

「彩、俺は七瀬ちゃんの体を預かってるんだ。……今日は無理が出来ない。自分の身を護ることで精一杯なんだよ。……だから、甲太郎ちゃんとアンリと待っておいで。……いいね？」

「わかった。……お父さんも、気をつけてね」

「もちろん」

手早く身支度を整えた葉佩は、いつもよりも武器が重く感じるのに辟易しながら、彩を振り返

った。

「いいかい？ 俺は窓から出るから、飛び降りたらダメだよ。俺が出て行ったら、鍵を閉めて、甲太郎ちゃんの部屋に行きなさい」

「うん」

「行ってきます」

窓の傍を縦に走る樋を伝いつつ下りた。いつものように飛び降りることなど出来ない。

それでも、普段の七瀬に比べたらかなり軽い身のこなしで、墓へと向かって走っていく。

「……父……」

窓を閉めて鍵を掛けると、彩はその足で部屋を出て隣室のドアを叩いた。

「……はい」

不愉快そうな皆守の声の後、ドアが開いた。

「……？ ……あ」

影がある。

「入れよ」

影は皆守の部屋に吸い込まれた。彩は光学迷彩を切って猫スーツを脱ぎ、黙って自分を見つめるアンリを見る。

「彩……」

アンリの青い目がうるうると大きく揺れた。

「アンリ……彩、会いたかった」

「彩……」

メソッと泣き出したアンリと、それを宥める彩を部屋に置き、皆守は葉佩の部屋を見に行った。部屋の主は不在で、ドアの鍵は開けっ放しである。預かっている鍵でドアをしっかりと施錠して部屋に戻ると、アンリと彩は、皆守にわからない言葉で会話している。

どこか真剣だ。

「……えッ?!」

叫びそうになったのか、アンリは自分の口に手を当てて、ボソボソと話している彩の声に頷く。

。

「こ、甲太郎兄ちゃん……」

アンリは顔を上げ、皆守を呼ぶ。

「何だよ？ 腹でも減ったのか？」

「ち、違うの。パパ……今ね、『コジンイワク』のお姉ちゃんに入れ替わってるんだって……」

彩が……ルイ先生もそう言ってたって……」

「な、何?!」

『甲太郎ちゃん、俺だよ、葉佩九龍だよ!』

七瀬が葉佩の真似を出来るはずもない。あんなに真に迫った演技など七瀬には無理だ。

「は、葉佩は……七瀬に……?!」

「彩、父と帰ってきた……。月魅お姉ちゃんだったけど……」

「あ、あァ……それじゃあ……本当だったのか……」

「え?!」

アンリと彩が皆守をジッと見る。

「あ……」

皆守は居心地悪そうに頬を搔き、アロマに火をつけた。

「……じ、実はな……俺は……葉佩に会った……」

「で? どしたの?」

「信じなかった。冗談だと一いつて、七瀬が冗談言うような奴じゃないのは知ってるはずだろう、俺も……!」

「甲太郎兄ちゃん、どうしよう……! パパ、一人だよ……!」

アンリはベソをかきながら皆守を見つめる。彩は皆守のことをじっと静かに見つめている。

「アンリ、彩」

「な、なァに?」

「飯にしようぜ。こうしててもしょうがないだろ。何かあれば、メールでも何でもしてくるさ」
たぶん、だが。

遺跡の広間で、入念に準備体操をした。そうでもしなければ、どうにも動けそうもなかったのだ。

「普段、本ばかり読んでるコだから仕方ないけれどねエ……」

前屈しながら思う。

「イタタタタ……手、手が床につかない……」

葉佩の体は非常に柔らかい。苦もなく前屈が出来るため、この間接と筋の痛みはしばらくぶりである。

風呂に入った後、アンリと彩と一緒に柔軟運動をしている賜物なのだが、七瀬はそんなことはしまい。

「と、とにかく、少しでも動いてから行こう……!」

とりあえず、葉佩は広間を二周走ってから、潜ることにした。

真理野がH. A. N. Tに送ってきた卑劣な一少々首を傾げざるをえない挑戦状の時間には間に合うはずだ。

「お邪魔します」

皆守の部屋にやってきた取手は、揃ってゲームをしているアンリと彩を見て、

「ああ、仲直りしたんだね」

と微笑ましそうに頷き、皆守に訊く。

「はっちゃんは？ 買い物かい？」

「遺跡だ」

「え？」

取手はそこで、皆守から信じられない事実を耳にし、

「ああ。そういえば七瀬さん、様子がおかしかった気がする」

と、思いつく。

「パパ、大丈夫かなァ……」

呟くアンリに彩は頷く。

「父、大丈夫」

「とりあえず、飯にするぞ」

「カレー？」

「ああ、今日はポークカレーだ。ビネガーでマリネした……」

皆守の説明は彩とアンリと取手がスプーンを握るまで続いた。

「……も、もう無理……！」

広間半周で葉佩を音を上げた。

「ひ、酷いな……酷い運動不足だよ……！」

ゼーゼーと息を吐きながら、葉佩は一端魂の井戸に向かう。

「え〜と、確かあったはず……」

《シストの弾み車》と《孔雀の羽》を調合し、《浮遊輪》を作る。

「これで、少しは楽になる……といいなァ……」

希望的観測である。

葉佩はそれ装備して真理野の区画に進むことにした。

「……？」

スプーンを咥えたまま、皆守は鳴っている携帯を手にする。

「お行儀悪いよ、皆守君」

「うるさいな。わかったよ」

取手の注意にスプーンを置いてから、皆守は携帯を開ける。

「葉佩だ」

「パパ？」

「父……何？」

自分にしがみついて携帯を覗き込む子供二人に辟易しつつ、メールを開けた。

『酷いよ、酷い運動不足だよ……！

月魅ちゃんには、後でそう言わないと……！

運動不足にやられそう……（笑）』

案外、無事らしい。

「七瀬は、やっぱり運動不足か」

「文学部だしね、体育も得意じゃないらしいよ」

「それじゃ仕方ないな。みんながみんな八千穂のはずもない」

パチン、と携帯を閉じ、アンリと彩を座らせて食事を再開する。

「……ま、何事もないことを祈るさ」

「因幡の白兔の話かア……」

『大きな袋を肩に下げ』で始まる、因幡の白兔の童謡。それを口ずさみながら扉に手をかける。

「おやおや」

水蛭子がいた。

構えるM92FMA YAのグリップの感触が違う。感触が違うというより、握り心地が違うというべきか。手の大きさが違うのだから、握り心地に差が出てきても仕方ないことなのだろうが。

水蛭子は蛙に近い形だが異形である。

「水蛭子——恵比寿さんねエ……。大黒さんのエリアに出てくる辺り、因縁めいた感じで考えられますねエ」

伊邪那岐、伊邪那美の初めての子供が水蛭子である。生まれてすぐ葦舟に乗せて流されてしまったため、子供の数には入れられていない。

水蛭子と書けば《ヒルコ》だ。水が付かないと蛭子と書いても《ヒルコ》と読むのは当然ながら、《エビス》とも読む。《エビス》といえは大国主の息子の事代主が《恵比寿》であると言われている。

水蛭子も恵比寿も水で死んだ。その辺りから、水死体を恵比寿さんと呼ぶ地域もあるというから、日本語というのは不思議であるし、神話が根深く根付いた土地柄もあるのだろう。

「うん、それにしても気持ち悪いね」

水蛭子の盛り上がった脛がグリグリと蠢いている。地に付かんばかりの腹は不気味に顫動している。

「見てくれはよくないねエ。彩が見たら泣いちゃうよ」

両手に握られたM92FMA YAが火を噴いた。

「……パパ、いつ帰って来るのかなァ……」

アンリは彩にベッタリくっついて離れない。距離感が今一つ掴めていないのは明らかである。

「父、すぐ帰る」

彩はぽふぽふとアンリの頭を撫で、ゲームに戻る。相変わらず、ハイテンションな歌に合わせて鼻歌を歌いながら塊を転がしていた。物の配置をすべて記憶しているのか、動きに全く無駄がない。

「そういえば、皆守君」

取手は音楽の宿題を皆守の分まで片付けながら訊いた。

「はっちゃん、今、七瀬さんなんだよね？」

「ああ、そうなるな」

「……当の七瀬さんはどこにいるんだろう？」

「……」

皆守の視線が一拍置いてから取手を向いた。

「何？」

「いや、だからね、『七瀬さんはどこにいるんだろうな』って」

「……」

現在の七瀬の外見は、上背が百八十センチある葉佩九龍だ。あの、目立つ外見の葉佩九龍だ。

「……校舎に残ってるとか……？」

「下校時刻には出てると思うけど……」

「……おい、まさかとは思うんだが、女子寮に帰ってないだろうな……？」

「僕に訊かれても困るよ……」

「いらん誤解を生むだろ？」

「例えば？」

「あ～……七瀬と葉佩が付き合ってるとか？ それを八千穂が誤解するとか？」

「……」

取手の頬がヒクリと反応した。

「……怖いね……」

「……八千穂に確認取ってみるか……」

「そ、そうだね、とりあえず……」

皆守の携帯のディスプレイを覗き込む取手。

『受信者：八千穂明日香』

送信者：皆守甲太郎

件名:つかぬ事を訊くが

葉佩が女子寮に入っていたとか、

そんな話とか、噂とか、聞いてないか?』

「た、単刀直入だね……」

「なら、他にどんな訊き方があるって言うんだよ」

「あ、うん、そ、そうだね……」

返答はすぐに来た。

『受信者：皆守甲太郎

送信者：八千穂明日香

件名:何で知ってるの!?

そうなの!

詳しいことはわかんないんだけど、

そんな話が出てるんだ。

九ちゃん、奥さんいるのに!

月魅の部屋で何してるんだろ?!

でも、見間違いかもしれないから、今は様子見です』

「当たりだ……」

「はっちゃん……どうするんだろうね。というか……いつ戻れるんだろう?」

「だから、俺に訊くな……」

携帯を閉じ、皆守は置いてきぼりの子供二人の背中を見た。

「……葉佩の奴、七瀬の体で進めるんだろうか……」

「……こ、怖ア～……」

いつもなら、ひょいひょいと渡れるような隙間も怖い。

「は、半分以下……! 浮遊輪付けてこれ!？」

残念ながら、浮遊輪では跳躍距離は伸びない。

幸い、武器がいいということで敵を屠るのに苦労はないのだが、一步一步進むのが辛い。足腰が痛くなってきた。

「今どの辺りなんだろうねエ……」

溜息が出る。

暑くはないが湿気が多く、肌にベタッとする空気とうんざりした。

「とにかく、進まなきゃ……!」

自分がしっかりしなければ。

そう言い聞かせ、葉佩は前に進むことにした。

「まァ、なんだ」

皆守はテーブルの上に取手が持ってきたリバーシを広げた。

「俺たちが気を揉んでも仕方ないということだ」

「うん。まァ、そうだね」

子供たちは、ガタガタと何かを始めた皆守と取手が気になるのかゲームの電源を切ってテレビを消すと、取手の隣にアンリが、皆守の隣に彩が陣取って盤を眺める。

「何するの？」

アンリは裏表を白と黒に塗り分けられた円盤を手にして首を傾げている。彩は盤の真ん中に並んだ白と黒二枚ずつの円盤が気になるらしい。

「リバーシだよ」

取手は彩とアンリに簡単にルールを説明する。

「最終的に枚数が多い方が勝ち」

「面白そう！」

「とりあえず、皆守君と一戦交えるから、見てるといいよ」

取手はやる気だ。皆守は「ふ……」と小さく笑った。

「……返り討ちだ」

と、バディたちが暢気にリバーシに興じている頃、葉佩九龍は色違いの塩垂に辟易していた。

「……参ったねエ……」

爆発物を最低限しか持って歩かないため、耐久力が上がっている塩垂が面倒で仕方ない。ただ、あからさま過ぎるほど大きな弱点が頭の上についているため二挺拳銃の葉佩の敵ではないが、これから先もこういった別バージョンの化人が出てきた場合の対処法を考えなければならない時期が来たらしい。

仕掛けをシーリング剤で補修をしながら溜息を吐く。

敵自体の数が少なかったのは不幸中の幸いだったが、この区画の最奥には真理野がいるのだろう。

「……あの石を真っ二つにするんだよ……？ 怖いなァ……」

人の体など、呆気なく真っ二つに違いない。

「悩んでも仕方ないよねエ」

H. A. N. Tを確認すれば、待ち合わせまであと三十分ほどだ。

「……これで囚われてるのが彼女であれば、どんな困難にもめげずに進むんだけれどねエ……参った参った……」

補修した仕掛けを動かして巨大なスサノオ像を消失させると、葉佩は御諸山参道に入った。

『水攻めだよ～！』

という葉佩の泣き言をあっさりと受け流し、皆守は盤上に視線を移す。

「誰からのメールだったんだい？」

「あ？ ……間違いメールだ」

あっさりと嘘を吐く。取手の頬が僅かに引きつる。

「……あ、そう」

嘘などお見通しだ。

間違いなく葉佩からだろう。子供たちがいるから何も言わないのか、黙殺出来る程度の内容なのかは皆守しか知らない。

子供たちは皆守と取手の代わりに円盤を盤上に置いている。そうしながらルールを教えているのだ。

「ほら、アンちゃん、こうなると――」

「裏返し！」

「そうだよ。こことここも、ひっくり返るんだよ」

「挟まれてる！」

「そうそう」

彩は次々に黒くなっていく盤面を見ながら、皆守の言葉を待たずに、ペシ、と円盤を置いた。

「ここ」

「彩、お前勝手に――」

「ここ、いっぱい」

「……あ」

アンリの目の前で、盤面が白く変わっていく。

「鎌治兄ちゃん……！」

「……やられたね」

「彩は偉いなァ」

「彩、頑張る」

両陣営の戦績、ただいま一勝一敗。

「……単純なトラップだったから……助かった……」

あれよあれよという間に足首まで水に浸かるとは思わなかった。えっちらおっちらワイヤーをよじ登り、開錠のための《秘宝》を手にして一息吐く。

「もう少しかねエ」

真理野剣介まで、あと、僅か。

芦原中国の紀、化人創成の間一一十九時。

これほど色っぽくない待ち合わせは金輪際御免だと葉佩は思う。

「む、お主は……葉佩と共におった……」

「俺の――じゃなかった、私のことはどうでもいいんです！ 雛川先生はどこですか！ 葉佩君にメール送ってきたでしょう?!」

「雛川だと？ 拙者は葉佩に文など送ってはおらん」

「ほへ？」

葉佩がポカーンと真理野を見つめる。確かに、確かに文面はおかしかった。本人が否定するのだから、送ってはいないのだ。

「拙者は正々堂々と葉佩と死合いするためにここにいる。そのようなことよりも、何故、お主がここに？」

「……」

説明しても、恐らく納得しないだろう。あれこれと考えていると、真理野は一人頷いた。

「言わずともわかる。彼奴に命じられたのであろう？ 女子の色仕掛けで拙者を懐柔しようとするとは……葉佩九龍め」

「あ、いや……そんなことは……ないから……は、葉佩君は……」

口の中でもごもご言い訳してみるが、真理野の耳に届いてはいない。

「男子の風上にも置けぬ輩よ！ お主に恨みはないが、《墓》の存在を知り、この《墓》に入り込んだ以上、斬らねばならぬ。それが《生徒会執行委員》たる者の勤めだ。許せ……」

咄嗟に、縋るような目で真理野を見つめていた。

――これは、七瀬ちゃんの体なんだから！ 無理出来ないんだから！

そんな意味を込めて。

真理野はそんな葉佩を見て、あからさまに動揺した。

「か、斯様な目で拙者を見るな！」

どうやら女性に対しての免疫がないようだ。これで、少しでも攻撃の手が緩まればしめたものである。

――無理出来ないんだ。無理出来ないんだから……

葉佩はそれでも両手にM92 F M A Y Aをぶら下げ、いつ何時攻撃を仕掛けてくるかわからない真理野に向かう。

辺りに、化人の現れる気配があった。

「死ぬ前に教えてやろう……」

真理野の持つ原子刀の説明を聞きながら、葉佩はどう攻略したらいいものかとそれだけを考えている。

「……七時……」

彩は時計を見た。

「七時がどうした？」

訊いた皆守に、彩は言う。

「父、《墓》で待ち合わせ」

「待ち合わせ？」

「うん。父、言ってた」

アンリは早々にリバーシに飽きたらしく、ゲームをしている。取手は彩のリバーシの相手をしていて。皆守はカレーレシピ本に目を通してている。

「待ち合わせ……《執行委員》が七時に来いなんて言うんだね」

「うん」

彩は一つ頷き、パタパタと円盤を裏返していく。

「パパ、一人で平気かなァ」

呟いたアンリに、皆守は本から目を上げた。

「問題ないだろ。今まで一人だったんだろうが」

「たぶん……」

釈然としない、そんな感じでアンリは頷いている。

「ただ、今の葉佩は七瀬だってことだ。その辺りで話がこじれていないことを祈るんだな」

「ああ、そうだね……七瀬さんだったっけ」

取手は困惑を顔に出す。

「何事もなければいいよね」

結論。真理野には近付かない。

葉佩はなるべく等距離を保ちながら銃による攻撃を行うことにした。近付けば真っ二つ。七瀬に危害が及ぶことだけは避けなければならないことを考えると、採るべき方策は『近付かない』以外にない。

「ひ、卑怯な……！」

「仕方ないでしょう！」

悲鳴混じりの葉佩＝七瀬は、逃げ回りながらも化人を倒し、真理野にダメージを与えている。

「せめて一太刀……！」

「それに当たったら、こっちがお陀仏ですから～！」

とにかく、必死だった。

足がもつれて尻餅をついても、這ってでも距離を開ける。その繰り返し。皆守が見たら、「無

様だ」と一言で済ませそうな戦い方である。

浮遊輪がなければ、こんなにもスムーズに戦えなかつたらう。浮遊輪があったから、まだ何とかなっている部分もあるのだ。

「ぐア……！」

真理野がようやく膝をつき、黒い砂を吐き出すのを見つめていた葉佩は、黒い砂が形作る化人の姿を口を開けて見つめていた。

「……いたんだっけねエ……」

大型化人の存在を失念していたのである。

「今度、タクティカルランチャーを購入しよう……」

緊急事態に直面して、初めて必要な物がわかるのだ。

「父、遅い……」

「そうそう戻ってこないだろう。……真理野を斃したとしても、その後でデカイ化人が襲ってくるわけだからな」

欠伸を噛み殺しながら言う皆守の隣で、

「パパ、大丈夫かな～……」

もそもそとパジャマに着替えるアンリと彩を見ていた取手は、

「はっちゃんなら、心配いらないよ、きっと」

と、とりあえず安心させるように口に出してみる。葉佩が何かあるということは滅多にないであろう。怪我をしても、端から傷が塞がる。痛みだけはどうにもならないようだったが。

だが、しかし。

葉佩の体ではない。現在は七瀬の体なのだ。そこいらを失念している。彩は首を傾げ、くるりと皆守の方へと顔を向けた。

「父、月魅お姉ちゃん。……心配……」

「ああ、そうだったな……」

他人の体でどこまで行けるのだろうか。どうにも不安材料は目の前に転がっているものである。蹴散らせども、二度、三度と戻ってくるのだから。

「……た、弾切れた……！」

葉佩の悲鳴。愛銃からはもう一発も弾が出ない。「やっぱりタクティカルランチャーは必要だ！」と痛感しつつ、攻撃の手は休めない。

「え～いやァッ！」

間延びした掛け声とは裏腹に、葉佩の手には凶悪を絵に描いたような棘付きメイスが握られ、

それを思い切り振り抜いている。

「たァ〜ッ！」

メイスを持ってきてよかった。

攻撃するたびに敵との距離を開け、少しでも休息を取ろうとする自分に驚いた。七瀬の体は、やはり運動不足だ。この程度で悲鳴を上げるのだから。

「も、もう少し……！」

肩で息をしつつ、葉佩は「もう少し、もう少し」と呟きながら、次第にひびが入っていく卵の殻に、間欠的にだったが攻撃を繰り返した。

後に真理野が語ったところによると、メシメシ……という音とともに月読の殻が割れたとき、葉佩＝七瀬はこれ以上もないほど嬉しそうに笑っていたという。

翌日。

戻ってこない父親を心配していた子供たち宛てに、八千穂から皆守の携帯電話にメールが入った。

『九チャンが、月魅の部屋にいたの〜！ 思わずぶん殴ってー』

「パパ〜!？」

「……父……」

「はァ〜……」

アンリの悲鳴と彩と皆守の溜息。

元気よく寝癖で飛び跳ねている髪もそのままに、アンリはおろおろとしている。

「パ、パパ……大丈夫かな……茂美姉ちゃんみたいになってないかな……」

「父……無事……ならいい……けど……」

彩は皆守の携帯電話のディスプレイを見ながら小さく呟く。

「八千穂相手に、ただじゃ済まないだろうな……。はァ〜……」

皆守はボリボリと頭をかき回すと、寝起きに一服点けた。

「ふう〜……アロマが美味いぜ……」

閑話休題（十月二十三日）

「……頭が、ガンガンするんだよね……」

幸い、と言っていいのかどうなのか非常に微妙な一線であるのだが、ぶん殴られた際の顔の腫れは特異体質のため引いている。しかし、葉佩の表情は非常に曇っていた。

「正直な感想を述べさせてもらうけれど……茂美ちゃんの辛さがわかった。明日香ちゃんは、半端ないよねエ……。甲太郎ちゃんの蹴りの一発に匹敵する重さだよ……」

遠い目をしながら生徒手帳に真理野のプリクラを貼り付けている葉佩は、笑いを嘔み殺している皆守を横目で見、
「はァ……」と大きな溜息を吐いた。

「何、何なの、甲太郎ちゃん」

「い、いや……くく……くくくくく……も、戻れて、よかったな……」

「ええ、どうも～」

無然としている葉佩は言う。

「さっき、月魅ちゃんが体引きずりながら来たでしょ？ H. A. N. T届けてくれるために。……その後で『寮に、帰ります……』って顔引きつらせてたけど。……あれは、二、三日動けないね。絶対に運動不足なもの」

「ああ」

「鳴ってビックリしたんだって。……だってさ、月魅ちゃんはヒナ先生の家で目が覚めたわけでしょ？ で、アサルトベストとかあるわけだしね」

「ああ」

「……H. A. N. Tの認証パスワード画面、切っておいて正解だったね。そうしなければ、月魅ちゃん、俺にメール打てないもん。……と言っても、俺はそのとき、月魅ちゃんの携帯片手に伸びてたわけですが」

「……ふ……くくく……」

「ふ～んだ。いいよいいよ、甲太郎ちゃんなんて……！ 親友とか言うておいて、それはないよ……信じてくれなかったし！」

子供のように膨れっ面で拗ねている葉佩に、皆守は若干だが真顔に近く戻した顔で訊いた。

「じゃあ、訊くが。俺が八千穂になってたとして、八千穂の外見で『俺だ。皆守甲太郎だ』って言ったら、信じるのか？」

「……」

葉佩はそっぽを向いたまま止まり、ギギギギギと音がしそうな素振りで皆守を見る。

「信じないね。……ってというか、明日香ちゃんの冗談だと思うねエ」

「そうだろう？ だから、俺がお前を信じなかったとしても、それは俺のせいじゃない」

回りくどく自分の正当性を主張する皆守に、葉佩は首を傾げつつ「ふ～ん……」と溜息のような声を零した。

「今一つ釈然としないけれど、まァ、いいよ。わかったよ。……子供たちも世話になったわけだし……アンリと彩が仲直り出来たし。それだけはよかったよ」

「そうだろう。感謝しろ」

「はいはい」

葉佩は空を見上げた。

「……教室に居辛いのに、どうして学校出てきたのかねエ……俺……」

「知るか。……真理野にガキども紹介しろよ」

「はいはい。混乱させないといいけれどねエ……。あ、今日、遊びに来るかい？」

「ああ。……八千穂には、内緒にしとくか」

「……後が怖いよねエ……。さ、さりげなく、訊いてみるよ」

「お前がな」

「甲太郎ちゃんがだよ?!」

「お前が、だ！」

「ひーッ！」

ちなみに、教室には猛牛のように怒り狂っている八千穂がいる。

時計が午後一時を回った頃、土曜ということで、校内はかなりの放課後ムードが漂っている。

3 - Bの教室をひょっこり覗き込んだ葉佩は、戸の傍にいた朱堂を呼び、真理野を呼んでくれと頼む。

「あらん、剣介ちゃん、九ちゃんが呼んでるわよ？」

「……む、葉佩……奴には言いたいことがあるのだ」

「喧嘩腰なんてよくないわよ、もっと仲良くしなくちゃ。バディな・ん・だ・か・らッ！ ヲホホホホッ！」

「う、うむ……」

真理野は葉佩の許へ赴くなり、開口一番文句を言おうとしたのだが、葉佩は「待った！」と真理野の顔の前に手をかざす。

「保健室に来ておくれ」

ニコッと微笑む葉佩に毒気を抜かれた真理野は「う、うむ……」とわけもわからず頷いて、葉佩の後について保健室に向かう。

「ルイちゃん、こんにちは～」

「ああ。……ん？」

瑞麗は普段と違う気配に振り返る。

「真理野じゃないか。……そうか、お前も葉佩のバディとやらになったのか」

「せ、拙者は、この男の卑劣に畏にかかっ……か……」

真理野は自分の和服の袖を引く猫スーツ姿の小さい二人に唾然となっていた。「か」の形に口を開けたまま、凍っている。

「剣介ちゃん、紹介するね。このコたちは俺の子供。こっちがアンリ」

「こんにちはッ！ 剣介兄ちゃん！ お侍さんだねッ！」

キャッキヤと喜んでいるアンリ。

「で、こっちが彩」

「……こんにちは……」

ペコリと頭を下げた彩は、木刀に興味津々である。

「ど、どういう……ことだ？ ま、まさか……！ 七瀬殿——」

「ちょ、ちょっと待って！ 冷静に、冷静に……どうどう……」

葉佩は、保健室の隅——いつもアンリと彩が遊んでいる場所に真理野を連れて行くと、椅子を勧める。

「俺の奥さん——といっても結婚してないんだけど、見せてあげる。……決して七瀬ちゃんじゃないからね」

葉佩は生徒手帳に挟まった写真を真理野に見せる。黒髪に青い瞳の美しい女性が微笑んでいた。確かにアンリとこの女性はよく似ている。

「これが俺の奥さん。あんまり人に見せないんだけど、今回は特別だよ。……何しろ、これからかなり信じられないような話をするけれど、出来る限り理解してもらわないといけないから。わからなかったら、その都度質問して。……絶対に理解してもらわないと、いけないことだからね」

葉佩が大事なことを二度言ったそのとき、保健室の戸が開いた。

「ああ、皆守か」

「甲太郎兄ちゃん！」

「お兄ちゃん……」

「ま、纏わりつくな……歩けない……ッ！ ……アンリ、彩、親父は？」

「パパは、そっちで剣介兄ちゃんとお話してるよ」

「なるほどな。……七瀬と入れ替わるなんて話、信じてもらえるのかね？ あァ……俺が心配することでもないな。……アロマが美味いぜ」

真理野は外の会話を聞き、ポカンとした顔で葉佩を見た。

「な、何だと……？」

「だから、順番に行きましょう。剣介ちゃん。……誤解があると、上手いこと人間関係が進まないものなんだよ。……まずは、俺の素性ね」

『超』がつくほど石頭には違いないが、真理野という男、付き合ってみればイイ男である。

「で、では、今の話を解釈すると、葉佩は三十歳を超えており、アンリと彩は葉佩の息子。葉佩は《宝探し屋》……」

「そうそう。そこまでは問題ないね」

「七瀬殿と廊下でぶつかり、人格が入れ替わった。信じがたいことだが、あの強さは確かに……」

並みの女人ではなかったな……まさか、月読をメイスで叩き割ると思わなんだ……」

「んふふふふふ……」

「そして、今朝方、目が覚めると戻っていた、ということか」

「うん。そういうこと」

「……お主の言葉だけでは信じがたい部分もあるが、瑞麗殿と皆守甲太郎の口添えがあるということは……事実であるのだな？」

「そうだよ。事実なんだよ」

葉佩はホッとしたように肩から力を抜く。

「だから、アンリと彩と、仲良くしてあげてね」

「承知した」

「うん。ありがとう」

衝立の間隙から、ニュッと顔を出したのは、いつ保健室に来たのか謎の八千穂であった。

「話は聞かせてもらったわ！」

「あ、明日香、ちゃん……！」

「そういうことだったんだね～。それならそうと、言ってくれたらよかったのに！」

「俺、言ったよね?! 一生懸命説明したよね?! 無罪を主張しましたよね?!」

必死な葉佩に八千穂は真顔で返す。

「信じられるわけじゃない！」

「……」

葉佩は口を開けたまま彼女の顔を見上げた。怒りは解けているらしいというのが幸いだったが、釈然としない。間抜け面をしている葉佩を無視し、八千穂は真理野に視線を移す。

「真理野クン、これからよろしくねッ！ あたしも九チャンのバディなの！」

「ばでい……背を預けられる仲間、というものなのだな」

「そ！ そういうことッ！」

「……その仲間に信じてもらえずに、今朝方、拳の一撃でK.O. されたんだけどねエ……」

「当然であろう！ 七瀬殿が心配ではないか！」

「当然だよッ！ 月魅が心配だもん！」

八千穂とほぼユニゾンで主張した真理野が、

「おやおや……」

「青春だなァ、なァ、アンリ、彩」

と衝立の向こうからの瑞麗と皆守の声に、茹蛸のように赤くなったのはここだけの話。

月曜日に確認しておこうと思っていた、九十六年度の卒業アルバムを、土曜日に確認している葉佩、皆守、八千穂――と子供たち。

部活に行くという真理野と別れ、彼らは図書室にやってきていた。

何だかんだと用が立て込んで、とつてもではないがそんな暇もなく、心の余裕もなく、今日まで延び延びになっていた。

「……文化祭の写真だよね……っと、どこかな～……」

「しかし、亮太がバンドってのが、今一つ結びつかないのは俺だけか？」

図書室の机の端に固まり、アルバムを覗き込んでいる三人と見えない二人に、図書委員から声がかかった。

「ちょ！ 先輩！ 本に灰なんて落として穴を開けないでくださいよ?!」

二年生の男子生徒が青くなっている。七瀬が君臨しているであろう図書委員会である、皆、本の扱いにはうるさそうだ。

「葉佩じゃないんだ。俺はそこまでドジじゃない。安心しろ」

そう答えた皆守に、「プッ」と思わず噴き出したのはアンリ。葉佩は「もう～……」と溜息混じりに呟くと、パラパラとアルバムをめくる八千穂の手元を覗き込む。

「……ん？」

葉佩がズイッと身を乗り出した。

「ストップ！」

「いた?!」

「どれだ？」

「……これだ……と思う……？ う……ん。これだよ、これ！」

葉佩の指差した先に、サックスを首からひっかけ、マイクスタンドを握り締めている亮太の姿があった。

「……変わらないな……」

期待が外れたのか、残念そうな皆守の声。

「髪型、ちょっと違う？ この頃、今よりも短いみたい？ それとも、髪の毛立ててるのかな？」

現在との差異を、案外冷静に探している八千穂。

「……リョタ兄ちゃん……カッコイイ……」

「カッコイイ……」

ぽそぽそと呟いている子供たちの猫スーツが見えていたら、尻尾がブンブンと振られているに違いない。

「俺的には、亮太の意外な一面なんだけれどねエ……んふふふ……」

葉佩は微妙な笑いを顔に浮かべている。

「亮太が學園から帰って来るのはこのコらのママの家だったから、鉢合わせしたときなんて追い

出されたもんだよ……」

遠い目をする葉佩に、皆守は「あ？」と首を傾げた。

「……アンリは生まれてただろ、この頃には」

「うん。……でもねエ、亮太ってばねエ、アンリは可愛がってくれるのに、俺のことは顔を見た瞬間に『出て行けボンクラ！』……だったんだよ……」

「今と変わんないじゃん」

あっけらかんと言いつつ八千穂に、葉佩は返す言葉もない。

「あ、はいィ～……変わんないです～……」

そう苦笑したとき、グウ～……と、「いかにもお腹が空きました」という音が聞こえてきた。

「誰だ？ 確かに腹は減ったが。昼飯食ってないからな」

「……彩……お腹空いた……」

どうやら、彩のお腹が自己主張したらしい。

「ああ、ゴメンゴメン。じゃあ、寮に帰ろう。それでお昼にしようね」

「は～い！」

八千穂は手を挙げる。

「どうしたの、明日香ちゃん」

「私も準備したら男子寮に行きま～す」

「はいはい。待ってます。……さ、帰ろう」

ちなみに、昼は冷凍ご飯と余りのご飯で、皆守特製茸たっぷりのカレーリゾットだった。

「じゃ、そろそろ行くかい？」

「うん！ お家帰る！」

「……お家、久しぶり……」

アンリと彩はリュックを背負って立ち上がる。

「行きますか～」

立ち上がった八千穂に、

「はいはい」

と気だるい返事を返した皆守だったが、携帯電話がメールの着信を告げたのを見て、そちらを見ずに葉佩に言った。

「後から行く。野暮用だ」

「了解。待ってるねエ。五時までに来なかったら、今日のお夕飯は俺が作ります。何が出来るかな～？」

「な～？」

「……な～……」

親子三人で首を傾げて皆守を見れば、皆守は口の端を僅かに持ち上げ、

「わかった。五時までに行って、カレーにしてやる」

「皆守くん、いいよ、五時までに来なくても。そしたら、九ちゃんに美味しいハンバーガー作ってもらおうから」

「カレーの何が悪いんだ？ え？ 言ってみろ八千穂」

「もう、飽きてきたの～！」

「ま、まァまァ……とにかく先に行ってます。何かあれば連絡寄越してね、甲太郎ちゃん」

「ああ、わかった」

「ん。……じゃ、あとでね」

寮の入り口まで見送り、軽く左手を上げる。

「……俺も、何してるんだか……」

メールを開けると、皆守は欠伸交じりに校舎の方向に向かって歩いていった。

八千穂は晴れ晴れとした顔をして歩いている。

「テストも終わったし！ ……でも、ツチノコはいなかった……ガッカリ……」

「……俺は、今日がテストじゃなくてよかったよ……うんうん……今日は頭痛くて起きられなかったのに、亜柚子ちゃんに職員室で、『ちゃんと授業に出なさい』って甲太郎ちゃんとお説教食らう羽目になって……」

「九ちゃんが悪いんだよ！ あたしにちゃんと説明しないから～！」

「……説明しました……したのに……聞いてもらえなかった……」

メコモコに凹む葉佩の手を、アンリは引っ張った。

「パパ！ コンビニでチョコ買っていい？」

「……彩、チーズケーキ……」

「はいはい。わかりましたわかりました」

「あたしはプリン～！」

両腕に子供と八千穂をぶら下げて、葉佩はコンビニに入る。彼が買うのは明日の朝食になりそうなものなのだが、カゴを持っているアンリと彩は、遠慮なくデザートばかりを買っていく。そして、菓子パン。

「僕、チョココロネ！」

「彩、チーズ蒸しパン……」

「こ～らッ、二人ともッ。甘いものばかりじゃダメでしょ。こんなにデザート食べきれないよ？」

「大丈夫だもん！」

「彩、食べる」

「も～……」

苦笑する八千穂は、真剣な顔をして焼酎の瓶を選んでいる葉佩の傍に寄った。

「九ちゃん、カゴの中、大変なことになってるよ？」

「あ、うん」

「……」

呆れた。

「子供よりもお酒が大事なのっ？」

「ヒッ！」

低いが、キッパリした八千穂の声に、葉佩は「ごめんなさい！」と首を竦める。

「ほらほら、パパなんだからしっかりしなさい！」

「はい……」

ここで皆守がいたら、ますます大変なことになっていたに違いない。八千穂だったからこの程度で済んだのだろうか……

「そんなだから、亮太クンに痛いところを突かれて言い返せないんだよ」

と、至極もったもなその言葉が一番堪えた。

自分のことを一番に考えているつもりはない。常に、子供たちと大事な人に向けているつもりであるのだが、葉佩の『つもり』は、やはり『つもり』でしかないようだ。

自分なりに一生懸命している『つもり』。

子供たちと一緒にいるために、頭を働かせている『つもり』。

その程度にしか周囲に見えていないのだとしたら、それはとても悲しい。けれど、八千穂の一言は葉佩にそういう部分があるということ気付かせた。

八千穂にすら、そう見えるということなのだ。

——……凹むねエ……

会計を済ませ、荷物を分担して持っている子供たちの笑い声を聞きながら葉佩は胸の内を隠して微笑む。

「彩ちゃん、昔に比べて笑うようになったね～」

「彩、笑う」

「そだね～。彩、向こうにいるとき、全然笑わなかったんだよ～。……僕もいつも泣いてたけど。でも、でも、リョタ兄ちゃんいてくれたから！」

「亮太クン、いつもいたの？」

「うん。支部に孤児院（ホーム）がくっついてたの。だから、リョタ兄ちゃん、僕たちがご本読んでる隣でいつもここをシワシワにして書類作ってたんだよ～」

アンリは眉間を指差して笑っている。

「僕たちのお友達もいっぱいいたの。リョタ兄ちゃん、みんなの面倒見てた！」

彩は荷物を持つ手を変えると、黙って話を聞きながらマンションの玄関ロックを外す父を見上げ、玄関が開くとその手を握る。葉佩は自分を見上げている彩に微笑むと、エレベータホールへ向かって歩いていく。

「亮太、ああ見えて面倒見がいいんだねエ。そうじゃなければ、バンドなんて出来ないだろうしねエ。……吹奏楽部って言ってたし……人付き合いは俺よりも円滑かもしれない」

葉佩は亮太の何も知らない。昔は毛嫌いしていたし、今は大分緩和されたといっても苦手なものは苦手だった。けれども、子供たちの話を聞いて知る亮太の姿というのは、葉佩の知ってる亮太とは随分かけ離れている。

ポーン、とエレベータの到着を知らせる音とランプ。静かに開いたドアに子供たちが挟まれないように注意しながら、四人はエレベータに乗り込んだ。

彩が、「思い出した……」とふと口を開いた。

「……孤児院に爆弾落ちたとき、亮太お兄ちゃん、『みんな助けたかった』……言って、泣いてた……」

「……亮太くんが？」

「うん……。お友達……いなくなっちゃったもん……」

泣き出しそうになったアンリを八千穂はギュッと抱き締める。

「彩たち、助かった。支部の人、亮太お兄ちゃん、マザー……みんな頑張った……でも、お友達二人死んだ……」

「二人……」

八千穂にはわからない。戦争の中、二人亡くなったという事実がどれほどのものなのか、戦後随分経って生まれた世代には理解が難しかった。葉佩は言う。

「……二人で済んだ、という問題じゃないけれど……よくたった二人の犠牲だけで戦火の中を逃げ切ったと俺は思うよ……」

「……九ちゃん……」

「亮太のこと、見直した」

そして、自分のことはますます嫌いになる。微笑む唇が引きつるのがわかっていた。八千穂はそれを見逃さない。

「あたしの言ったこと、根に持ってるでしょ」

「そ、そんなこと……」

「九ちゃん、無理しないの！ 一人で出来ることなんてたかが知れてるでしょ！ 何のためのバディなの！」

エレベータのドアが開き、子供たちは父から家の鍵を受け取ると部屋の方へ向かって走っていく。

「……」

エレベータを降り、しょげている葉佩に八千穂は言う。

「コンビニで言ったこと、言い過ぎだとは思わないし、謝らないからね。……でも、九ちゃん、あたしは九ちゃんが頑張ってるのも知ってるし、変なところ抜けてるのも知ってる。……だから、頼って。出来ることは、みんなでしょうよ！ 一人で背負い込まないで！」

葉佩は頬を搔き、僅かに首を傾げて微笑んだ。

「……ありがとね」

「ううん。……バディなんだから」

八千穂はニッコリ笑うと、ちょいちょい、と葉佩を手招きして持ってきたバッグの中を見せる

。

「……田舎から送ってもらったの。先生にあげるっていう名目で……五合しか入ってないけど、美味しいっていうお酒だから。九チャンに」

「……明日香ちゃん……」

葉佩は思わず、だったのだろう。八千穂をギュッと抱き締める。

「ありがとね」

「や、やだ、九チャンたらア……！」

「せくはら～！」

「せくはら……」

家のドアのところから、二人が覗いていた。八千穂も言う。

「セクハラ～！」

「ちょ……ッ!? え?! ど、どこでそんな言葉を……！」

「ルイせんせ～」

「せんせ～」

「ええ～ッ?!」

肩を落とした葉佩の「勘弁してよ」という呟きに、八千穂と子供たちはゲラゲラ大笑いし、仲良く家に入っていく。

「……助かってますね、本当に……」

自分一人ではどこまでも落ち込んでしまうに違いないことも、確かに八千穂たちがいることで救われている。それは間違いない、動かしようがない事実だった。

「……皆守さん……？」

不意に呼ばれ、皆守はそちらに振り返る。

「……あ、あア……白岐か」

「葉佩さんのところへ？」

「……よく知ってるな」

「彩さんが、話してくれる。……あの子は優しい子ね。私とは違うわ」

「俺にそんなことを言われてもな……」

皆守は立ち止まるとアロマに火を点けた。

「アロマが美味いぜ……」

白岐の髪を梳くように風が流れていく。ふと香るラベンダーの香りに彼女は顔を上げて皆守を見た。

「……羊飼いに逆らう羊は、群れから離れてどこに向かいたいのかしら」

「……さアな」

「群れから離れた羊は、何を夢見るのかしら……。安穩とした生き方を望まない羊は……怯える

こともなく彷徨えるのかしら……」

「少なくとも……」

皆守は暮れ始めた空を見上げた。

「牢獄に閉じ込められていると感じている連中には理解出来ないさ。……俺にも、お前にもな。ただ……」

「……『ただ』？」

「『その羊について行ったら新しい世界が見えるかもしれない』と、檻の中で夢を見る羊はいるかもしれない。……八千穂のように」

「……」

「葉佩を見ていると飽きない。あの何もない廊下で転ぶような『ダメ人間』が、どこまで行けるのか、何を掴むのか……それを見てみたいと思うのは、人間に備え付けられている《好奇心》《探究心》とやらが働くせいなんだろうな。……まったく厄介だぜ。面倒臭い」

「……二人の子供たちは……葉佩さんは……あなたを変えてくれる？」

「知るかよ。……そんなこと出来やしないさ」

「……そう……」

白岐がなぜか小さく微笑んだような気がして彼女の顔を見返したときには、すでに歩き去る後姿のみ。影が長く味気ないコンクリートに伸びているだけだった。

「……何が言いたい……何が言いたい……」

苛々とした皆守の呟きを邪魔するようにメールが入る。

『受信者：皆守甲太郎

発信者：八千穂明日香

件名：ハンバーガー！

もう間に合わないもんね～！

今日のお夕飯はハンバーガーに決定で～す！

キャッキヤ☆』

「……しまった……！ 葉佩が飯作ってるの見てるとイライラするんだよ……！」

携帯のディスプレイに映る時計を見て皆守は愕然とする。

急いで寮に戻ると、バッグの中に必要な物を詰めて、いつものように學園を抜け出した。

「……ひらがな、覚えた」

彩はさらさらと八千穂の名前をノートに書く。

「明日香お姉ちゃんの名前、書ける」

「キャ～！ 彩チャンすごいすごい！」

「僕も書けるよ～。お喋り出来るけど、書くの苦手だったんだ～」

アンリも一生懸命ノートにひらがなを書いていく。

「アンちゃんもすご〜い！」

「えへへへ」

褒められてくすぐったそうにアンリは微笑む。彩も嬉しそうだ。

八千穂は彩とアンリに挟まれて、いろいろと質問する二人に丁寧に答えていく。

アンリと彩の話によると、孤児院でもある程度の教養を教えていたし、亮太も二人に勉強を教えていたという。ただ、やはり日本語で勉強するには国語が必要なのだ。

亮太もあの時期日本語の教材を用意することは難しく、口頭で教えるにしても限界があったに違いない。

日本語以外の学習程度は二人とも高く、計算などはすらすら解いていく。しかし、問題文が読めなかった。

「あたしは英語読めないけどね！」

威張って言うことではないが、八千穂は二人にそんなことを言っている。

時計はまもなく五時。

PCに向かって仕事をしているらしい葉佩が顔を上げた。

「そろそろ、お夕飯の支度始めるねエ」

「ハンバーガー！」

「ハンバーガー！」

「……ハンバーガー」

三人が揃って声を上げたとき、インタフォンが鳴った。

「はいは〜い」

葉佩はそちらに向かい、「んふふふふふ」と笑っている。

『時間通りだろ』

「いらっしゃい。開けるよ」

八千穂はガッカリして肩を落とす。彩の手がぽん、と慰めるように八千穂の肩を叩いた。

ピンポン……

チャイムが鳴り、葉佩は玄関ドアを開け――

「ギャーッ！ 何で亮太が……!?!」

「走ってたら、会った。だから乗せてきてもらった」

皆守の簡潔過ぎる説明に、葉佩は「ああ、そう……」と引きつった微笑みを浮かべ、亮太を見る。

「いらっしゃい」

「うむ。……知り合いに肉屋がいるのだ。美味そうな肉を大量にもらったのだが、俺様一人では食いきれない。分けに来た」

「そういうのは大歓迎」

葉佩は笑って言う。

「明日香ちゃんから日本酒もらったんだよ。亮太もお飲み」

そのやり取りを聞いていた子供たちと八千穂は、顔を見合わせて小さく笑い合った。

「焼肉にしたい」

亮太は言う。

「和牛サーロイン、こっちはシャトーブリアンと言っていた。カレーにするならそっちのスネ肉を使え。俺様はステーキ、もしくは鉄板焼きにする」

「ステーキ！」

「鉄板焼き！」

八千穂と葉佩は亮太の意見に食いついた。皆守は言う。

「なら、カレーと鉄板焼きでいいだろ」

だから！

なぜそこで『ビーフカレー』しか選択肢がないのか。八千穂は皆守を小一時間問い詰めたかった。

言わずもがな。皆守がカレーレンジャーなのだから仕方ない。どうしてもカレーが食べたいのだろう皆守はいそいそとキッチンに入る。その背を追いかけるのは、コアラと羊を抱えたアンリと彩。

八千穂は苦笑すると葉佩を見た。

「九ちゃん、ホットプレートあるの？」

「……はい？」

「ホットプレート。焼肉するのに」

「はう～」

葉佩の情けない声に八千穂は「え～ッ?!」と雄叫びを上げ、葉佩の綿シャツの胸倉を掴むとゆっさゆっさと前後に揺する。

「なきゃ焼肉出来ない～！」

「……そんなこともあろうかと、車に積んできているが。それを使うか？」

「亮太くん！ 使える男！」

八千穂は葉佩をドンと突き飛ばし、パチパチと拍手する。亮太は「うむ」とさも当然のように頷き、テーブルの上に載っていたこの部屋の鍵を手にする。

「取りに行ってくる。……ボンクラ」

「……うァい……目が回ってる……」

「野菜の用意をしておけ」

「うァい……」

葉佩はよろよろとキッチンに向かう。八千穂はテーブルの上の片付けだ。

「……野菜……野菜……」

冷蔵庫の野菜室を覗くと、そこにはおあつらえ向きにニンジン、ピーマン、キャベツ、モヤシ

がある。冷蔵庫の脇のカゴの中には、ジャガイモとタマネギ。

「……どうして、この家にはカレーが出来る用意が常にあるの？」

家主が疑問に感じることはない。

葉佩の呟きなど聞こえていないのか、皆守は滔々とアンリと彩にカレーの蘊蓄を語って聞かせている。実に気分が良さそうだ。彼の手元にはスパイス。いつの間にか、これも家主の知らない間に常備されているものである。

「スパイスというものは、焦がしたらダメだ。焦げ臭くなるし、苦味が出る。油で炒めるが、焦がさない。それが美味さのコツだ。これが出来て第一段階、というところだな」

タマネギを刻みながら語る皆守に、彩はいちいち頷いて聞いている。アンリは頷いているが、明日には忘れているだろう。

「……楽しそうですね～……」

そんな風に呟く葉佩の声は三人に聞こえていない。

「で、そこにタマネギを入れる。これも焦がさないように炒めることだ。苦味ってのに旨みはないからな。どっかのオヤジも苦いのが食べないから、作るときは絶対に苦味は入れるな。飴色までいなくてもいい。ただ、しっかりと色がつくまでは炒めるぞ。十分以上かけて焦がさないように炒める。それによってタマネギの甘みが、カレーの中に旨みとして入ることになる」

「は～い！」

「……うん」

「よし、タマネギ入れるぞ」

嫌味なのか、優しさなのか。皆守の言葉に葉佩は苦笑し、シンクの中にあったボウルにキャベツやらニンジンやらを入れると水を出した。

「甲太郎ちゃんは、カレーを作っているときが一番幸せそうだよねエ」

「あの學園じゃ、他に楽しみがないだろうが」

「今は、ここにいるじゃない」

「カレーは俺の人生だ」

「大きく出たねエ」

タマネギの皮を剥く葉佩は笑っていた。

「でも、素敵だよ。そうやって、何か一つのことに向き合えるのって」

「ふん。……お前は《宝探し屋》って天職があるだろうが」

「俺は――」

「あ、亮太くん、おかえり～！」

八千穂の声に葉佩は振り返り、「ああ、戻ってきたね」と頷く。

「亮太がホットプレートを持ってきてくれたんだよ。今日はみんなで初めて焼肉しようねエ。楽しみ楽しみ」

そう言って微笑む葉佩に、皆守は口の端を僅かに歪めた。

――話、逸らしやがったな……？

大体、葉佩という人間は、自分が言いたくないことを露骨に避ける。それがあまりにもわかり

易過ぎるのが憐れで仕方がない。元々、人間が『バカ』がつくほど正直に出来ているらしい葉佩は、隠し事をしても顔に出る。今も笑っているのだから困っているのだから、微妙な顔をして皆守を見ていた。

「お前なァ……」

それでもタマネギを炒める手を止めず、皆守は溜息を吐いて子供の手前、それ以上言うのは避けた。だが、「いつか聞き出してやろう」と妙な使命感に燃える。

「焼肉って何？」

「……何？」

「みんなでお肉をその場で焼きながら食べるんだよ。喧嘩しないようにね」

「は〜い！」

「……楽しみ……」

子供たちはニコニコしている。そして、亮太と八千穂が何か話しているのを聞きつけ、アンリと彩は居間の方へと戻っていった。

「……さて」

皆守の目が葉佩を見、

「葉佩は転職を希望か。へ〜、そうか」

と、わざとらしい口調でそんなことを言った。葉佩は「あ……う〜……」と困り果てたように唸って首を横に振ると、

「ち、違う。別に転職なんて……」

ブツブツと口の中で呟き、変な顔をしている。

「……本当はピアニストになりたかったとか……？」

「はいッ?! そ、そんなことない。ないない」

そうだったらしい。

「でもまァ、あれだろ。今の職も悪くはないんだろ？」

「あ、うん、まァ……」

「なら、やるしかないな。……その歳になって転職するんじゃ、今の世の中逆風キツイぜ」

「わ、わかってるよ……毎日ニュース視てるもの」

葉佩の溜息に、皆守は笑う。

「けど、お前を見てると、毎日楽しそうだと思うんだ。これでもな」

「あ、そう？」

「お前があまりにも阿呆だから――」

「甲太郎ちゃん?!」

「気にするな。言葉のアヤだ」

「な、なななななな……！」

ぷるぷると震える葉佩だったが、すぐに相好を崩して笑っていた。

「楽しいよ。……お前さんたちのおかげでね」

何よりも、それは葉佩の感ずる最大のことで、嘘偽りはない。

「パパ～、大根おろし取って～！」

「はい、アンリ」

「父……レタス……」

「はい、彩」

カレーを食べながら焼肉まで食べている子供の間で二人の世話を焼きながら、葉佩はせっせと肉を口に運ぶ八千穂と亮太と皆守を見た。

「甲太郎ちゃん、カレー食べてる？」

「当然だろ」

「お肉美味しいかい？」

「美味しいな」

「よかったねエ」

そういう葉佩もしっかり食べている。隣のアンリは焼く方に興味津々らしい。

「火傷しないようにね」

「うん！」

亮太が「アンリたちが食べやすいように」とサイコロに切ったサーロインを鉄板の上でコロコロ転がして、焼けたところを口に入れ、もぐもぐと食べている。彩は相変わらず口の中は野菜だらけだ。肉と野菜のバランスが一对五くらいではないだろうか。

「アンリ、まだ焼けてない」

皆守はアンリの握ったフォークが肉を刺そうとしたところを、箸でブロックする。

「え～？ もう、周り焼けてるよ？」

「もう少し焼いた方が美味しい。絶対にそうだ」

「え～？ ……僕、生っぽいのが好き～」

「この肉はミディアムの方が美味しい」

葉佩は心のメモ帳に、『甲太郎ちゃんは、仕切りたがり』と書き付ける。皆守は変なところで神経質だ。料理関係はかなりうるさいと見た。

「そんなもの、人の好き好きであろう？」

塩コショウで下味をつけている亮太は、ざっと焼き目をつけただけのレアを食べている。八千穂は焼き上がった傍から口に入れる。焼き加減は二の次らしい。

「人それぞれだよねエ」と葉佩は内心頷き、サラダを抱えて食べている――いつものことなので、彩は人とは別のサラダボウルである――彩に訊く。

「彩は、お肉食べる？」

「彩、野菜」

「そうかい？ んふふ。食べたくなったら、お言い」

「うん」

結局、総勢六人で一時間半かけて、一キロの肉を食べながら様々な話をした。

例えば、

「今日、見たよ～、亮太クンの文化祭の写真」

というもの。

「そうか。あったであろう？」

シャトーブリアンを焼きながら、亮太の受け答えは淡々としたものだ。

「うん。……本当にサクサク吹いてたんだね～」

「うむ。自分で言うのもなんだが、腕はいい」

言い切る辺り、亮太の亮太たる所以を感じる。

「……大したもんだな。楽器が出来る奴ってのは、ある意味尊敬に値する」

「ボンクラでもか」

「……」

皆守の視線が葉佩を見て、ニヤリと笑うと、亮太に戻った。

「仕方がないが、そうだな」

「ちょ……！ 仕方がないって何だい?!」

そんなやり取りが交わされる明るい食事が終了したとき、アンリと彩は満足そうに「けぷッ」とお腹をさすりながら、腹八分目に抑えている葉佩にギュッと抱きついた。

「パパ～、美味しかった～！」

「また、食べる」

「だったら、亮太にご馳走様しなきゃ。亮太が持ってきてくれたんだよ？」

「あたしもあたしも、美味しかった！ 亮太クン、ご馳走様でした！」

微笑む八千穂。

「リョタ兄ちゃん、ありがと。美味しかった～！」

「……ありがと。美味しかった……ご馳走様でした」

「美味かった。ご馳走さん」

子供たち、皆守も言う。

葉佩もニッコリ笑い、片付けをしている亮太を見た。

「ご馳走様。ありがとね」

亮太は「うむ」と頷く。

「……今度は、カルビやらも入れてもらう。その方が良からう」

ぼそッと呟いた言葉に、皆守と八千穂は顔を見合わせて苦笑し、葉佩は子供たちに微笑んだ。

「よかったねエ。また、みんなでこうやってご飯食べようねエ」

「うん！」

「わかった……」

亮太は手を伸ばして子供たちの頭を撫でた。

「約束する」

「明日って、水族館混んでるかなア」

ボーッとテレビを見ていた葉佩の唐突な一言に、皆守は「はア？」とあからさまな疑問を口にし、八千穂は食いついた。

「どこの水族館行くの?!」

「どこ行く気だよ？ 日曜だ、どこも混んで――」

「遠くへ行きた～い！ 旭山動物園行きた～い！」

「無理だ阿呆！」

皆守のチョップが葉佩の頭にクリティカルヒットする。八千穂は「あはははは」と笑いながら、亮太の方を見た。

「亮太くん、どう思う？」

帰り支度をしていた亮太は首を傾げる。

「うむ。……だが、学生をしている以上、日曜しか暇が無いのであろう？ それならば、混んでいようが何しようが、日曜に行くしかあるまい」

その回答に、葉佩は「うん」と頷いた。

「だよねエ。……よし、決めた！ 電車で行きます！」

「どこにだよ？」

皆守の頬が引きつる。

「葛西行こう～！ 鮪～！ ペンギン～！」

今日の葉佩はやたらとハイテンションだ。酒が回っているのかもしれない。

「俺様は明日は仕事だ。楽しんで行ってくるといい」

「は～い」

八千穂と葉佩は二人で返事をする。亮太は「うむ」と頷き、皆守を見た。

「すまないが、子供たちをよろしく頼む」

「ああ、わかったわかった」

実の父親よりも、皆守の方が信用されているらしい。

亮太は腰を上げた。

「では、帰る」

「リョタ兄ちゃんは？」

「リョタお兄ちゃん、いない？」

「亮太、明日お仕事なんだって。だから帰ったよ」

「……帰っちゃったの？」

「……」

寂しそうに目を伏せる子供たちに、八千穂は言った。

「でもでも！ 明日は水族館に行くことになったよッ」

それを聞いて、アンリの目がキラリと光る。

「水族館！」

彩は父を見た。

「……何？」

「魚がいっぱい泳いでるところだよ」

「楽しい？」

「大きな観覧車もあるし、広い公園もあるし、お散歩するのもいいよねエ。きっと楽しいよ。コアラと羊のぬいぐるみはないと思うけど、ペンギンがいる水族館だから、大きなペンギンのぬいぐるみを買って帰ってこようね」

「ぬいぐるみ！」

「……着れるのほしい……」

「……椎名に頼め」

苦笑する皆守に、彩はコクコク頷くと、父のH. A. N. Tを問答無用で開くなり認証パスワードを打ち込み、リカにメールを打ち始めた。

『こんばんは こんど ペンギンの きれる ぬいぐるみ ほしい さい』

「……何の暗号だ、これ……」

覗き込んだ皆守の問いに、八千穂が答える。

「メール」

「わかってるっての！」

ゴツと八千穂の髪分け目に皆守のチョップが入る。先程の葉佩に食らわせたものに比べたら、ずっと優しいものだ。

「でも、大丈夫。きっと、椎名サンはわかってくれるよ！」

髪分け目辺りをさすりつつ、八千穂は笑っている。送信すると、すぐに返信が来た。

『わかりましたわ。とびきり可愛いペンギンの着ぐるみ、お揃いをご用意しますウ』

「ほら、椎名サン、ちゃんとわかってるじゃない！」

「うるさいな～……八千穂、とっとと風呂入って来いよ」

「あ、は～い。わかりました～」

八千穂が風呂に行くのと同時に、アンリはゲームをつけた。

「借金返済～」

「……返済」

皆守の眉間に皺が寄った。

「……ゲームをしてる最中に、どうしてこんな現実的な言葉が聞こえて来るんだ……」

「俺に聞かれても……んふふふッ」

葉佩は嬉しそうに笑っている。

「ね、甲太郎ちゃん」

「あ？」

「あとで、お弁当の下ごしらえ手伝ってねエ」

「五人分か」

「そう」

「わかったよ」

「助かります。んふふふふふッ」

やはり、葉佩は上機嫌だ。

よほど酒が回っているのか、弁当の下ごしらえが済むまで、葉佩の機嫌はそのままだった。

閑話休題（十月二十四日～十一月十日）

葛西臨海公園を降りる客はかなりの数いた。皆守たちもその中にいる。

「……座れなかった……眠い……」

「まァ、お隣の夢の国に行く方々も多いでしょうし？」

葉佩は子供たちの手を引いて歩いていく。

「電車、初めて乗った……！」

アンリの目がキラキラ輝いていた。彩は乗り物に弱いらしく、人ごみと電車の揺れで疲れ果てているようにも見える。八千穂は彩の顔を覗き込んで尋ねた。

「彩ちゃん、大丈夫？」

「うん……すぐ、平気……」

以前、亮太の車に乗ったときに比べたらまだ平気らしい。顔色は悪くないようだ。

「おんぶしてあげよっか？ それとも、何か冷たいものでも飲む？」

「飲む！」

「お前じゃない」

皆守に頭を鷲掴みにされたアンリはプーッと膨れたのだが、遠くに見える観覧車に「おおおお〜！」と声を上げてそちらに走っていこうとする。

「アンリ、こ〜らッ！ 待ちなさいってッ！」

苦笑する葉佩は肩から掛けている弁当入りのトートバッグを背負い直しながら、

「水族館から行こうね」

と、しっかりと手を繋いだ。皆守はやたらと高い快晴の空を見上げる。目にしみるほどの青空だ。「目にしみるというよりも……」と皆守は一人ごちる。

「……眩しい……青い……体に色が染み付きそうだ……」

「今日の空はとっても青くて、アンちゃんの目の色に似てるね〜」

八千穂はニッコリ笑うとアンリを見る。アンリの目はやたらと広い場所に来たため、好奇心いっぱいにキラキラと光っていた。

「ペンギンさん、いっぱいいるからね。鮪の大きな水槽もあるから」

「鮪ね」

皆守は大欠伸をして、ぐるりと首を回した。

「水族館は薄暗くて眠くなる……」

「――ってというか、皆守くんはどこでも眠いじゃない！ ――って、イタッ！」

ツインテールの八千穂の頭に、皆守の手刀が真っ直ぐ降った。

「俺の知り合いにね」

葉佩はシュモクザメの水槽にへばりついている子供の背中を見つめつつ言う。

「水族館に来ると、お寿司が食べたくなるっていうのがいるんだけどねエ……特に、ここの鮪の水槽を見ると、鮪の各部位を1貫ずつでも食べないと気が済まないらしいよ」

「水族館は、お魚いっぱい泳いでるからね」

八千穂は「あはは」と笑いながら、アンリと彩の元に向かった。二人をシュモクザメから引っぱがすことにしたらしい。人波を掻き分け、二人の肩を叩いている。

葉佩はぼちぼち歩きながら皆守を見た。

「……帰り、お寿司食べる？ 回らない寿司屋で」

「カレーがいい」

「たまには、お寿司にしようよ」

やけに寿司屋を推してくる葉佩に、皆守の頬が引きつった。

「……なァ」

「はい？」

「その知り合って、お前自身のことじゃないのか？」

「さァねエ？ んふふふふッ。ウニクラハマチ生海老ブリカツオ……」

「……春の七草みたいなテンポで言うな。耳について離れなくなる」

「んふふ～。ここの鮪、いつ見てもいいんだよねエ～……美味しそうだよねエ～……」

「間違いなく、お前だな……」

そして、見て回ること一時間半。鮪の巨大水槽の前に到着した。

「……大きい……」

「すご～い……」

二人は人波をスルスルと掻き分け、ベタッと水槽に貼り付いたようだ。

「久しぶりに見たけど、やっぱり、グルグル回っててすごいなァ……」

「止まったら死んじゃうからねエ」

呑気に会話する八千穂と葉佩の隣で、皆守は子供二人の背中を見つめている。目を離すとどこかにすっ飛んで行きかねない。

「……あ、出てきたぞ」

「面白かった……！」

「グルグル……してる……目、回る……？」

「そういうもんなんだ。あいつらが生きてくためには、ああやって泳いでないといけないんだからな」

皆守は彩の頭を撫で、次第に人が増えていく本館内に少々辟易していた。

「やっぱり日曜は混むな……」

「日曜日だもん」

頷く八千穂。彼女はパンフレットを開いて言う。

「ペンギン見に行こうね～。フンボルトペンギンと、イワトビペンギンがいるからね～」

その後は、外でお弁当を食べ、お土産をごっそり買った。アンリは観覧車に乗りたいと言ったが、彩が断固拒否したため、この日の探索はここで終了となる。

「さて！ この時間に新宿に戻ると、そこそこ遅くなりそうな……？」

葉佩は駅の時計を見上げて首を傾げた。

「明日学校だ～……戻んなきゃね～」

「んふふふッ。そうだねエ。じゃあ、お夕飯は食べないで帰るかい？」

げんなりする八千穂に葉佩は微笑む。皆守は頭をボリボリと搔き、大きな欠伸をした。

「いや、俺はどっちでもいい。どちらにしろ、お前の家に行って、荷物を持って帰らないとまらないからな」

「あ、そっか～……じゃ、一端九チャンちに行こう！ もしかしたら、亮太くん来るかもね。土産話してあげなきゃ！」

頷く八千穂に、皆守は「はァ」と溜息を吐く。

「羨ましがらせてどうすんだ？ あいつ、有給取って平日に別の場所に絶対連れて行くぞ……」

「江の水とか？」

「ああ」

「あたしも行きたいな～」

「でも、とりあえずは我が家に戻りましょう～」

「は～い！」

「……彩、眠い……」

とりあえず、目的地は新宿・葉佩家に決まったようだ。

立ったままうつらうつらし始めた彩を葉佩は抱き上げ、トートバックを八千穂に渡す。アンリの手は皆守が握った。

「じゃ、行きますかねエ」

「一樽、三人前ですかァ、わかりました。三樽。特上で」

葉佩家に戻ってきて一息入れた後、葉佩は機嫌よく出前の電話を入れた。電話を切ると、また上機嫌で「んふふふッ」と笑っている。皆守の眉が片方釣り上がった。

「寿司なのか？」

「うん！」

葉佩は嬉しそうに微笑む。

「だから、甲太郎ちゃん。今日は観念してお寿司食べましょう。特上だしね」

「はいはい」

八千穂は子供たちの買ってきた戦利品を並べながら、葉佩を振り返る。

「九人前って多くない？」

「絶対に亮太来るもの。先手を打ちました。それに、甲太郎ちゃんも明日香ちゃんも、ペロッと食べるでしょ？ んふふふふふ」

「そだね～」

笑う八千穂の前には、大きなペンギンのぬいぐるみが二つ。座ったアンリと彩と同じくらいありそうなものだ。皆守はむんずと一羽を掴むと、それを横にして枕代わりに使う。

「ちょうどい……イテッ！」

「僕のペンギンに頭載せちゃダメ～！ 枕じゃないんだから～！」

ペシッと皆守の額を叩いたアンリはペンギンを奪い返すと、彩と一緒にペンギンを抱えて部屋に入った。そして、出てきたときにはペンギンではなくいつも抱えているコアラと羊を抱き締め笑っている。

「ただいま～」

アンリはコアラに頬擦りして、ギュッと抱き締める。それを見て、

「アンチャン、可愛い～」

と笑っている八千穂にペトッとくっついて、「えへへ」と照れている。彩はぬいぐるみを抱えたまま皆守の傍に座ると、アンリに叩かれた彼の額を撫で、

「痛い、痛い……飛んでけ」

と呟いた。

「……そんなテンションの低いまじないを聞いたのは初めてだな」

苦笑する皆守は彩の頭を撫でる。彩は恥ずかしそうに羊で顔を隠した。

「お寿司～、お寿司～」

浮かれている葉佩はどこかに電話している。

「あ、もしもし。葉佩です。……亮太います？ あ、もう、帰りました？ そうですか、わかりました。了解です。……仕事？ 真面目にしていますよ、嫌だなア、んふ、んふふふふふふふ……」

支部に電話していたらしい。

そのとき、インタフォンが来客を告げた。

「……そうではないかと思っていたのだ」

亮太は溜息を吐いた。

「姉さんがいつだったかそんな話をしていたのだ。『水族館に行くときと寿司屋に連れて行かれる。動物園だとどうなるのかしら』とな」

昔からだったらしい。八千穂と皆守の視線を受けた葉佩は遠くを見つめている。

「だから、あえて、夕食の買い出しはしてこなかった」

「正解だよ」

八千穂は大きく頷く。バタバタバタッと子供たちの足音がして、ドンッ！ と勢いよく亮太の

後ろ頭に何か当たった。

「……？」

振り向いた亮太の目の前に、原寸大くらいの皇帝ペンギンが二つ。

「パパに買ってもらったんだ～！」

「……だ～」

嬉しそうに笑う二人に、亮太は「うむ。よかったな」と頷き、言った。

「また、泊まりに来い。そのときに、もっと面白いところに連れて行ってやる」

「面白いとこ……？」

「うむ」

「……お泊まり……する」

何気ない言葉で子供心をはっきりキャッチした亮太に、葉佩は「ううッ」と呻いた。

「うちのコを……！ 誘惑して……ダッ！」

皆守のゲンコツが葉佩の後頭部に直撃する。

「遊んでやれよ。親父がこれだからな」

皆守は亮太に言い、八千穂も頷いた。

「そうだね～。折角日本に、東京にいるんだもん。いっぱい楽しいところに行ったらいいよ！」

「俺もー」

「仕事をしろ！ ボンクラ！」

亮太の一喝の前に葉佩は撃沈し、凹んだ。

――が、三十分後に特上寿司が届けられた瞬間、葉佩の機嫌は一気に上昇し、幸せ満開で樽の中を覗き、笑っていた。

「今日は楽しかったかい？」

と、葉佩は子供たちのベッドに腰掛けて、二人を見下ろす。

「楽しかった～！」

「……楽しかった……」

「それなら、よかったねエ。甲太郎ちゃんたちも無事に寮に帰りついたみたいだし、本当によかったよ。いろいろと、安心しました」

亮太は「勤務予定が出たらすぐに知らせる」と言い残し出ていこうとしたが、ふと何かを思い出したのか葉佩を見た。

「そういえば、十一月十三、十四日辺り、文化祭ではないか？」

「ああ、そうそう。演劇部の方も読み合わせしたりしてるよ。文化祭に出るわけだし」

「うむ。……ならば、貴様、招待状を俺様宛に出せ」

「何で?!」

訊き返す葉佩に亮太は溜息混じりに答えた。

「『何で』？ ……文化祭は外部の人間が入れない。ただし、招待状を持つ関係者ならば問題ないのだ。……アンリと彩、二人を二人として連れていける、連れて歩けるのだぞ？ コソコソせず」

「はッ！ そうか……！」

「というわけだ。俺様が二人を連れて行く。……俺様に招待状を出すこと。これは最優先重要任務だ！」

「了解！」

と、まんまと乗せられたような気がしないでもないが、アンリと彩もコソコソと学内を歩くことなく、いろいろな場所を見て回れる。ニコニコとベッドの中で笑っているアンリと、もう半分寝ている彩を見て、「楽しめればいいねエ」と内心呟いた。

「じゃ、おやすみ。明日も学校です。早起きしましょう」

「は～い。パパ、おやすみ～。ぎゅ～して～」

「はいはい」

「ぎゅ～……ふあ～……」

「はいはい、彩もね」

二人を順番に抱き締め、葉佩は立ち上がる。

「じゃ、おやすみなさい」

パチン、と部屋の電気を消し、子供部屋のドアを閉めた。

翌日。

教室――休み時間。

「招待状？」

皆守の眉間に皺が寄る。

「うん。そう」

「……亮太は、諜報部、だったよな……？」

「うん。そう」

「入り込んでいろいろと嗅ぎ回ったりは――」

「アンリと彩を連れて、そんなことする暇はないと思うんだけどねエ……」

「……」

「俺、演劇部の方もあるし、いろいろと忙しいんだよ～。亮太がいてくれないと、二人が寂しい思いをするでしょ？」

「……まァな……」

ゴリゴリとクロスワードパズル雑誌に消しゴムをかけつつ、葉佩は皆守を見た。

「安心してよ。そんなことさせないから」

「《生徒会》に目をつけられないように――」

「亮太だって、天香の卒業生だよ」

「そうだったな……」

アロマの煙が教室の天井にわだかまり、消える。

「ま、あいつはお前よりも分別はある。問題ないか」

「ヒドッ！ ヒドイよ！ ヒドイよ甲太郎ちゃん！」

「うるさい奴だな……」

ゴスツと思いきりよく葉佩の脛に蹴りを入れた皆守は、「ふア～あ……」と大欠伸をした。

「眠い……次の授業は寝て過ごすか……ったく……雨なんて降りやがって……全部葉佩が悪い……」

「はい？ どういうこと……？」

「ぐう、ぐう……」

「こ、甲太郎ちゃん……！」

葉佩は雑誌のページの端を少し切り取ると、それをとにかく小さく小さく折りたたむ。「これ以上は無理！」というところまで折りたたむと、ポケットから輪ゴムを取り出し、指に引っ掛けた。パチンコよろしく紙切れをひっかけてゴムを引き絞り、皆守に向かって弾く。

「……ッ」

ぱちん、という音がして、皆守の耳に命中した。ぶつけた葉佩は溜飲を下げたのかご満悦な調子でニコニコしている。

「お、お前……は……！」

ゆらり、と立ち上がった皆守は、問答無用で葉佩の胸倉を掴んだ。

「いい加減にしとけよコラ」

「だってねエ～……」

「オッサンよオ……！」

ガラッと教室のドアが開き、皆守の背を叩いた人物がある。

「あア?!」

振り返った皆守は、頬を引きつらせた。

「皆守くん、何してるの？ 楽しそうだねッ」

「八千穂……！」

「……パパ、ピンチ」

ボソッと呟く声。

「アンリ、静かに……」

ボソボソと話す声。

「八千穂、お前……」

「だって～。そこで会ったんだもん～」

「『会ったんだもん』じゃねエ……！」

「おはよう……八千穂さん、皆守さん、葉佩さん」

不意に声をかけられ、三人は一切に声のした方を振り返る。

「あ、白岐さん、おはよう！」

「おはよう、幽花ちゃん」

「ああ、白岐か……」

「……アンリさんと彩さんのことなら、私が……これから温室に行くから……一緒に行くわ……」

「助かるよ～」

胸倉を掴まれたままの葉佩は白岐に微笑み、アンリと彩に向かってヒラヒラと手を振った。

「それじゃ、また……」

白岐の長い髪の後ろを追うように、てしてし走っていく影を見送る。

「……行っちゃった……」

「幽花ちゃん、あのコたちのこと気に入ってくれたんだねエ。よかった……」

「お前は……！」

ゴン！

皆守の頭突きが葉佩の額に直撃したとき、

「みんな静かに」

と、涼やかな雛川の声が教室に響き渡った。

「……アンリさんと彩さんは、文化祭は見て回るのかしら……？」

「ブンカサイ？ 何それ？」

防水加工もバッチリの猫スーツだったが、リュックはさすがにそこまで高性能ではない。東京都指定ゴミ袋に詰め、白岐が持っていってくれることになった。

彩は白岐と手を繋いで嬉しそうに歩いている。アンリは彩と手を繋いで、小降りの雨の中を歩いていた。

「学校行事よ。……生徒達が學園内でお祭りを開く……ということかしら」

「お祭り！」

アンリは目を見開いた。

「お祭り、まだ行ったことないよ……！」

「正確にはお祭りというか……生徒たちがお祭り騒ぎをする、というところだと思うのだけれど……」

「人、来る？」

「いいえ。……招待された人でないと、中を見て回れないの。……葉佩さんの話を聞いていたけれど、葉佩さん、知り合いの人に招待状を出して、あなたたちをその人に案内させるつもりらしいわ。……猫のきぐるみなしで校内を歩かせてあげたいと言っていたから……」

「……リョタ兄ちゃんに出すのかな……？」

「……たぶん……」

アンリと彩は顔を見合わせた。彼らの母はまだ帰ってこられないらしいから除外される。そうになると、対象は一人しかいない。

亮太は天香の卒業生で、土地勘もある。アンリと彩を預けるには最高の人選だといえた。

「……楽しみね」

「うんッ！」

「……楽しみ……」

彩は白岐を見上げた。

「幽花お姉ちゃん、ブンカサイ、楽しみ……？」

「……どうかしら……でも……」

「？」

「八千穂さんが、今、一生懸命クラスに働きかけをしているから……きっと、楽しいわね。……楽しみね」

微笑んだ白岐に、彩は微笑み返す。アンリはキョロキョロと周りを見回し、

「温室見えた〜！」

と嬉しそうに声を上げて走っていく。

「寒いから、中入ろッ！」

二人を手招きするアンリに、白岐は頷き、彩の手を引いて温室へと入った。

「クラスの出し物って、いつ決めるの？」

呑気な葉佩の質問に、八千穂は「え〜とね」と顎に指を当てる。

「確か、今日のHRだったかなア。でも、たぶん決まらないから、どうやって決めるかを決めるんじゃないかなア。たぶん、目安箱作って、そこにアイデアを放り込むタイプになると思うんだ〜」

「なるほどねエ。決まるのは後なんだねエ。……あ、そうそう。俺は演劇部一一」

「九ちゃん、演劇部の時間見て、クラスも手伝ってね？」

「あ、うん……一応、そのつもりなんだけど……」

「うんうんッ！ その答えが聞けたら充分だよ〜！」

何か、よからぬことを企んでいなければいいが、と葉佩は引きつり笑いを浮かべながら頷く。

「たぶん、飲食店系になると思うの。みんなにいろいろ話を聞いてくと、そういうのがやりたいって」

「ふ〜ん。なるほどねエ」

「九ちゃん、もし、そうなったら、食材の調達なんかを頼んでもいいかな？」

「ん？ いいよ〜」

「よかった〜。ほら、學園から外に出られるのって九ちゃんくらいしかいないし〜」

「んふふ。そうだね。了解」

いざとなれば、亀急便に頼めばいい。

そんなことを考えていた葉佩は、隣の席で眠っている皆守の顔を覗き込んで、
「……甲太郎ちゃん、手伝うのかねエ？」

と首を傾げる。「去年はどうしたの？」と。

「去年かァ……全然教室にいなかったなァ。どっか行っちゃって、それっきりだったよ」

「そうかい。……今年ちゃんと協力させないとね。んふふふッ」

「だよね～」

着々と文化祭に近づくのを感じつつ、遺跡の静寂がいつまで持つことか、と葉佩は窓の外に目をやった。

「あ、虹！」

温室の窓から外を眺めていたアンリは、温室の中を白岐にあれこれ訊きながら歩いている彩を振り返る。

「虹出てる！」

「……あら、本当……」

「……虹……綺麗」

日差しが雲の隙間から覗き、植え込みの葉に散る雨粒が、キラキラと水晶のように輝いている。ぽちり、と上から落ちてきた水滴に揺れる葉から光が散り、光は下の葉を叩き、それ以上の光を周囲に振りまく。

「……うわァ……！」

アンリの目は好奇心に溢れ、外を見つめる。そんな小さなことに今まで気づかなかった。ふとした瞬間に見えるものの、なんという美しさ。

「幽花姉ちゃん」

「……？」

「學園って、甲太郎兄ちゃんが言うほどつまらない場所じゃない気がするよ……！」

「……そうかも、しれないわね」

微笑む白岐は自分の手を握る彩を見下ろす。

「彩さん、気付いていた？」

「？」

「雨上がりの景色は、陽の光の中で銀色に輝くのよ……」

「……銀色……」

「ええ」

まるで、この世を初めて照らした原初の光のように。黒い雨雲を引き裂いた光は、どこまでも銀色である。

最近の葉佩は六時限目が終わるとそのまま部活へ向かう。文化祭終了までそんな毎日が続くのは目に見えていた。

皆守の手が保健室の戸を開ける。

「皆守か」

瑞麗は振り向きもせず煙管を持つ左手を軽く挙げた。彼はキョロキョロと相変わらずの眠そうな目で辺りを見回し、

「……瑞麗、ガキどもは？」

そう訊いた。

葉佩は「部活に専念したい」ということで、皆守に二人を預かるように依頼していた。依頼料は文化祭後に『《新宿カレー三昧の旅》に財布を持って随行するように』というものだ。一瞬、葉佩の口元が引きつったが、子供を預かってもらう手前断りきれず、「あ、ああ、うん。了解、です」とブツブツ途切れる声を何とか腹の底から押し出した。

皆守としては、「してやったり！」なわけだ。

子供らの行動パターンに慣れ、面倒を見るにしろ、放っておくにしろ、手がかからなくなっている。それと引き換えにカレー三昧ならば安いものだ。

瑞麗はくるりと皆守を振り返り、

「昼寝中だ。……白岐と一緒にいたそうだな。二人でずっと喋っていたが、いつの間にか遊び疲れて眠ったらしい」

こちらも放任主義な言葉を煙とともに吐き出す。

「なるほど。……起こすぞ」

「好きにするといい」

皆守は衝立の奥に入ると、アンリと彩を揺する。

「起きろ、寮に帰るぞ」

「……ん……」

「……うにゅ～……」

目を擦り擦り、二人は起き上がり、半分眠りこけながら瑞麗に「また明日ね～」と手を振って保健室を出た。

「……」

皆守の後をついてくる小さな二人の足音。いつものように手を繋いで歩いてきているのだろう。

いつかこの二つの足音が聞こえなくなるときが来るに違いない。

彼らの父も、消えるに違いない。

――消すんだろうな。……俺が……

歩くスピードを緩め、まもなく下校のチャイムが鳴らんとする校舎の中を走って追い抜いていく生徒達の背を目で追いながら、アロマに火をつける。

「甲太郎兄ちゃん」

ふと聞こえたアンリの声。皆守は振り返らずに返事をする。

「どうした」

「外、綺麗だね」

「……」

昇降口で靴を履き替え、表に出た。

雨に洗われた秋口の冷え始めた空気が、アロマパイプを挟む指に触れる。

「……夕焼け」

彩の声。

皆守は視線を上げる。

「ああ、空が……」

――燃えている。

一人でいると見えないものだと思った。俯き、背を丸めて歩いているは見えない。

「甲太郎兄ちゃん」

「ああ」

「ブンカサイ、楽しみだね！　ブンカサイもいいお天気だといいね」

「……楽しみ……幽花お姉ちゃんも言ってた……」

「……そうだな……高校最後、だからな」

苦笑にいた笑みが顔に浮かぶ。

「行くぞ。……肥後にゲームを借りたんだろう？」

「あ、うん！」

「遊ぶ……」

皆守は僅かに後ろを振り返り、手を差し出した。

「帰るぞ」

カレンダーは十一月に入り、年末などあっという間に来るとい季節になった。葉佩の歳になると、ふと気付くと師走も半ば、「あれ？　もう紅白？」というような速さで過ぎていくのが日常というものだ。

保健室では瑞麗が余分にマミーズから出前を取ってくれたおかげで、子供たちが揚げたての唐揚げを頬張って幸せそう。お弁当の中身に唐揚げがないため、ちょうどよかったのだろう。

「美味しい～」

「……熱い……」

「慌てずに食べるといい」

瑞麗の声に子供たちはコクコクと頷き、ふ～ふ～と息を吹きかけて冷ましつつ食べている。

そんな和みの風景の横で、葉佩は非常に複雑な顔をしつつ八千穂を見つめていた。

「探偵喫茶ア？」

「うん。そう。皆守くんも知ってることだけどね」

「……」

「昨日、九ちゃんお休みしたでしょ。昨日決定するってあたし、前に話したよ？」

「仕方ないでしょ。《協会》に呼ばれたんだから……。学校と《協会》だったら、《協会》取らないと……」

「ま、そうなんだけどね。でも、とにかく決まっちゃったから」

「で、俺に衣装の方を何とかしろって？」

「うんッ」

「……」

葉佩は焼きタラコおむすびを食べながら遠くを見つめている。

「……わかりました。今日、部活に行ったら訊いてみるよ」

「やった〜ッ！ 九ちゃん頼れる〜ッ！」

「……この間、それは亮太に言ってたよね……」

子供たちは食べるに必死でこちらの話はまったく聞いていないらしい。皆守はこの場にはいないし、八千穂の暴走を止められる者はいない。もとより瑞麗は止める気もないであろう。

「楽しみだね〜ッ！ この季節ってやっぱりドキドキするなァッ！」

「……俺は、何だか違う意味でドキドキしてるよ……」

ひしひしと忍び寄る嫌な予感。

生き生きしている八千穂を見ると、非常に胸の鼓動が早くなる。いろいろな意味で。

皆守はこれに対して何か言ったのであろうか。八千穂の話を聞いていると、皆守はその話し合いに参加しているらしいが、皆守からそれについてのコメントがない。

――諦めたね……甲太郎ちゃん……

八千穂には何を言っても無駄だ。ブレーキが壊れた鉤山トロッコのようなものだから、脱線して車輪が上を向かない限り止まりはしない。

それにしても……と葉佩は窓の外を見た。

「……甲太郎ちゃん、どこに行ったんだろうねエ。最近、よく消えるねエ」

「消えて悪いか！」

ガラッと戸が開く音と皆守の声が重なった。

「あ、甲太郎兄ちゃん！」

「甲太郎お兄ちゃん……」

「ったく……俺がどこに行こうとお前には関係ないだろう……」

座るなり、皆守は手掴みで葉佩の卵焼きを自分の口に放り込む。

「あ〜……俺の卵焼き〜……」

「ここに来ようとしたら、雛川に掴まったんだよ……！」

「自分の行いのせいだろうが」

「そうだそうだ〜！」

瑞麗と八千穂の追い討ちに、皆守の眉間に皺が寄る。だが、それ以上何も言わなかった。言えば言ったで、八千穂から三倍くらいの言葉が返ってくるのは目に見えている。

「甲太郎ちゃんにも、ちゃんとお弁当あるから……」

葉佩は弁当箱を皆守に手渡す。

「カレーピラフ」

「葉佩、お前、わかってるな……！」

「……カレーだけでご機嫌がよくなる皆守くん……だからカレーレンジャーって呼ばれるんだよ……」

ボソッと呟く八千穂を無視し、皆守はそれを抱えて昼食を開始した。美味そうにピラフを食べる皆守の弁当箱に容赦なくアンリはスプーンを突っ込んで一口もらっているが、アンリと彩も主食はカレーピラフだった。とりあえず、人が食べているものは美味しそうに見えるのだろう。

「甲太郎ちゃん」

葉佩は皆守に尋ねる。

「探偵喫茶……って、何？」

「俺に訊くな。……コスプレ喫茶なんだろ。他のクラスはメイド喫茶とかやるらしいがな」

「メイド喫茶か……その方がよかったなア……」

「オッサン……」

「九ちゃん、オジサン……」

「ちょ！ 違ッ！」

キョトンとしているアンリは無言。

「……冥土……冥土の土産……？ ヘル？」

呟いた彩に、瑞麗が「それは違う」と笑った。

「……はア……」

演劇部の部長は、あっさり八千穂の要求を呑んだ。どうやら、「友達の友達は皆、友達」という超八千穂理論は本当かもしれないと思う。

「八千穂さんの頼みじゃ仕方ないから」

「必要なもの、何も俺聞いてないんだけどねエ、それでもOKするの？」

「葉佩くん、心配性だなア。八千穂さんのことだもの、無理難題吹っかけてきて当たり前だよ。今更何を心配するのさ」

「はい？」

「何言われても、驚きはしません。それに合わせてこちらが動くだけだよ。……ま、何かあれば、ガッチリとその分の損害賠償請求はするしね」

肝が据わっている部長に「あ、ああ、そう……」と曖昧に頷き、文化祭を始めとした何やかんやの舞台衣装を担当している二年生を振り返る。

「五葉ちゃん」

「あ、は、はい……葉佩、先輩……」

マスクの奥でボソボソ答える響五葉は、おどおどと葉佩の顔を盗み見ている。得体の知れない葉佩という生き物を怖がっているようにも見える。

「うちのクラスの人たち、なかなか無茶なことすると思うんだ。……もし、後々で衣装に無理がきてたりしたら遠慮なく言ってねエ」

葉佩はニッコリ笑い、響の頭を撫でる。ビクッと首を竦める響だったが、葉佩の「手をお出しよ」の声に、おずおずと口元近くに握り締めていた手を先輩の方に差し出した。

「これあ〜げる」

響の掌に、ちょこんとみかんが乗った。

「……え？」

「ハウスみかんじゃないよ。露地物。知り合いが送ってくれたんだ。みかんの美味しい国から届きました。……これね、極早稲っていう品種だって。なかなか珍しいものらしいから」

「あ、あの、そんなものを……僕に……？」

「んふふッ。だから、よろしくね。衣装の方。……うちのクラスの御大将は無理言うと思うけれど、一緒に倉庫の中を探してくれると嬉しいな」

「……は、はい……で、出来るだけ、頑張ります……」

「うんッ。素直なコは大好きだよ」

葉佩は響の頭をもう一度撫でると、台本を脇に挟んでジャージのポケットからH. A. N. Tを取り出すと、メールを打ちながら向こうへと歩き始めた。

「……は、葉佩、先輩……かァ……」

響は掌の上のみかんを見つめ、少しだけ頬を赤らめた。

「来ました〜！」

「……何がだ……」

皆守と子供たちと一緒に寮に帰る八千穂は唐突に叫ぶ。周囲の視線が一斉にこちらに向いたが、八千穂は構うことなく言葉が続ける。

「衣装の方、何とかあったって！ うんうんッ！ さすが九ちゃん！ 頼れる男だよ〜ッ！」

「不憫な……」

皆守の呟きに、アンリはコソッと尋ねる。

「甲太郎兄ちゃん、衣装って何に使うの？」

「文化祭の出し物だ」

「ブンカサイに使うの？ すごいねすごいね〜！」

「……楽しみ……」

子供たちはウキウキと文化祭に胸をときめかせている。八千穂もそれは同様らしい。

「高校生活最後の文化祭だもんッ！ 頑張らなきゃッ！」

「お前、頑張るなよ……。絶対にとんでもないことになる……」

「えへへッ！ 大丈夫大丈夫！」

「……」

不安を絵に描いたような皆守は巨大な溜息を吐くと、「じゃあね～！ また明日！」と手を上げて女子寮に消える八千穂を見送った。

「限りなく不安だ……！」

呟き、アロマに火をつける。

「……アロマが、美味しいぜ……」

闇に舞う、マント。

「ファントム……ねエ」

自分をどこかから見つめる視線に気付いている。恐らくは、校舎の屋上。

「四番目の《幻影》……怪談……」

葉佩は夕闇に覆われようとしている校舎を振り返る。

「……ファントム……」

黄昏色の中に、黒い闇。黄昏が過ぎれば訪れる色。天香の今を象徴する色――闇。

「見ておいで。……お前さんのいいようにはならないよ？ んふふふッ」

葉佩は子供たちの待つ男子寮へと向かうため、ファントムに背を向ける。葉佩が踵を返した途端、ファントムの気配は掻き消えるようになくなった。

「《オペラ座の怪人》じゃあるまいしねエ……んふふふッ。《天香の幻影》なんて、語呂が悪過ぎるよ」

影が夜に飲まれていく。

十一月に入ってから、頻繁にファントムの噂を聞くようになった。ファントムは生徒の危機に颯爽と現れ、彼らを窮地から救うと風のように消えるという。

「……面白くないねエ」

「何がだよ」

十一月五日土曜日。

子供たちは亮太の部屋に泊りがけで遊びに行っているため、家の中は非常に静かだ。

葉佩はPCから顔を上げた。皆守はアロマパイプを左手の指に挟み、ゲームのコントローラーを握っている。やっているゲームは、ビルを爆破するために限られた爆弾を効率よく配置するという、見た目には非常に地味なゲームだが、それゆえ奥が深い。

「九ちゃんがそんなこと言うの珍しいね～」

ファッション誌をめくりながら八千穂が葉佩を見た。

「……ん～……四番目の《幻影》って、明日香ちゃんに教えてもらったじゃない」

「うん。言ったね～」

「ファントムのことなのかねエ？ まア、ファントムにしろ、ファントムじゃないにしろ、俺はみんなが言うほどファントムって正義の味方じゃないと思うんだよ」

葉佩はチラリとPC画面に視線を落とし、カチカチ、とマウスをクリックした。

「ああ、そういえば、真理野のときに会ったとか言ってたな」

コツン、と皆守のアロマが灰皿を叩く。ホロ、と灰が落ちた。

「亜柚子ちゃんを人質に取ってたんだよ？ それで正義の味方を気取るなんてどうかしてるよね」

「ああ、そうだな……」

皆守の指がカチカチとボタンを押していく。

「ロクでもない奴だ」

「ヒナ先生、無事でよかったよね～……ファントムか～……あ、そうそう。最近、《ファントム同盟》とかいう非公認団体が出来たらしいよ？」

「また、下らない……」

アロマパイプを噛む皆守に、八千穂は言う。

「本当だってば！ ……『ファントムは《生徒会》から自分達を救ってくれる』とか、何とか……」

「……おやおや。風向きが怪しくなってきたねエ……」

葉佩は再びマウスをクリックし、「んふふ」と笑った。

「よしッ。雨四光！」

「仕事してたんじゃないのかよ?!」

皆守の声に、葉佩は「はて？」とそっぽを向いた。

「仕事の合間にちょっと花札してただけじゃない」

口の中で言い訳して、葉佩は浴衣のエリを直しつつ座り直す。

「二人とも、ファントムには気を付けなさいよ」

「当然だよッ。わかってるわかってるッ」

「……言われなくてもな」

返答を聞いた葉佩はほっとしたような顔をして立ち上がった。

「何か飲むかい？ お茶、淹れてくるよ」

「コーヒー」

「あったかい紅茶！」

「了解。んふふ」

翌日、七日、日曜日。

葉佩たちはタカシマヤで待ち合わせしていた。

「ロッカーに荷物預けてくればいいよ。待ってるから」

ハンズ入り口で葉佩は八千穂と皆守に言う。二人が店内に入り、その出入り口に比較的近いコインロッカーに荷物を預けていたとき、サザンテラスの跨線橋を渡ってくる兎耳のついたパーカーを着た子供二人と、子供と並ぶとやたらと背が高く見える亮太を発見した。

「パパ〜！」

アンリと彩は手を繋いで葉佩の方へと走ってくる。

「おかえり〜！」

葉佩は抱きついてきた子供たちをギュッと抱き締める。

「んふふ。楽しかった？」

「うんッ！」

「……写真、撮った」

「そうかい。後で、パパに見せてねエ」

アンリと彩の頭を撫で、のんびりとやってきた亮太に視線を合わせた。

「ありがとねエ」

「うむ」

「昨日はどこに行ったの？」

「熱帯植物園だ。彩が温室の植物を見たいと言っていたから連れて行った」

「ヘエ〜……夢の島？」

「うむ」

「そうかア。その写真だねエ、きっと」

体に纏わりつく子供たちの肩を抱く葉佩の背中に、八千穂と皆守の声が聞こえてきた。

「外は開放的だよねエ」

「葉佩がいなけりゃ出ようとは思わなかったろうがな」

「皆守くんは、少し外の空気を吸った方がいいんだよ」

「……何で？」

「何となく？」

「訊き返すな！ 憶測で物を言うな！」

いつものようなボケとツッコミを披露しつつ出てきた二人は、亮太を見つけ、葉佩に引っ付く子供二人を見つける。

「よォ」

皆守は亮太に片手を挙げて挨拶し、

「アンチャ〜ン！ 彩チャ〜ン！」

八千穂は二人をムギュッと抱き締めると、傍に立っている亮太を見上げた。

「こ〜んちはッ！」

「うむ」

にこやかに挨拶する八千穂に亮太は頷き、「今日も元気で何よりだ」と返す。葉佩はぼん、と手を打った。

「じゃ、みんな揃ったし、お昼ご飯食べに行こー」

「新しいカレー屋が向こうに出来たらしい。行くぞ」

「はい？」

「そうか、カレーか。了解だ」

「え？」

「み、皆守クン、またカレー?! 違うもの食べー」

「行くぞ、八千穂、葉佩」

「カレー！」

「……カレー」

八千穂と葉佩の意見は、サラリとスルーされた。

「……違うもの食べたいねエ……こう……クミンとコリアンダーとか、そういう匂いのない場所にご飯食べに行きたいなァ、みたいな……」

「そだよねエ……まったりこっくりしたクリームソースとかの匂いが恋しいよねー……」

二人は揃って溜息を吐き、ボードウォークを先に歩く四人の後を追うように小走りに進んだ。

「怪談？」

亮太の眉間に皺が寄った。

「俺様のときにもないことはなかったが……よく覚えていない。興味がなかったのだ」

「詳しく訊きたかったんだけどなァ……」

葉佩は残念そうにバターナンを千切る。亮太は左手のスプーンでカレーをかき回しつつ、「時代によってその手の怪談は入れ替わるものだ。……俺様が知っているものと同じとは言えまい。……それに、あの天香學園は噂の伝播の仕方が並みではない。『山羊がいた』という話が、翌日の同時刻には『キマイラがいた』というものに変化している」

と懐かしがるような目をして言った。彼にとっての学生生活は悪いものではなかったようだ。

「ところで……」

八千穂はニコッと笑って亮太と葉佩を交互に見つめる。

「キマイラって何？」

答えたのは、葉佩。

「頭がライオン、胴体が山羊、尻尾が蛇っていう、化け物だねエ。……今は合成生物の総称としても、生物学でも使われたりするよね」

「うむ。背ビレ尾ヒレがついて、訳のわからないものになるのが天香だ。生徒の願望が上乘せされるせいで様々な姿に噂が変化していく」

「……いい例がツチノコかもしれないな」

皆守は器用にカレーの中のチキンを解体している。

「ツチノコを捕まえたら願いが叶う……そんなありえないもので學園が騒然とするんだ。暇だといえは暇だが、それだけ鬱積した感情があるってことだ」

「それが《幻影》に繋がる……か」

葉佩は「うんうん」と頷いている。

「四番目の《幻影》——《幻影》だからファントムを名乗る可能性ってことかア。怪談を逆手にとって、《生徒会》打倒を叫ぶわけかねエ？」

「くだらない。そんなことをしても締め付けが厳しくなるだけだ」

吐き捨てる皆守に亮太は首を傾げた。

「……そんなに酷くなっているのか。ふむ……俺様がいた頃よりも酷いか」

葉佩は「そうかもしれないよ？」と呟いた。

「遺跡の闇は人の心を狂わせる。少しずつ少しずつね。遺跡が口を開けるに従って物事が推移する。俺が《秘宝》に呼ばれたのは、『助けて』ってことなんだよ」

皆守と八千穂の視線が上がった。

「……助けなきゃならないのかもしれない。けれど、俺には《秘宝》の声を追うしか出来ない。呼ばれて、初めて、俺はそこに辿り着ける」

葉佩の目が皆守を見て、微笑んだ。

「そういうことなんだよ。《生徒会》がどう言おうと、俺は、俺のすべきことをする。《秘宝》は悲鳴を上げているんだよ」

八千穂は手を止めて葉佩を見た。

「助けてあげたいね」

「そうだねエ」

そして、また、葉佩は微笑む。

「だから、お前の探索の日付がバラバラなのか」

得心が行ったのか皆守は大きく頷いた。

「そうそう。そういうことだよー」

葉佩はアンリの口の周りを拭いながら、視線だけ皆守に向ける。

「声が聞こえるのは、大体何かしらの問題が起こる前日だねエ。今のところ、それは当たってると思う。今までその話をしなかったのは悪かったねエ……」

「いや」

食後までその話は続いていた。コーヒーを片手に皆守は首を横に振る。八千穂はマンゴーラッシーを飲みながら、「なるほどね～」と頷いた。

「いつも思ってたんだ～。『どうして一気に攻略しないんだろ』って」

「遺跡も、《秘宝》もそうそうにはねエ」

葉佩は苦笑して顔を上げた。

「はい、アンリ、綺麗になったよ」

「うんッ」

「そろそろ、口の周りを汚さないように食べるようにしなさい」

「う～……頑張る」

「ん。よしよし。……彩もだよ？」

「うん……」

「よしよし。いいコだね」

亮太は微笑む葉佩の横顔を睨みながら、こう呟いた。

「……貴様、本当に《秘宝》の声が聞こえるのか？」

皆守と八千穂は揃って葉佩を見た。言われてみれば、頭からそれを信じており、今まで疑いもしなかった。

「聞こえるよ？」

「なぜ？」

「『なぜ』って……昔からそうなんだから」

葉佩は水を飲みながら亮太に言う。いつも通り、ニコニコ笑いながら答えた。。

「ホラではないという保証はない」

「酷いねエ……。ちゃんと《秘宝》を持って帰ってきてるじゃない」

「……そうだが……納得出来ん」

父と叔父のやり取りを聞いていた彩は、皆守の袖を引いた。

「どうした、彩」

「……彩、見える……父は彩、信じる。……だから、彩は父、信じる」

「ああ。確かに、彩のことを親父はちゃんと信じてるさ」

「そだね。九チャン、ちゃんと彩チャンのこと信じてるもんね。あたしは九チャンのこと、信じてるよ。彩チャンのこともね」

「僕は？」

「もちろんッ、アンチャンのこともッ」

「えへへ～」

亮太は溜息を吐いた。

葉佩の《秘宝》回収率が高いのは事実である。《秘宝》を飲み下すということをしていなければ、今頃はもっと難解な遺跡で、H. A. N. T片手に独り探索していたことだろう。

そうならいたら、アンリと彩は父と離れ、一体どこにいるのだろうか。

推移する時間と事実は、現在を形作る重要なファクターである。アンリと彩が日本で父と暮らし、皆守、八千穂といった天香の面々と楽しく過ごせる今の状況は、葉佩が《秘宝》を飲み下し、一回り以上も若返ったという事実の上に成り立つものだ。

「……わかった。貴様を信じることなど出来ないが、アンリと彩に免じて、そういうことにしておいてやる」

「亮太クン、頑固だねエ～……」

「こいつの頭は石頭だからな。早々に信じることなんて出来ないだろうさ。その上、根っからの

シスコンだ」

ニヤリと皆守は笑う。亮太の眉間に皺が寄り、
「誰がシスコンだ」
と少々どもりながらコーヒーを口に運んだ。

十月は日々緩慢に流れていたものだが、十一月はなぜこんなにも忙しいのか。
「放課後、文化祭の出し物がある文化部以外は、クラスの方の手伝いだからねッ」
元気よく言い放つ八千穂に誰が逆らえようか。

十一月十日水曜日。

「……一抜けた……ッと……」

皆守は教室を抜け出し、帰路に着く。保健室で子供たちを拾い、寮に帰らねばならない。
ガラララ……

保健室の中に、瑞麗がない。

「……カウンセラー？」

皆守の声に、ガサガサと衝立の向こうから音がして、ヒョコッと子供たちが顔を出す。

「兄ちゃん！」

「お兄ちゃん……」

ドスン！ といつものように体当たりを食らいつつ、二人の頭を乱暴に撫で、訊いた。

「瑞麗はどこ行った？」

「どっかの部活で怪我した人がいるからって言ってた」

答えたアンリに、皆守は「ああ、わかったわかった」と頷き、大欠伸をする。

「じゃ、俺たちは帰ろうぜ。眠いんだよ……疲れたなァ……今日も……」

アロマに火を点け、「ふう……」と溜息を吐く。

「アロマが美味いぜ……」

「あろまがうまいぜ～」

「……うまいぜ～……」

「……」

計ったタイミングで異口同音に言うアンリと彩に、皆守は頭をボリボリと搔き、くるりと背を
向けた。

「帰るぞ」

「は～い」

「……うん」

『遠き山に日は落ちて』が流れ始める。

「お疲れ様でしたァ」

「また明日ねエ。んふふふふふ」

葉佩は女子部員と別れ、男子部員達と一緒に寮に戻ってきた。

「後、数日だねエ」

「本当にな～。お前が主演でよかった。見栄えがいいからな～」

「んふふふッ。まア、それと引き換えにいろいろと明日香ちゃんの無理も聞いてもらってるし……」

「聞かなきゃ後が怖いだろうが」

「言えてます」

ひとしきり笑い合うと、葉佩は後ろの方からトコトコついてきていた響を振り返る。

「あ、そうそう。五葉ちゃん、ありがとね。あの衣装の山の中から探し出せたのはお前さんのおかげだよ～」

「あ、い、いえ……」

マスクの奥で声が籠っている。もじもじと俯き、怯えたような響に、葉佩は僅かに首を傾げ、微笑んだ。

「ありがとね。感謝してるよ」

そして、顔を前に戻す。

「……響はいつもあんなだ。……でも、あいつの縫製技術はすごいからなァ……。小道具作りなんか、右に出る奴いないし」

「手先の器用なコなんだねエ。素晴らしいじゃない」

「まァ、な」

そして、寮に帰りつき、各々、部屋に戻る。

葉佩は自室のドアの鍵を開け、入った。

「……おやおや」

皆守は彩にカレーの蓋を傾げ、アンリは肥後から借りてきたらしいアクションゲームで遊んでいる。

「ただいま」

「おかえり～」

「……おかえり、父」

皆守は軽く手を挙げるだけで挨拶を済ませ、レシピ本を指差しながら彩に話して聞かせている。

「……甲太郎ちゃん」

葉佩は荷物を置き、彩の隣に腰を下ろした。

「何だよ」

視線を上げた皆守に、葉佩は言う。

「明日なんだけれど……探索に行かなきゃならないと思う」

「？ 何だよ、突然」

「呼ばれた。《秘宝》に……」

アンリはゲームを一端停止して父の方を向き、彩は目を上げて父を見た。

「……亮太の言ったこと、気にしてんのか」

「別に、そういうわけじゃないけれど……たぶん、今日か明日に何かが起こる。そして、明日俺は探索に行く。……確定事項だよ。だから……」

「わかった。明日、付き合っやる」

「ありがとう。……だから、彩、アンリ、今日は家に帰ろう。明日の支度をしようねエ」

「は～い」

「……わかった」

子供たちは荷物をまとめ始め、葉佩も私服に着替える。

「甲太郎ちゃん……俺の言ったことを信じてくれるんだねエ」

「やっぱり気にしてるんじゃないか」

パタンと本を閉じ、皆守はアロマに火を点ける。煙がゆったくと天井に向かって上がっていった。

「信じてやる。……お前、嘘は吐かないからな」

「ありがとね」

「とりえはそれだけだろ」

「ヒドッ！」

支度を終え、葉佩は家に持ち帰る荷物だけを持った。子供たちはリュックを背負う。皆守も立ち上がり、葉佩について部屋を出た。

「じゃ、そういうことで」

「ああ。わかったよ」

はア……と皆守の溜息。

「アロマが美味しいぜ……」

「あろまがうまいぜ～」

「あろまがうまいぜ～」

光学迷彩で消えた子供たちの小さな声。そして、クスクス笑いが聞こえる。

「おやおや。真似されちゃってるねエ」

「うるさいな」

ビシッ、と葉佩の頭に皆守のチョップが入った。

十一月十一日。

「まったくもって、馬鹿なことをしたもんだねエ」

「……あァ、そうだな」

葉佩はクラスメイトの話に耳を傾けている。

「『撃ってきた』という話だから……面倒だよ。すごく面倒だねエ」

そう言いながらも、葉佩は手元のクロスワードパズルをめぐっている。

その間も、教室の中は延々とファントムを賛美する生徒達の声で埋め尽くされていた。

「……なァ……」

「ん？」

《秘宝》の声が聞こえたとか言うわりに、葉佩はいつも通りの薄らトボケたしまりのない笑顔で、呼んだ皆守を見る。

「どうしたの？ 甲太郎ちゃん」

「……ファントムは、學園を、《生徒会》を根本から覆そうとする存在みたいなもんだろ？」

「今のところ、そんな感じだねエ」

「けれども、お前とは敵対している……？」

「そうだねエ。俺は、決して好きではないねエ」

葉佩の口から漏れる、決して普段は聞かれることのないマイナス方向の言葉。

「あいつは、卑劣だよ。気に入らないね」

ポツリ、葉佩のこぼす言葉に、皆守の眉間に皺が寄った。その言葉はあまりにも鋭く、聞いたことがないほどの強さがある。

「……ということは、今、學園内は三つ巴に近いってことか？」

「三つ巴？ ああ、甲太郎ちゃん、面白いことを言うねエ。確かに、《生徒会》《幻影》《宝探し屋》……この三つで小競り合いしてる感じだものねエ」

言葉がいつもの『のほほん』とした調子に戻った。

「でも、俺は一人じゃないものねエ。……俺には《バディ》がいるもの。寂しくはないし、これ以上心強いものはないよ」

「……」

「当然、甲太郎ちゃんもその中にいるからね」

「……」

皆守は葉佩の視線を受け流し、アロマに火を点ける。気だるげに漂う煙の先を見つめながら、皆守は一つ溜息を吐いた。

「そう思ってくれてるのか……」

「もちろん」

「猫も杓子もファントム、ファントム……そんな中で、お前は……」

「少数精鋭だよ。みんなが一騎当千の勇士だからねエ。んふふふふふ」

冗談なのか、本気なのか――葉佩のことだから本気なのだろうその言葉。

「お前は……呑気だな……」

「こうして構えてられるのも、バディの皆様のおかげです。んふふ」

本気に違いなかった。

「おっはよ〜！」

八千穂の声がした。とととと、と軽い足取りで葉佩の後ろを通ると、ガタン、と自分の席の椅子を引く。

「ちょっとちょっと、九ちゃん」

「ん？ 明日香ちゃん、どうしたの？」

「ファントム同盟、本当の話だよ！ 今、そこで後輩の子とそんな話してきて……」

「徒党を組んで《生徒会》に反旗を翻そうってか？」

「ん〜？ ファントムを応援する会？ みたいな？」

「何言ってるんだか。なァ、葉佩」

「……まァねエ……でも、この流れって《生徒会》にとってはありがたいものだよねエ？

《生徒会》の圧力で成り立ってた學園のバランスが崩れかねないわけだから……」

皆守と八千穂は葉佩の顔を眺めていた。ぼや〜ツとしているようで、何かは考えていたらしい。だが、皆守は反発した。

「大衆心理って奴なんだろうとは思いますが……だが、世の中にはどう頑張っても覆せないものってのがあ。……そういうものなんだ」

「皆守クン……」

「甲太郎ちゃんは、《生徒会》と學園のバランスっていうの、ちゃんと見えてるんだねエ。パパ、感心しました」

「阿呆がッ！」

ガンッ！ と葉佩の側頭部に皆守の拳が命中する。

「……今日は早起きし過ぎて頭が痛い……保健室に行って寝る」

「おや、そうなんだ？ アンリと彩によろしく言っておいてねエ。もしあれなら、教室で甲太郎ちゃんの代わりに授業受けさせるのもいいかもしれないけれど」

「……葉佩よ……お前いい加減にしろ？」

ニコッと笑った葉佩のこめかみに、皆守の指がミシリとめり込んだ。

「イタタタタタタタ！ 嘘です！ ゴメンナサイ！」

「ッたく……とにかく、俺は保健室で一休みだ。じゃあな」

皆守は教室を出て行った。

「おやおや。仕方ないコだねエ」

「ホントだね〜……」

八千穂と葉佩はそろって溜息を吐く。そこに。

「皆守君、HRですよ？」

「ああ、保健室に行く。頭が痛いんだ」

「皆守君！ ……もう、仕方がない子ねエ……」

雛川の溜息が聞こえる。

「あ、ヒナ先生来たねッ」

「そうみたいだねエ。明日香ちゃん、席にお着きよ」

「は～いッ」

八千穂が席に着くと同時に雛川は教室に入ってきた。

「皆さん、静かに。……」

HR終了後、八千穂は大きな溜息を吐いて葉佩に言う。

「……ヒナ先生だけだよ～……あたしたちの心配してくれるのって……。でも、あんなこと言
って平気かなァ……。どこで誰が聞いているのかわかんないし……ちょっと心配……」

「まァ、そうだねエ。……《生徒会》は學園の頂点に立っている。先生も、生徒も、彼らに逆ら
えない。彼らがこの學園の《法》だからねエ。『壁に耳あり、障子に目あり』で、明日香ちゃん
の言うとおりの、誰がどこで何を聞いていて、それがいつ《生徒会》の耳に入らないとも限らない
。……《執行委員》は生徒の中で目を光らせている。あと、何人いるかわからない《執行委員
》に、みんな怯えている――はずだったんだけどもねエ。ファントム様のおかげで、見てごらん
、こんなにイキイキしてる彼らを見るのは初めてかもしれないよ」

「九ちゃん……」

憎々しげな葉佩の言葉が八千穂の耳に入ってくる。子供たちの前でこんなことを言ったことは
ない。どうも葉佩はファントムが嫌いでも仕方がない様子である。

「……話したでしょ。俺が七瀬ちゃんだった時の話」

葉佩は声のトーンを落とし、八千穂の方へと体を傾ける。

「亜柚子ちゃんがファントムに人質に取られて……っていうの。みんなが信じるファントムは、
本当に《幻影》でしかない。だから、危ないんだ。踊らされるんだよ」

「うん。……でも、ヒナ先生は、そんな目に遭っても、あたしたちを守ろうってしてくれてるん
だね」

「うん。……だからこそ、心配――」

「ありがとう、八千穂さん。葉佩君。心配してくれて」

葉佩と八千穂はガバッと顔を上げ、揃って雛川を見上げた。驚愕に目を見開いている。

――今の話、どこから聞いてましたか～……?!

葉佩の頬に笑みが浮かぶが、それはあくまで体裁を取り繕うためのものでしかない。

「大丈夫。先生、こう見えて運動神経はいいんだから」

――ファントムに捕まったのは誰ですか～……!?

ツッコミたいのをグッと堪え、葉佩は「んふふ」と小さく笑う。雛川は葉佩を見つめていた。

「葉佩君、先生に何か隠していることはない？」

「ッ！」

八千穂の手が、葉佩の腕を握る。

「イタ、イタタタタ……ッ！」

ミシミシと音がしそうなほどに握り締められる腕に悲鳴を上げると、八千穂は慌てて手を離す。葉佩は握り締められた部分をさすりつつ、ニコッと雛川に微笑んだ。

「ありませんよ？ んふふふふッ。俺、文化祭の支度や何かで忙しくて。大事な担任の先生にご迷惑をかけるようなことは。んふふふッ」

成績表上での葉佩は素晴らしい優等生だ。それほど目立った異常行動があるわけでもなく、周囲の生徒とも摩擦はなく、温厚で、生活態度も申し分ない。ただ、皆守とつるんで授業に顔を出さなかったりすることはままあるのだが、それを差し引いてもお釣りが来る。

「……そうやって、はぐらかす……」

葉佩の人畜無害の微笑みに雛川は僅かに頬を染めた。八千穂は言う。

「九ちゃんはあたしがついてるから、何の心配もないですよ！」

「壊れたトロッコ列車が何を言ってるのだろうか」と葉佩は思うが、雛川はそこまで感知していないに違いないだろうと口を噤んでいる。

「そうね。八千穂さんがついているなら大丈夫ね」

頭を横に振りかけるが、八千穂の手が腕を掴んだ。

「……イ……ッ！」

悲鳴を上げかけ、口を手で覆う。雛川は小さく微笑み、葉佩に言った。

「ねエ、葉佩君。……ちょっと早いんだけど……進路のことで相談があるの。よかったら先生に時間を少しくれないかしら……？」

ピンと来た。

葉佩は二つ返事で了承する。

「わかりました」

「ありがとう、葉佩君。それじゃ、一緒に行きましょう。……八千穂さん、今日も一日、勉強頑張ってるね」

「は～い！ じゃ、九ちゃん、また後でねッ！」

八千穂に手を振り、葉佩は雛川について教室を出た。

「……この間の？」

葉佩の眩きにも似た問いかけに、前を歩く雛川はぎこちなく頷く。

「葉佩君、屋上に行きましょう」

「了解しました」

僅かに振り返った雛川に、葉佩は「んふふ」と笑いかける。

「行きましょうか、ヒナ先生」

屋上への階段を昇りつつ、葉佩は「さて、どうしようかね？」と首を捻る。

どんな話にしる、葉佩本人の素性に関わる部分に踏み込んでくるのは目に見えていた。はぐらかすか、いっそ打ち明けるか。打ち明けた方が楽には楽かもしれなかった。すでに雛川の立場

は《生徒会》や《ファントム》の思惑を外れている。

雛川の手が、屋上に通じるドアのノブを捻っていた。

「キャ……ッ」

冷たく湿った風が雛川の髪をなぶる。空は曇天。屋上は黄色く色づく學園の木々がよく見渡せた。

「……こうして見ていれば、この學園も、他の高校と何ら変わらないのに。内情は、こんなにも違う。……閉塞しかない。変わっている？ ううん。違う。変わっているんじゃないわ。そうならざるをえなかった學園なのね、ここは……。《生徒会》も……《転校生》も……すべてが特別」

「……」

「葉佩君……あなたは何者なの？ 目的は何？ 先生に、話して……」

葉佩は覚悟を決めた。これならいっそ、教師の中にも味方を作った方がいいだろうという結論に達したとあっていい。そう。瑞麗のような特殊な教師の味方ではなく、普通の教師の味方がほしい。

「ヒナ先生、俺は――」

葉佩の顔からいつもの呑気な笑顔が消えた。口元を引き締め、言葉を紡ごうとしたそのとき。

「あ！ パパだ！」

「父……何してる？」

ドスドスッ！

何かが葉佩にぶつかり、葉佩は「あ、あう～……」と情けない声を喉の奥から絞り出した。

「……ッ！ こ、子供……の声……?!」

「あ！ ど、どしよ……」

「……大変……」

姿は見えないが、そこに何かがいる！

雛川の視線が葉佩に注がれ、葉佩は自分の後ろの『何か』の頭をぽふん、と一度撫でた。

「いい機会だねエ。お話します。全部ね。……俺のこと。このコたちのこと」

葉佩の手が、アンリと彩の猫スーツの首にぶら下がっている鈴を操作する。アンリと彩の姿が雛川の目にもハッキリと見えた。好奇心旺盛な二対の目が雛川を見上げている。

「……子供が……」

「ヒナ先生。……俺は《宝探し屋》。この學園に眠る《秘宝》を保護するために《ロゼッタ協会》というところから来ました。……このコたちは俺の息子。こっちがアンリ。こっちが彩。可愛いでしょう？」

「……せ、先生には、何が何やら……」

「俺、こう見えても三十路なんだ。……亜柚子ちゃんよりもずっと年上だよ。んふふふッ。…
…その辺りも含めて、詳しく話してあげるよ」

雛川は二、三度瞬きをして、不思議そうにアンリと彩の頭を撫でた。

雛川は葉佩の話聞き――その様子は明らかに半信半疑だったのだが、とりあえずは信じたい。

「そう……だったの……」

「そうだったんだよ。んふふふふ……」

「ねエ、葉佩君……私の話、聞いてくれる？」

「いいよ。……そのために、俺はここに来たんだからねエ」

「葉佩君たら……」

小さく微笑んだ雛川は、訥々と彼女が日頃から抱えていた悩み――學園のあり方を語る。それは彼女にはいかんともし難い、學園生の向かう危険への恐怖であった。《生徒会》《ファントム》二つの大きな存在に立ち向かうことすら出来ない彼女。教師として自分がこうありたいと願う姿にすら近付くことが許されない彼女。

あまりにも、小さな、無力な、彼女という存在。

「私、怖い……何かとてつもなく大きなことが起こりそうで……怖い……！」

「亜柚子ちゃん……」

葉佩は自分よりも年下の可愛い女性に対して憐憫の情を抱いた。

――世の中には『どう頑張っても覆せないもの』ってのがある。……そういうものなんだ。

皆守はそう言う。それは確かに間違えてはいない。葉佩ですら、《ロゼッタ協会》という長いものに巻かれており、それはどれだけ葉佩が優秀な《宝探し屋》だとしても覆せるものではない。

だが、望みを持つことは間違えてはいない。雛川の望む小さな幸せは、本来ならば叶えられるものであるはずなのだ。

葉佩は手を伸ばし、雛川の頬にかかる髪を払う。

「大丈夫だ――って……ちょ……ッ！」

「ヒナせんせ～！」

「せんせ～……」

葉佩が伸ばし、雛川を抱き締めようとした腕が空を切る。なぜなら、雛川は屈んでおり、抱きついた子供たちを抱き締めていたからだ。

「ヒナせんせ～、怖い？ 震えてるよ～」

「……平気？」

「……ありがとう……優しいのね……」

――もしも～し……

やり場のない手を一、二度グーパーして、葉佩は頭を掻いた。

「ヒナせんせ～、大丈夫！ きっと、パパが何とかするから！」

「父、《宝探し屋》。すごい……」

「だって、ヒナせんせ～、ママに似てるもん！ 一生懸命、僕達のこと考えてくれてるママみ

たい！ 大丈夫！ パパ、絶対に何とかするよ！」

アンリは満面に笑顔を浮かべ、雛川を見る。アンリと彩の頭の上に葉佩の手が載り、雛川は視線を上げた。

「葉佩君……」

「何とかするよ。大丈夫。《約束》するから。……ね？」

「……本当？ あなたには、あなたのやるべきことがある……でも……」

「うん。それ以上は言わなくてもいいよ」

ニコッと葉佩は微笑んだ。

「……俺にとったら、この学園の生徒は俺の弟妹みたいなものだしね。みんな仲良くしてくれてるし……アンリと彩にも、優しくしてくれるコがいる。……守るよ。それだって、俺の仕事だもの」

頷く雛川の手を握っていた彩が、ビシッと空を指差した。

「……雨」

ポツリと雨粒が頬を濡らした瞬間、ドーッ！ という音とともに、猛烈な勢いで雨が降り注ぐ。

。

「きゃッ……！」

「濡れちゃうね！ 中に入ろう！」

「土砂降り……！ 土砂降り……！」

葉佩と雛川は中に入ろうとしたが、アンリと彩は雨の中に走り出そうとしたから、その二人を回収するのに手間取り、葉佩と雛川はずぶ濡れ。

校舎に通じるドアをくぐってようやく一息吐いた二人は、顔を見合わせて苦笑し、子供たちも揃って、四人一緒にくしゃみをした。

子供たちは瑞麗と雛川と一緒に保健室で昼食を食べるということで、葉佩は自分のお弁当を瑞麗に渡し——中味は鶏の唐揚げだ——八千穂と一緒にマミーズへ行くことにした。

「ヒナ先生が?!」

「うん……そうなんだよ～」

「……なるほどね～……やっぱり素敵な先生だよッ。大好きッ」

「亜柚子ちゃんもそう言ってもらえれば本望だと思うよ？ あの人は教師の鑑だよ」

そんな話をしつつ廊下を歩いていく葉佩と八千穂の前に、図書室に向かうのであろう七瀬が歩いている。八千穂は当然のように七瀬を呼び止めた。

「月魅～！」

「あら、八千穂さん……と、は、はは葉佩さん！」

「やア、こんにちは」

「……そ、その節はいろいろとご迷惑を……！」

「あ、ああ、いや、いいんだよ。俺は別に気にしてないし。ちょっとした事故だしねエ。お前さんも気にしなさんな」

「あ、はい……ありがとうございます」

「んんん？ 月魅ったら、赤くなっちゃって～」

「や、八千穂さんッ！ 何を……！」

慌てる七瀬に、八千穂はニコニコ笑いながらこう提案した。

「えへへッ。まァそれはこっちに置いて……これから九ちゃんとお昼食へに行くんだけど、月魅も一緒に行く？」

「あ、いえ、私はこれから調べ物をしようかと思っていますので、司書室で簡単に済ませようかと……」

「あれ？ まだ何か――」

言いかけた八千穂の言葉を遮るように、葉佩は七瀬に訊いた。

「ファントム？」

「え、あ、はい、そうです」

七瀬は頷く。

「今、學園の中で一番話題に上るのが《四番目の幻影》――ファントムという存在です。過去の図書委員の記録を見ていくと、ファントムという存在は過去に何度も目撃されているようです。いずれのときも《生徒会》とは反目する立場をとっているようですが、その真意はわからずじまいです」

「……なるほど？」

頷く葉佩の横で、八千穂は「じゃ、じゃあ……」と一度唾を飲み込んで七瀬に尋ねる。

「過去にも目撃されて……ってことは……ファントムって幽霊か何かなの？」

「わかりません。仮面の下の素顔を見たものは誰もいないということです。……《生徒会》と反目する以上、葉佩さんと敵対関係にあるとも言えないのではないかと思うのですが……葉佩さん、どう考えていますか？」

葉佩はいつも通りの笑顔を浮かべたまま、言い切る。

「敵」

七瀬はその答えを聞いて僅かに驚きを顔に浮かべるが、八千穂が反発しないのを見て、「そうですか」と納得したように頷いた。

「あなたの勘がそう告げているのなら、危険な存在なのでしょうね。……くれぐれも気を付けて……」

「もちろんだよ。ありがとね」

ニコッと微笑む葉佩に、七瀬は頬を赤らめながら、抱えていた本をめくった。

「古人曰く……『人は運命を避けようとしてとった道で、しばしば運命に出逢う』……人は運命から逃れることは出来ないかもしれませんが、運命が人のすべてを支配するものではない。……人は自分が信じる道を歩いていけばいいのだと私は思います」

「……その通りだねエ」

頷く葉佩。七瀬はペコリと頭を下げた。

「じゃあ、私はこれで……。あ、あのッ、機会があったら、またお昼に誘ってください……！」

「うん。……また今度ね」

早足で歩き去る七瀬の背にヒラヒラと手を振り、葉佩は歩き出す。八千穂もその隣を歩きながら、「うう～ん」と首を捻った。

「月魅って、九ちゃんのこと、相当意識してるんだと思うんだけど……もし、九ちゃんが子持ちなんて知ったら……」

「さァ～？ 月魅ちゃんはイイコだけれど、あの人には敵わないよ～？」

そんなときばかり、嬉しそうに微笑む。八千穂は額に手を当て、「はァ～……」と大きな溜息をついた。

「月魅、不憫な子だ～……」

「おやおや」

二人はその足で昇降口へ向かった。

「あ、明日香ちゃん」

「ん？」

「雨、降ってたっけねエ」

「ええええ?! 気付かなかったよ! ……ん～……あ、あたし、傘取ってくるから、下足箱で待って! ひとつ走り行ってきちゃうよ～！」

「了解。待ってるね」

葉佩は下足箱から靴を取り出し、突っかけると昇降口から空を見た。全体的に黒い雲に覆われ、冷たい雨が降っている。朝降られたときに比べたら降りは弱いのだが、それでも、傘がなければずぶ濡れになってしまうだろう。

「ウウッ……」

どこからか、呻き声が聞こえた気がした。

この辺りは脊髄反射である。考えるより先に声の主を探していた。

「ウ……ウウ……」

「誰だい？」

「み、見るナ！」

見るなと言われ、その調子があまりにも切羽詰っていたため、不審に思いながらも視線を外へと向ける。

「はいはい。了解しました」

苦笑混じりの葉佩の声に、声の主は「ァ……」と申し訳なさそうに声を漏らすと、

「あ、ありがとう、で、あり、マス……」

先程とは打って変わった気弱な調子で言葉を発する。

その生徒の声はやたらとくぐもっていて、何かマスクを付けているのだろうか、そんな感じだった。同じ部活の響五葉のような、それとはまた少し違うようなこもり方。

しとしとと軒からこぼれる雨垂れを眺めつつ、頭の中では『雨だれのプレリユード』が流れて

いる。

男子生徒は葉佩の背中にこう、語りかけた。

「……自分は……人の視線が怖いのでありません。……」

彼の告白を一通り聞いた葉佩は僅かに視線を上げる。

「……そういうことは誰にでもあるよ。例えば……自分が正しいと思っている行動でも、それが正しいかどうかなんて人が決めることだからねエ。……でも、苦しみを一人で抱えないで、誰かに話すことが癒しに繋がるかもしれない。俺がその役に立ったのなら嬉しいよ」

「……！ あ、き、貴殿の言葉は、自分を安心させてくれるであります……自分のようなものに、そんな言葉を……見も知らぬ方だからこそ、こうして話せるのかもしれないであります……」

「そうだね。……知ってる人だと、『心配させたらどうしよう』とか考えちゃって、なかなか言い出せなかったりするものねエ」

「……」

葉佩は視線を足元に落とした。

言えないことは山ほどある。話しているつもりでも、胸の内には積もり積もっていくものがある。大事だからこそ、話せないことはいくらでも存在した。

「こ、こんなことでは……」

「……」

「クッ……こんなことでは正義を貫くことなど出来ナイ……！ こんなことデハ……！」

歩き去る足音。

葉佩は振り向き、誰かの気配が残る下足箱を不思議そうに見回した。

「『こんなことでは、正義を貫くことなど出来ない』……ねエ……」

頬を搔き、腕を組む。

「『正義』って、何だい……？」

誰に問うているのだろうか。

自分か、先程の生徒か。

「おっ待たせ〜ッ！」

「ああ、明日香ちゃん、待ちくたびれて死んじゃうかと思ったよ〜」

「そんなにお腹空いてるの？」

「空いてるよ？ ピザ食べたいねエ、今日は」

「そだね。お昼休みも大分少なくなってるし、お昼軽くして、お夕飯しっかり食べようツと！ ……よししょツと」

傘が開く。八千穂が葉佩を振り返った。

「じゃ、行こっか、九チャンツ」

「……元気なのがいるねエ……風邪ひいちゃうよ」

「あ、あれがファントム同盟だよ。……みんな、そんなに學園のこと嫌いなのかなァ……あたし、そんなに嫌いじゃないけど……確かに、最近の締め付けは厳しいかもしれないけど……」

「……まァね」

中庭。

葉佩は八千穂に傘を傾けつつ、壇上で演説している生徒を見る。ずぶ濡れになることすら厭わず、滔々と《生徒会》の非道を訴え、ファントムこそが真の救世主であると語っていた。

「……困ったもんだ」

呟く葉佩の隣で、八千穂が遠くを指差して声を上げた。

「あ、あれ？ 白岐さんが……」

「おや、本当だ。……幽花ちゃん！」

葉佩は白岐に声をかけるとヒラヒラと手を振る。白岐は温室にでも行くのか、傘を差して歩いていた。雨に滲んで消えてしまいそうな印象を受ける白岐の姿はどうにも儚い。彼女は葉佩の姿を確認すると、真っ直ぐそちらへと歩いてきた。

「……葉佩さん……八千穂さんも……」

「こ、こんにちはッ！ あ、あの、これからご飯食べに行くんだけど、一緒に行かない?！」

「……私は……いいわ。もう、済ませたから」

「そ、そうなんだ」

笑いながらも、八千穂はどこか寂しそうに白岐を見る。

「ちなみに、何食べたの？」

「……サラダ」

「さらだ？」

訊き返す八千穂に、葉佩は言う。

「幽花ちゃん、ベジタリアンなんだよ。お肉食べないから」

「へ？ 九ちゃん、何で知ってるの？」

白岐は八千穂を見つめる。

「アンリさんと彩さんに話したから……」

「又聞きです。んふふ」

微笑む葉佩。「そうなんだね～」と八千穂は頷いたが、プルプルと顔を横に振った。

「あ、でも、サラダはご飯じゃないよッ！ ご飯はいっぱい美味しく食べなきゃ！ ね、九ちゃん！」

「ああ、そうだねエ」

「そう……なの……？」

不思議そうに問い返す白岐に八千穂は大きく頷く。そして言葉を続けようとしたのだが、白岐の音がそれを遮った。

「そういえば……」

白岐は顔を上げ、葉佩を見上げる。

「一緒に食事をする約束をしていたわね……葉佩さん」

「そうだねエ」

「ええええッ?!」

八千穂の驚愕の叫び。雨音はそれを掻き消して葉佩の鼓膜にのみ、酷く反響するに留まる。

「あ、あのねエ、明日香ちゃん……」

「ずるいずるいずるい！ いつの間に！」

「……あの……私と一緒に食事をして、楽しいの……？」

これまた不思議そうな白岐の問い。八千穂と葉佩は大きく頷き、

「もちろん」

異口同音に紡がれる言葉。白岐は珍しく少しだけだったが嬉しそうに微笑んだ。けれど、ファントム同盟の生徒の声高な演説が三人の耳に入った瞬間、心、と真顔に戻る。

「……葉佩さん、一つ、聞かせて」

「何だい？ 言ってごらん」

「……《生徒会》は、この學園に不必要なものだと、あなたは言い切れる？」

葉佩はいつも通りのヘラヘラした笑顔でこう、答えた。

「いや？」

「……葉佩さん、それは、否定？ 肯定？」

厳しくなる白岐の視線を正面から受け、葉佩はニッコリと笑う。

「《生徒会》がもし不必要なものであったなら、この學園はとっくの昔に崩壊してるよ。……必要だから、ここにある。不必要なものなど、この世には一つもないんだからねエ」

「あなたは、もう、守られるべき子羊ではないわ。……この學園のすべてを見極め、見誤らないことね。……無事で、いたいなら。……アンリさんと彩さんのためにも」

「貴重な忠告だよ。……ありがとう」

葉佩は呟くほどの声で白岐に礼を述べた。白岐はそれを聞いていたのか――静かにその場を立ち去る。

「……白岐さん、行っちゃった……」

「彼女も、いろいろと大変だねエ。難しいことをたくさん考えてると思うよ、本当にねエ」

「ホントだよ！ 難しい話聞いてたらお腹空いちゃった……」

「さ、俺たちも行こうか。お嬢さん、お手をどうぞ。濡れちゃうからね」

「もう～！ すぐそういうこと言うんだから！ 亮太くんに言いつけちゃうぞ！」

「ひ……ッ！」

本気で怯える葉佩に、八千穂は嘖き出して大笑いした。

放課後。

「……あ～……雨も上がったか……」

ぷかり、ぷかりとアロマの煙が漂う。葉佩は暢気に頷いた。

「雨が降ってると肌寒い季節になったねエ……」

「夏場は『暑い暑い』って言ってたのに、もう『寒い』っていう季節になったんだよ。早いな〜」

八千穂も「うんうん」と頷きながら同意している。

「年寄り臭い会話してんなよ。……俺は帰る」

「……皆守クンこそ、年寄り臭いよ……こんなに早く帰ってどうするの」

「昼寝しちゃ悪いのか」

「……他にすることないの？」

「あるさ。……どっかの育児放棄した父親の子供を預かるという崇高な任務がな」

「放棄してないよ……ひどいよ……甲太郎ちゃん……」

それを聞いて「そうだった」と苦笑する八千穂。いたく傷付いたらしい葉佩は、しゃがみ込んで両手で顔を覆う。

そのときだった。

乾いた破裂音が周囲に響き渡る。幾度となく聞いたことのあるこの音は！

「ッ！」

葉佩は弾かれたように走り出した。

「九ちゃん！」

「葉佩ッ！」

皆守と八千穂は反射的に葉佩の後を追っていた。葉佩の後を追いつつ、八千穂は皆守に訊く。

「皆守クン、これってやっぱり……！」

「間違いなく銃声だ……！」

現場は三階の踊り場であった。

「大丈夫かい?!」

血が滴っていた。踊り場に転々と、血痕がある。

葉佩は流血している生徒の傍により、傷の場所を確認し、ポケットから出したハンカチで傷口を押さえた。

「目が……目が……！」

パニックを起こしている生徒に、葉佩は尋ねる。

「大丈夫だよ。……何があったの？」

「ただ、《生徒会》の文句を少し言っただけだ！……他には何も……！」

現場にはもう一人、踊り場の隅で腰を抜かしたように尻餅をつき、真っ青になっている生徒がある。皆守は「チッ」と舌打ちをし、腰を抜かしている生徒の傍にしゃがみ込んだ。

「おい。……撃った奴を見たか？」

「し、知らない……！ どこから、何が飛んできたのかもわからない……！ 黒い影みたいのがちょこっと見えただけだ……！」

ガタガタ震えている生徒の様子に、今一度舌打ちをした皆守の背後で、知った声が聞こえた。

「こめかみを掠っただけだ。問題ない。葉佩が押さえているだろう。大丈夫だ」

「大和……」

葉佩は二人の様子を観察していた。

皆守と夕薙。

微笑んでいる葉佩と、困惑を隠せない八千穂を挟んで睨み合い、言葉をぶつけ合う二人。《生徒会》、ファントムに対する見解、それが葉佩という要因と絡まりあうと、どうにも複雑になるようである。

「……どうしちゃったの？ 二人とも……」

八千穂の問いかけでようやく我に返ったらしい二人に、葉佩は「はァ」と珍しく溜息をついた。夕薙が立ち去ってから、葉佩は呟く。

「俺、部活に行きたいんだけど……時間がかかり押してるんだけど……部長に殺されるかもしれないよ～……んふふふふ」

口元が引きつっている。

「ああ、そうだったな。……八千穂も部活か？」

「そうだよ。あたしも急がないと……！」

「行っといで、明日香ちゃん。後でねエ」

「うんッ！」

部活に向かう八千穂の背中を見送り、葉佩は皆守に「子供たちを頼むね」と微笑んだ。

「なら、俺はガキどもを連れて寮に――」

皆守の携帯電話がメールの着信を告げる。

「……」

どことなくうんざりしたような皆守の表情に、葉佩は首を傾げた。

「甲太郎ちゃん……？」

「下校のチャイムが鳴り始めたな。……早く、校舎から出るよ」

「え？ あ、うん……」

皆守は早足でその場から立ち去る。葉佩はポツン、と廊下に残され、

「……はて？」

と首を傾げた。

「チャイム鳴った……」

彩は顔を上げる。瑞麗はアンリと彩の帰り支度を手伝いながら、自分の帰り支度もしていた。

「そうだな。……皆守は遅いな、随分」

先程駆け込んできた撃たれた生徒の怪我はさほどではなく、簡単に手当てして寮へと返した。

急患が飛び込んでくることは、この時間ではもうないだろう。

ガラッと音がし、容赦なく皆守が衝立を押しつけて顔を出した。

「帰るぞ」

「あ、は～い」

「……うん」

もぞもぞと大きなリュックを背負い、二人は瑞麗に向かって手を振る。

「ルイせんせ～、さようなら！」

「さようなら……」

「ああ。また明日」

子供たちはてくてく皆守の後をついて歩いていく。光学迷彩を発動し、いつも通り廊下を歩いていた彩が足を止め、アンリの手を引く。アンリは彩を振り返り、弟が見つめているものがあることに気付いてそちらを改めて見る。ちょうど昇降口の方だ。そこには父と、初めて見るその人がいた。初めて見るその人に言い知れぬ恐怖を感じ、繋いだ手を更に強くする。

「……怖い……」

「おっかない人……」

昇降口に葉佩がいる。そして、その正面には、葉佩よりも背の高い阿門がいた。

「隠れてろ……」

皆守は子供たちを自分の後ろに隠すようにしつつ、廊下の影に身を潜める。

「……パパ、いじめられてる……？」

「父……心配……」

子供たちの呟きに皆守は腕を組んだ。

――《墓》へ踏み込むな。

阿門ならそう言うに違いない。けれど、葉佩はにっこり笑って一蹴するだろう。

「嫌だね」

と。葉佩に何を言っても、暖簾に腕押し。それこそ、若輩者の戯言にしか聞こえていないに違いない。相手は場数を踏んだ《宝探し屋》。一般的なゆさぶりは効かない。

――精神的にいじめられているのは阿門ではないだろうか。

皆守はそれを思うと阿門が気の毒になった。

阿門の後姿を見送っていた。

「苦勞の多そうな背中だねエ……」

皆守にしろ、阿門にしろ、この學園の生徒はどうしてこんなにも切ない後姿をしているのだろうか。

「……忠告、聞けないんだよ。聞けるわけがないんだよ。ごめんよ……」

項垂れながら阿門の背中に呟き、彼とは逆方向、グラウンドの方へと足を向けた。

そのとき。

「遅い！ 下校の鐘はとうに鳴り響いたゾ！ 貴様の行いは神聖なる學園の秩序に反するものでアル！ 《生徒会》の名の下に貴様を処断スルッ！」

小さく、銃を構える音がした。葉佩は素早く周囲に視線を走らせるが、相手の姿が見えない。「パパ～！」

その代わりに、何も知らないアンリと彩がこちらに走ってくる影が見えた。

「アンリ……彩……ッ！」

子供を庇うため、そちらへと走った葉佩の体を銃弾が掠めていく。頬から、血が伝う感触。そして、焼け付くような痛み。

「パ、パパ……ッ！」

「……ッ」

アンリの悲鳴。息を呑む彩。葉佩の目は銃弾の飛んできた方向を睨み、撃ち込んできた主を探すが、その姿は見えない。

「……ッ！」

立て続けにさらに数発。葉佩の体を掠める銃弾。

「無駄ダ。自分の射撃の腕は貴様の皮一枚裂くことさえ用意なのダ！」

動けなかった。下手に動いて、そのときにもし銃弾が飛んできたとしたら。アンリと彩に当たるかもしれない。自分が死んでも、それだけは耐えられない。子供は守りたい。

「葉佩ッ！ 何ボケッとしてんだ！」

銃を構える音。皆守が駆け寄ってくる足音。再び、降り注ぐ銃弾。

「ッ！」

制服を切り裂いてゆく弾丸、皮膚が切れる痛み、けれども、動けない。後ろに子供たちを庇いながら、葉佩は銃弾の飛んでくる方をただ睨む。

「逃げなくてもいいのか？ 貴様に出来るのは、ただ成す術なく逃げ惑うことだけダ」

「パパ～……うエ～ん……」

「ヒ……ック……父……父……」

泣き出した子供たちをどうすることも出来ない。

「大丈夫。大丈夫……」

根拠なく子供を慰めながら、周囲を素早く見回すと、物陰に隠れていた皆守が再び走り出してきた。

「葉佩ッ！ こっちだッ！」

皆守の声に頷き、葉佩は自分にしがみついていたアンリを抱き上げ、光学迷彩を切って皆守に投げる。皆守が抱きとめるのを視界の端で確認しながら、自分は彩の光学迷彩を切って抱き上げると走り出した。

「あの銃、何発入ってんだ……！」

「俺に訊かれてもねエ……！」

泣いている子供を抱え、二人は出来る限り物陰を選んで走る。「遮蔽物が多ければ撃ってくる

ことはあるまい」――そう判断したのだが、それは甘い考えだった。向こうは容赦なく撃ってくる。間断なく、発砲音が響く。つかず、離れず。

「怖いよオ……怖いよオ……」

頭を抱え、アンリは皆守に抱きかかえられながら泣いている。

「父……父……」

彩も身を縮め、葉佩の体に縋っている。

逃げて追ってくる《執行委員》に、葉佩は足を止めた。埒が明かないと判断したのだろう。

「もう逃げないのか？ 弾切れを狙おうとしてもムダでアル！ 自分には鉛成分から自由自在に弾丸を生成できる《力》がアル！ 地獄の弾丸が必ずや貴様らを追い詰め、正義の鉄槌を下すのだ！」

「正義……そんなもん、クソ食らえだよ……！」

彩を下ろした。制服のボタンを二つ外して内側に手を入れると、愛銃であるM92FMAYAを握り締め、銃弾が飛んでくる方へと問答無用で発砲する。

「葉佩！ お前こんなところで撃つんじゃない！」

皆守の驚愕の叫びに、葉佩は言う。

「子供たちの命がかかってるんだよ！」

《執行委員》の銃の音とは違う、M92FMAYAの発砲音が重なっていく。葉佩の体に傷が出来ていくのと比例するように、眉間には深い皺が刻まれる。

「葉佩ッ！」

銃弾の雨の中を飛び出してきた皆守に頬を思い切り殴られ、葉佩はようやく銃から手を離れた。

「父、父……！」

蹲る葉佩の頭をさする彩。皆守はアンリを下ろし、アロマに火をつけてぷかり、と煙を棚引かせる。

「物陰から平然と撃ってきて、何が正義だ……。そんな奴に正義を語る資格があるのか……？」

「ムム……」

声の主が、ぬう、と物陰から姿を現した。異様な風体。軍人のようなその格好に、子供たちは反射的に父と皆守の後ろに隠れる。彼らにとって軍人は恐怖の対象以外の何者でもない。

「自分は、三年D組の墨木砲介でアル！ 《生徒会執行委員》として、校則に違反した貴様等を処分スル。……その前に貴様等の名を聞いておこう」

「……俺は皆守甲太郎」

「葉佩、九龍……」

よろよると葉佩は立ち上がり、痛む右頬を押さえている。腫れは引いているが、痛みはジクジクと神経を圧迫した。

「葉佩、九龍……？ しかし、その声は、昼間の……貴殿が、葉佩九龍……！」

皆守の眉間に皺が寄る。「葉佩と知り合いなのだろうか」と葉佩を見れば、彼はいつものような微笑みを浮かべ、墨木を見つめていた。

「お前さんが……そうだったのかい。奇遇だねエ」

聞いている方がイライラするようなのんびりとした口調。いつも通りの葉佩がいる。落ちていたM92F M A Y Aを取り上げて制服の内側にしまうと、ボタンを留めた。

「……葉佩九龍、だったのか……」

「そうだよ」

葉佩は微笑む。

「《転校生》——だよ」

「なるほどな……お前が近頃噂の暴走《執行委員》だったのか」

皆守は言う。葉佩は黙って墨木を見つめていた。

「お前、本当に自分のやってることが正しいことだなんて思ってるのか？」

「自分は、自分は……法の執行者でアル！ 法を犯すものには制裁を加えるのでアル！」

「……」

皆守の視線が僅かに動く。視線の先には子供たちがいた。涙に濡れた目で皆守を見つめ、しきりにしゃくり上げている。皆守は再び墨木を見た。墨木は葉佩に銃口を向けながら、声高に何かを叫び続けている。

「兎に角！ 葉佩！ 貴様は自分の敵なのダ！ 自分は正義であり、貴様こそが悪なのダ！」

「正義……」

葉佩の口から言葉がこぼれる。

その手は自分に縋る子供たちの頭を愛しげに撫で、小さく微笑み、それとまったく同じ顔を墨木に向けた。

「ナ……何だそれハ……ッ！ 同情?! 哀れみ……?! そ、そんな目で見ると……ッ！」

墨木は苦しうに前屈み気味に体を二つに折る。

「ふん……顔を隠してコソコソしなければ何も出来ない奴に指図される覚えはない」

「甲太郎ちゃん……それは……」

「ウ……ク……」

墨木の呻き声に、皆守と葉佩は顔を見合わせる。

「み、見るナ……見るナ……み、みみ、見る、見るナーーッ！」

「伏せろッ！」

銃声が先だったか、皆守の声が先だったか。

葉佩と皆守は咄嗟に頭を下げ、子供たちを両腕に抱える。葉佩の頭上を銃弾が通り過ぎ、轍の柱に当たったのか、甲高い音が向こうから響いた。

「つ、次は……外さナイ……！」

「葉佩ッ！」

皆守の目が「向こうだ」と告げる。葉佩は子供たちの手を引いて走り出した。

「パ、パパ……ッ！ わッ！」

アンリがベタッと転び、地面に伏す。慌てているため、上手に起き上がれない。

「アンリ……！」

「父！」

「彩、こっちに……！」

葉佩、皆守、子供たちの声が重なり、それを追うように墨木の銃声が鳴り響く。

「……ッ!？」

葉佩の右肩を熱い塊が貫通していった。痛みに顔が歪むが、それよりもアンリをと左手をアンリに伸ばす。

「アンリ……ッ」

「パパ……ッ！」

涙で顔中が埃まみれになっているアンリ。葉佩は逃げられないと思った。アンリはパニックを起こしている。足腰が立っていない。這って父の腕にしがみつき、その場に固まってしまった。

——……絶体絶命……？

右腕はまだ動かない。制服のボタンを開けて、銃を取り出し、引き鉄を引く。そんな簡単な動作すら出来るかどうか怪しい。

——こんなところで……？

「葉佩……ッ！ 伏せろ！」

皆守の声に反応していた。身をかがめ、アンリを体で覆い隠す。

「ぼいッ！ ですウ」

ボンッ！ という音が墨木の足元から聞こえ、濛々とした煙が上がる。

「な、何ダ！ この煙は……ッ!？」

「……甲太郎ちゃんのところに……ッ！」

左腕でアンリを抱き上げ、皆守と彩のいる物陰に避難する。

「……た、助かった……」

「九サマたちをいじめるなんて、リカが許しませんわッ！」

「あ、ありがと……リカちゃん……」

「九サマはリカの大事な人。アンリくん、彩くんは、リカの大事なお友達。何があっても守ります！ ……それを教えてくれたのは、九サマですよ？」

葉佩の額には脂汗が浮いている。幾ら傷が塞がるとはいえ、その間の痛みは消えることはない。微笑む葉佩の眉間に寄る皺を見て、リカはキッと墨木を睨んだ。

「う、裏切り者メ……！」

「リカはもう《生徒会》とは何の関係もありませんもの。あなたみたいな方にとやかく言われたくありませんわ。リカはもう自由ですの。したいように行動しますし——守りたいものを守りますわ！」

啖呵を切ったリカに、葉佩は「心強い……」と呟く。皆守は首を竦め、「女は強いなァ、おい……」とアンリと彩の頭を撫でた。

「自分は、自分の銃は正義のためニ……！」

矛盾と葛藤——墨木の中にそれがあのように見える。

葉佩は立ち上がった。

「砲介ちゃん、話を……」

「正義を……正義を法を守るのが自分の役目でアル！ ウォォォォッ！」

「は、葉佩ッ！」

「九サマッ！」

墨木の銃口が葉佩の眉間を狙っている。葉佩は笑っていた。

「大丈夫……」

皆守の耳は葉佩の声を聞き、そのすぐ後に聞こえてきた声に、こう呟く。

「ああ、あいつの声が天の助けに聞こえる日が来ようとはなァ……」

「警備員さん、こっちで～す！」

八千穂だった。

「我は《幻影》。遥か太古よりこの地の解放を待ち望む者。また会おう。闇に魅入られし人の子よ……」

葉佩の目が険しくなる。

皆守はそれを隣で見ながら、「こいつでもこんな顔をするのか」と片目を眇めた。

ファントムは掻き消え、緊張の糸がプツツと切れたような葉佩の溜息に、子供たちも皆守も肩の力を抜く。

「……パパ……」

アンリはファントムが投げ落とした鍵を拾うため、ぽてぽてと三步ほど進む。

「みぎょッ」

たった三步で躓いて転ぶアンリ。

「おいおい……」

皆守はアンリを立たせ、バフバフと猫スーツの埃を払う。払っても今日のドタバタで何度も転び、泥だらけになっている。

「足腰立ってないんだな」

「アンリ……心配……」

皆守と彩にアンリは頷いた。

「僕、平気……」

泣きべそをかきながらだったが、アンリは言う。

「僕より、パパ……パパは大丈夫……？」

アンリはギュッと葉佩に抱きついた。葉佩は頷く。

「大丈夫。俺はね。……アンリと彩が無事でよかった」

アンリから鍵――校舎の鍵だった――を受け取った葉佩は、先程までファントムがいた辺りを見つめる。

「彩……お腹空いた……」

皆守の制服の袖を引いた彩に、皆守は「ああ、わかったわかった」と頷く。

「じゃあ、寮に帰ろうぜ」

アンリと彩は光学迷彩をオンにし、皆守と葉佩は肩を並べて寮へと戻ることにした。戻りしな、皆守は呟く。

「あの仮面、どこかで見たことあるような……」

「『オペラ座の怪人』っぽいねエ。……甲太郎ちゃん、映画は観る？」

「いや。そんなもん観てる暇があるなら、昼寝するさ。……でもまア、テレビでよく流れるからな。劇団の舞台のCMとか……」

「うん。……そうだねエ。……仮面を被ってるのが《ファントム》だよ。……怪人は《ファントム》なんだよねエ」

葉佩は「ああ、何だか嫌だねエ……」と右肩に手を当てる。その仕草に皆守は啜っていたアロマを口から外した。

「痛むか？」

「まだ痛むねエ。……ああ、でも、傷は塞がったから」

右手をグーパーしながら葉佩は皆守を見る。

「握力も戻ってきてるから、問題ないよ」

「ああ、ならいいんだがな……」

パイプを啜え直し、火を点ける。

「なア、葉佩」

「何だい？」

「お前、死を、恐れたことはないのか？」

子供たちの意識が自分達に向いたのを感じていた。葉佩は僅かに後ろを振り返り、「心配しなくていいよ」と微笑む。そして、視線を前に戻すと、僅かに表情を引き締めた。

「死、ねエ……難しい問題だよ。……恐れないと言えは嘘になるし、かといって、恐れては先に進めない」

「……」

「俺が《宝探し屋》をしているのは、大事な人、大事なもの、それを守るためだよ。《生活》——と言い換えてもいいかもしれないねエ。生活のために、《宝探し屋》をしてるんだよ。だからこそ、進むのを恐れては何もならないんだよねエ。……けれど、それは逆に、恐ろしいと思えることとも直結してるわけだよ。進むとすると、《死》が付き纏う。俺や、子供たち、子供たちのママの生活がかかっているのと、《死》は両面くっついてそこにあるんだよねエ」

「……」

「やらないと、お飯(まんま)の食い上げちゃんなんですよ」

「飯の種が《死》と隣り合わせってのは……ったく……何だかんだ言ったとしても、『もうこれ以上進むな』と俺が言ったとしても、お前は聞く耳なんて持ってはいないんだろうが」

「そうだねエ。今更だねエ」

「……己の身を顧ず、危険に突っ込む……俺にだってもうわかってるさ。お前の飯の種が《墓》

の下にあるってことくらいな。寒いな……とつとつ、寮に入ろうぜ」

「ああ、そうだねエ……冷酒におでんとか、そろそろ恋しくなって――」

皆守と並んで寮に入ろうとした葉佩の制服の裾が引かれる。

「父」

「え？」

振り向いた葉佩は、彩の指差す方をアンリとともに見た。

微かな鈴の音。

「……」

「いる……」

「パパ……僕にも、見える……！」

そこには、双子と思しき少女の幽霊だろうか、半透明の何かが三人をじっと見つめていた。

「行っては駄目」

「行っては駄目」

葉佩は子供たちの肩を抱きつつ、ふと微笑む。

「お断りだよ」

「……この制服……直しに出さなきゃ……確か、もう一着あったし、そっち着て学校に行けばいいよねエ」

制服にも、その下に來ていたYシャツにも、弾痕がくっきりとついている。そして、生々しい血液の跡。けれど、葉佩の体のどこにも撃たれたような跡はない。

「なァ、葉佩」

今日のカレーは何にしようかと子供たちと決めていた皆守が顔を上げた。

「お前、元々特異体質なのか？」

「違うよ？ 昔は普通だったんだよ。……若返りの《秘宝》飲んだ辺りからおかしくなったんだよねエ……昔は、ここから――」

左の肩口を指差し、

「ここまで」

右腰までを指でなぞる。

「深い傷跡があったんだ。あとは火傷の痕とか。それすらも消えたんだよねエ。……訳がわからないよ」

「本人がわからないなら、俺にもわからんな」

「そりゃそうだよね」

葉佩は微笑み、クロゼットを開ける。

「《秘宝》というものがどれほど恐ろしいのか、そのときに嫌ってほどわかったよ。悪用されたら、世界の存亡に関わりかねないんだって。……俺は、《秘宝》を飲み下した時点で、容易に

死ねない呪いにかかった。《秘宝》を守るために生きなければならなくなった。そういうことだよねエ。《ロゼッタ》にいるんだもん……」

「……そうか」

「うん。……何も知らずに、ピアノだけ弾いていられた頃には、もう戻れないってことだねエ。でもまァ……信じる人も信じられる仲間もいるし……問題ないかねエ」

淡々とした呟きだった。過去を振り返るでもなく、そこにある事実のみを伝えるだけに聞こえる。

過去というものに頓着していないのか、過ぎ去りし日々を顧みることを必死に拒んでいるのか。

「難儀だな」

「……え？」

振り返った葉佩の手には、銃弾のケースが握られている。9ミリパラだ。昼間の銃撃戦で相当ばら撒いてきたらしい。

「何、甲太郎ちゃん……突然……」

腰を下ろし、テーブルの上に出してあったマガジンに詰める。葉佩の手は正直だった。細かく、震えている。

「不本意か」

「まさか。……俺の天職は《宝探し屋》だよ」

「……そうか。わかった。……さっきのは聞かなかったことにしてくれ」

皆守は子供らの頭をワシワシと撫で、

「決まり。今日は魚のカレーだ」

と告げた。

「正義とか、そんなものはどうでもいいんだ。ただ、自分が信じたものをどこまで信じられるか、という話なんだと思う」

炊事場に姿を現した葉佩は、鍋をかき回す皆守の隣に立つ。

「ガキどもは？」

「遊んでる。鎌治ちゃんが来てくれたから、預けてきちゃった」

「取手は、結構子供好きだな」

「そうみたいだねエ。助かってます」

んふふ、と小さく笑い、葉佩は続きを口にした。

「……人には、必ず信じるものがあると思う。この世のすべてを否定して自殺する人がいるけれど、その人って、『自分が死ねば、自分は楽になれる』と信じて死ぬわけでしょ？ でも、それは決してすべてを否定してない。信じるものが先にあるから、そこに行くために死ぬんだ。まァ、それは極端な例だとしても、信じるものは人であったり、物であったり、いろいろなもの

だよねエ。人は、それがあから立ってられるんだ」

「……」

皆守はガチッとアロマパイプを噛んだ。

「何だよ、そんなつまらない話しに来たのか？」

「……確かに、つまらないかもしれないね。でも、甲太郎ちゃん？」

「何だよ」

「信じるものを見失ったとしたら、それは、自分が原因なんだよ。大事なこと、忘れてはならないこと。まず第一に人が生きていられる証こそ、信じるもの。それは、信仰であったり、正義であったり、隣に立つ友人かもしれない。それを信じられるということは、《死》を恐れずに障害に自ら立ちはだかることが出来る勇気になる」

「だから？」

葉佩は皆守を見た。へらへらとした笑みはなく、「これが素なのか」と頷けるような、そんな顔をした葉佩は問う。

「……甲太郎ちゃんは、何を信じて、ここに立っているの？」

「は……？」

葉佩の顔が普通の、人好きのする笑顔に戻る。

「んふふふッ。訊いてみたかっただけ。……俺は、バディも、アンリも、彩も、子供たちのママも、《協会》も——あア～……亮太も……信じてる。……だから、《宝探し屋》が出来ると」

「そうか……」

「うん。毎日楽しいのは、信じるものがあればこそ、だよ」

皆守は葉佩の顔からカレーに視線を移す。

——信じるものを見失ったら、それは自分が原因、か……

今の皆守が信じるものは 正義でも、何でもない。クソツタレな自分の《使命》のみだ。否定しようがしまいが、それしかなかった。

「パパ～」

「ん？」

「H. A. N. T鳴ってる～」

アンリは口の周りにカレーをつけながら、自分の手元近くに置いてあったH. A. N. Tを手に取り、父に渡す。

「誰から？ ママ？」

小首を傾げ、スプーンを咥えてジッと父を見上げる。アンリの隣には、同じ仕草で彩が葉佩を見上げていた。

「ああ、ママだねエ」

葉佩はスプーンを置くと、愛おしそうにメールの文字を目で追いながら、「そうか」と一つ頷く。

「……父、何書いてあった？」

彩は尋ねたが、葉佩はニコッと微笑むとこう答えた。

「『アンリと彩は元気ですか？ 寒くなりますが、風邪をひかないようにしてくださいね』だって」

「パパも僕達も、もう風邪ひいちゃったね！」

「母、心配してくれる……」

「ママは優しい人だからね」

子供たちの頭を撫でた葉佩は、スプーンを手に持った。皆守と取手は葉佩と子供たちのやり取りを眺めていたらしい。

「葉佩、お前の嫁さんは――」

「まだ結婚してないよ～」

皆守の言葉をやんわりと否定する葉佩。それを聞いて、取手は驚いた顔をした。

「そうだったんだ……？ もう、こんなに大きな子供がいるから、僕はてっきり……」

「んふふ。なかなか機会に恵まれなくて」

何の機会だ、とツッコミたいのを抑えつつ、皆守は隣でカレーを皿の外にこぼし、「あう～」と泣きそうな声を出すアンリの世話を焼いている。

「……ちょっと、表行ってくる」

「どうした？」

「ん？ 別に。……ごめんね、ご飯の途中だけど」

葉佩は口の周りを拭くと、小さく微笑んで子供たちの頭を撫でてから部屋を出て行った。

「パパ？」

「父、変……」

「変だね」

「変だな」

葉佩はぽつぽつと独り中庭を歩いていた。

「これから《墓》に潜らねばならないというのに何をしているのか」と自分で自分に問いかける。

メールの内容は芳しいものではなかった。少々気が滅入る内容だったのは確かだ。

――帰国、延びるのか……

独りで寂しいのだろうか。やはり自分の不甲斐なさに絶望するしか出来ない。

十一月の夜風は冷たく頬に当たる。あと数日でこの中庭は文化祭の出店などで埋め尽くされるに違いない。子供たちはとても楽しみにしているというのに。

——こんな気持ちで、文化祭なんて……

「あら、葉佩君……？」

不意に呼び止められ、咄嗟に振り返る。

「どうしたの？ 深刻な顔をして……」

「亜柚子ちゃん……」

小さく「うふふ」と微笑む雛川を見て、「ああ」と葉佩は微笑んでいた。

「お前さんの顔を見たら、思い出したよ」

「え？」

「いや、何でもない」

——パパ、ヒナせんせ～はママに似てるよね。笑い方とか。「うふふ」って笑ったりするんだよ。

——母に似てる。ヒナせんせ～、優しい……

そうだった。

帰国が延びたあの人を待っている時間にやるべきことはたくさんある。雛川が浮かべた昼間のような顔をこの学園の誰にもさせないために、やらねばならない。

「折角だから、少し、話でもしない？」

「ええ。いいわよ」

結果。

葉佩は雛川のプリクラを持って帰ったのだが、皆守は露骨に嫌な顔をした。

いつものように準備を整え、五人は《墓》へと向かう。

夜風が冷たい。十一月にもなれば、それもまた当然のことなのだが。

「パパ～、待って～」

手を繋いでぼてぼてと走ってくるアンリと彩を振り返り、葉佩は微笑む。

「大丈夫だよ。慌てると転んじゃうからねエ」

彩はそれほどではないのだが、アンリの着ぐるみ《猫スーツ》は、本日の銃撃戦前後の出来事で泥だらけになっている。一度や二度これから転んだとしても、何の問題もないとも言えるほどの汚れぶりだ。

「今日はどんなところなのかな？」

八千穂はロープを握り締めつつ葉佩を見た。葉佩は「さァねエ」と首を傾げると、

「行ってみてのお楽しみ、ということで」

そう言って笑う。皆守の溜息を無視し、八千穂は子供たちを見た。

「よ～し、今日も頑張ろうッ！」

「は～い！」

「うん」

八千穂は先陣切って《墓》に潜っていく。その後を子供たちが追って入った。残されたのは、皆守と葉佩。

「おやおや、元気だねエ」

「確かにな。無駄に元気だ……」

ゆらりとアロマの煙が棚引き、ラベンダーの香りが墓地に漂う。

「行こうかねエ、甲太郎ちゃー」

「眉間に寄ってる皺の原因は何だ？」

「はい？」

葉佩は振り向き、作ったような笑顔で皆守を見る。

「寄ってませんよ」

小さな舌打ち。皆守の指が葉佩の眉間をパチンと弾く。

「イタッ！」

「寄ってる。……ガキども置いて、とっとと先に歩いてくなんてこと今まで一度もなかったことだ。……ガキどもと顔を合わせ辛いことでもあるのか？」

「……な、ないよ？」

正直者はバカをみる。いや、愚直さは今の時代、一つの美德であるかもしれない。葉佩は上目遣いでチラチラと皆守を盗み見ている。常に眠そうな半眼の皆守の目だが、その奥には果てしなく深い闇があった。葉佩はそれに怯える子供のように見える。

「……もう少し、嘘を吐く努力をしろよ」

「む、無理だよ～。俺にとってはこれが精一杯で……って、あァー……」

溜息のような、叫びのような、そんな声が葉佩の口から漏れた。

「ほら、みろ。……女絡みか」

「ま、まアね……」

「海外行ったんだろ？」

アンリと彩の母は、心を壊して国外へ向かった。療養目的の渡航であるらしいことは、葉佩本人から皆守も聞いていることだ。

「うん。……でもね、甲太郎ちゃん。体が悪いのは不治の病じゃない限りよくはなると思うけれど、心の病はそうはいかないんだよね。……なかなか、よくなるんだって。……久しぶりに彼女からメールが来たから帰って来るんだと思ったんだけど……違った。『早々に戻れそうもありません』だったんだよ」

「……」

「お医者さんが、オーケー出してくれないんだって……でも、メールの締めくくりにこう書いてあったよ。

『あなたは、あなたの出来ることをしてください。私も、早く帰ることが出来るように頑張ります。アンリと彩に「愛してる」と伝えてください。心配なさらないでください』

って」

「……嘘だな」

「嘘でも、そういうことをシレッと真顔で言える人なんだよ。……いくら俺だって、それが嘘かどうかくらいわかるもの……」

「で、それが原因かよ」

「そ、そうだよ。……悪い？」

「子供か！ 拗ねるな！ ……わかったよ。お前がそんな調子じゃ、ガキどもまで気が回らなそうだからな。俺がその辺り、フォローしてやる」

「あ、ありがー」

「代償は高くつくぞ」

「は？」

訊き返そうとした葉佩の声が、遺跡から呼びかける八千穂と子供たちの声に負けた。

「九チャ〜ンッ！」

「パパ〜！」

「……行くぞ」

皆守の口元に嫌な薄ら笑いが浮かんでいたが、葉佩が慌てて呼び止めようとしたときには、ロープを伝って遺跡へと降りて行ってしまった。

「ちょ……あの……ものすごく、嫌な予感が……」

そればかりは、《秘宝》も何も教えてくれはしない。

マダムは相変わらずだった。

「また会いましょう……」

高級食材をふんだんに使った料理と引き換えにしなければならないほど、それほどまでにほしいものでもあるのだろうか、と皆守は首を傾げる。

「それなら、俺にそのカレーをくれ」

と言いたいのをぐっと我慢しつつ、子供たちの手を引いて葉佩の後をついて歩く。

八千穂と葉佩は石碑の前にいた。

「なるほどねエ……」

H. A. N. T画面と石碑を交互に眺めつつ、葉佩は後ろを振り返る。

「さ、行くよ～」

「おう」

返事をする皆守の手を握るアンリが「う～……」と唸った。

「ここ、ムシムシする～……」

「ベタベタ……」

「まだ蒸し暑い時期から着ぐるみを着ていたくせに何を今更」と内心非常にツッコミたいが、それもぐっと我慢する皆守。

「さ、進もうね。ここのトラップは――」

カチッ……

しとすと、しとすと静かな空間に雨音がだけが響いている。

そんな空間に、やたらとキッパリハッキリとしたスイッチ音が響き渡り、ゴオン！ とお約束のトラップ駆動音が鳴った。

「葉佩！」

「九チャンツ！」

「パパ～！」

「父……」

四人四様の呼び方で呼ばれた当人は、「おやおや」とどこ吹く風で部屋の中ほどに歩いていつている。

「……たぶん……」

葉佩は何か怪しげな敷石を踏んだ。カチッと小さな音がしたが、トラップは止まることもなく絶賛稼働中だ。

「……おい、八千穂」

「な、何、皆守クン……」

「俺の目の錯覚じゃなければ、この壁、真ん中に向かってこう、動いてないか……？」

「たぶん、気のせいじゃないと思うよ……」

引きつりつつ、微妙な笑顔で皆守を見る。

「だって……壁がこっち寄って来て……」

確かに、先程までは五十センチはあったはずの壁と体との隙間は、もうない。

皆守たちの焦りを他所に、葉佩は呑気に別の敷石を踏んでいた。

「……」

「……八千穂」

「ん？」

「葉佩のこと、殴りたくなるときがある」

「あら、奇遇。あたしも今そんな気持ち」

子供たちはというと、壁を押し返そうと奮闘中だ。

「文化祭、楽しみだね。皆守クン」

「ああ、そうだな、八千穂」

不穏な会話など知る由もなく、葉佩は最後の敷石を踏んでトラップを止めた。

「はい、止まったよ～」

にこやかに微笑む葉佩に、皆守は溜息を吐き、八千穂は苦笑した。

上書き不可。

まるで、CD-Rのような頭なのは、アンリだから仕方ない。

「タマネギ！」

神籬を指差してアンリは叫ぶ。

「みぎゃあ」

神籬も大概いいタイミングで返事をするものだから、アンリは神籬＝タマネギの公式が頭の中に出来上がってしまったらしい。

「アンリ、あれは神籬……」

彩は一生懸命アンリの間違いを正そうとしているが、到底無理だ。確実に無駄な努力に終わる。

「皆守クンがひもちゃん指して『タマネギ』なんて言うからア。可愛いけど」

「『ひもちゃん』てなオイ……」

そんなに可愛いものでもないだろう、と、皆守は溜息を吐く。

眼球がなく眼窩が落ち窪んだ虚をこちらに向ける、虫と草を足して人間を隠し味にしたような神籬を「可愛い」という八千穂が理解出来ない。かく言う皆守もタマネギと見間違えたのだが。

「あれがタマネギだったとしたら、何人分のカレーが……」とか考えていたとしたら、皆守甲太郎恐るべし、である。

「言いたい放題だよ……」

葉佩は背後から聞こえてくる楽しそうな会話に苦笑しつつ、食神の魂で采女を切り裂き、別の手に装備していたファラオの鞭で神籬をしばいている。

「みぎゃあ！」

「みぎゃあ！ あははははは！」

アンリは甲高い声で神籬の真似をして笑っている。いつものことだ。そのとき、

バフッ！

アンリに向けて、少々遠くにいた神籬が花粉を飛ばしてきた。完全に不意を突かれたと言っていい。

「しま……ッ！ アンリ！」

皆守の伸ばした手は間に合わず、

「ふぎょんッ！ けほッけほッ！ ……う、ううう～ん……」

思い切り花粉を吸い込んでしまったアンリは、そのまま後ろに昏倒した。神籬はもう一発、今度は彩に向かって花粉を飛ばしてきたのだが、

「やらせないんだからー！ え～い！」

八千穂のリターンが綺麗に決まり、彩は彩で花粉から背を向け、手で鼻と口元を覆う。

「アンリをよくもッ！」

次の瞬間、葉佩の鞭が神籬を粉碎し、天若日子の喪室の敵は一掃された。

「おい、アンリ！ 大丈夫か?！」

皆守の呼ぶ声に、アンリは幸せそうに笑いながら、そ知らぬ顔をして眠っている。

「むによ～……す～、く～……」

アンリを抱き起こした皆守は、一人呟く。

「……心配して損したとか、こういうときに感じるんだらうな……」

後ろ向きに倒れたため、コアラリュックは苔まみれだ。泥も付着し、洗わなければシミになるだろう。葉佩はそれでも心配そうにアンリを見ると、

「変な病気とかにならないことを祈るよ……。もしそんなことになったら、亮太に怒られるし、アンリの子にも怒られるし、何より、彩と一緒に文化祭を回れなくなっちゃうもの……」

「ブンカサイ……」

彩はハッとしたように顔を上げると、アンリをゆさゆさと揺さぶり始めた。

「アンリ、アンリ、起きる。アンリ……」

「彩ちゃん……結構乱暴……」

八千穂は苦笑して、彩の傍にしゃがむとこう言った。

「彩ちゃん、アンちゃんなら、きっとすぐに目を覚ますよ。先に進もッ」

心配しているのだろう。彩はそれでもアンリを数回揺さぶったが、八千穂に頭を撫でられて、ようやく、

「……うん」

と頷いた。

「それじゃ、アンリは俺が背負ってく」

八千穂の手を借りてアンリを背中に背負う皆守に、葉佩は感謝を述べる。

「ありがとね、甲太郎ちゃん」

皆守は「ああ」と頷くと、ニヤリと笑った。

「文化祭の翌日、十五日の月曜か。振り替えで學園が休みだ」

「あ、うん。知ってるけど……」

「後夜祭が終わったら、そのまま學園を抜け出して、亮太含みで飯食いに行くぞ」

「へ？」

「忘れたか？ ガキどもを預かる見返りに、『新宿カレー三昧の旅』だと言ったんだが」
葉佩の目が見開かれ、八千穂はそんな葉佩の横腹を肘で突いた。

「な、何ていう交換条件を……！ またカレーだよ?！」

彩だけは「カレー」と呟き、バンザイしている。

「彩はわかってる。お前はイイ奴だな」

「彩、イイ奴」

小さく微笑み、引きつっている父と八千穂に純粋な視線を向けた。

「先行く。……ブンカサイとカレー、待ってる」

彩は、タタタッと走って飛び石をひょいひょいと軽く渡っていく。

「彩！ 走るな！」

皆守の制止を振り切り、白い光——恐らくはこのエリアに溢れる光と上階から雨、霧のように降り注ぐ水分が乱反射して白い光に見えるような空間を、彩は走っていく。

「葉佩、止めなくてもいいのか？」

「うん。あのコは自分から危険に飛び込むことはないから。滑って転ぶくらいはするかもしれないけど」

葉佩たちも、前進を開始した。

「慎重なんだよ、彩はね」

それを聞いた八千穂は「そういえば」と頷いた。

「アンチャンは怪我とかするけど、彩チャンはあんまり怪我とかしてるイメージないな〜」

「ああ、そうだな」

皆守も同調した。

「無鉄砲に進むようなことは本当に少ない気がするな」

「あのコ、怖い目に遭ってるからねエ」

葉佩は自分の左目の辺りを指差す。

「ここの傷がそれだよ」

「あ……」

八千穂は「そっか」と頷いて顔を上げると、向こうから彩が手を振っているのを見つけて大きく手を振り返す。

「でも、何でそんなに大きな傷作ったの？」

「……テロに遭ったんだ」

「テロ？」

訊き返す皆守に葉佩は続けた。

「あのコの父親は優秀な《宝探し屋》で、どんな危険な遺跡からでも生還するっていう生きる伝説みたいな男でねエ。あの日、たまたま支部で会ったんだよ。『久しぶり』なんて声掛け合っ

。……俺の自慢の親友だった。奥さんと死に別れた後、男手一つで彩を育てるような、それはそれはすごい奴でねエ。俺、こんなだし、友達少ないから、あいつは大切な同期で唯一の友達だったんだよねエ。……俺はそのとき一人で、向こうは彩を連れてた。『これから南米に移動する』って言ってたなァ。空港に向かうバス停まで送って、あいつと、彩に手を振って……そのときだ」

葉佩は目を伏せる。

「その国の治安は悪くない。先進国だよ。確かに民族対立みたいなものもあったし、肌の色や出身国で賃金格差もある国だった。けれど、あの頃は表面上静かだったんだ。けれど、俺は見ただよ。道路は片側二車線の四車線道路で、バスを追い抜いていこうとした一台の乗用車が、突然大爆発を起こした」

「自爆テロ……って奴か……!？」

皆守の抑えた叫びと八千穂が息を呑む音が聞こえる。葉佩は頷いた。

「お前さんたちも、たぶん、ニュースで見たと思うんだけどね。たった四年前のことだし……。どこかの武装組織から犯行声明も出てたと思う。そんなテロだった。周辺の車、人々、すべてを炎が飲み込んだんだよ。バスも例外じゃない。車体が浮くほどの爆風を横っ腹に食らって、横倒しになった。俺も爆風に吹っ飛ばされた。周囲のビルは窓が割れて書類が道路に舞い散った。歩行者も当然巻き添えを食ったよ。本当に何が何だかわからなかった。何が起こったのか、理解するまで酷く時間がかかった気がする。状況を理解してからは迅速に行動した。ガソリンに引火してバスが爆発するかもしれないけれど、構っていられなかった。親友と、親友の子供を助けなきゃならなかった。……バスの後部に広い降車口がついてて、そこから入ることが出来た。ひしゃげて、半分開いてたしね。彩とあのコの父親はすぐにどこにいるかわかった。降車口からすぐのところ倒れてたから。あいつは血だらけで、彩も酷い傷を負ってた。とりあえず二人をバスの外に引きずり出して、それから他の乗客を助けようとした」

「『助けようとした』……って……」

八千穂の手が葉佩のアサルトベストを握る。

「中に入ろうとした俺をガソリンの引火が原因の爆発が遮った。今は《秘宝》のおかげで何ともなってないけれど、あの時は髪ごと顔半分焼いたからねエ。……亮太に聞いてみるといいよ。あの後、皮膚移植である程度は綺麗になったんだけど、《秘宝》を飲むまでの数年は今と人相が違ってたって言うと思う」

アスファルトに体が叩きつけられた痛みも、炎に巻かれる熱さも覚えている。たった四年前の話だ。

「俺は彩と、親友を助けたかった。自分が焼け爛れる臭いもわからなくなってたし、相当酷い姿になってただろうけれど、事切れそうな親友の言葉を聞かなきゃならなかった。あいつは、俺に彩を託して死んだ。『最期に会えてよかった。ありがとう。彩を頼む』……どんな遺跡に行っても生きて帰って来る男が、たった一発の爆弾で死ぬんだ。世の中わからないもんだって思ったよ。《協会》からの要請もあって、俺は彩を養子にした。……要請なんてなくても、俺は彩を大事にするって決めてたけど……」

頭から顔半分を包帯に巻かれた葉佩は、テロから一週間後、まだ四つだった彩にすべてを話した。彩は泣かなかった。ただ、頷いた。

「お父さんが……昨日の夜、彩に会いに来たの。『父さんはもう逝かなきゃならないけど、新しいお父さんが迎えにくるから彩は心配ない。新しい父さんはとても優しい男だ。お前を大事してくれる。幸せに暮らせ』って。だから……知ってる……」

彩がそう呟いた声を忘れてはいない。涙を堪える小さな手は毛布を握り締めていた。

顔の左側に大きな裂傷を作り、左半分を包帯で覆われていたけれども、彩の左目が無事だと聞いて、あれほど嬉しいことはなかったと思い出す。

「そんなことがありましたよ」

そう話を締め括った葉佩は、ひょいひょいと飛び石を越える。向こう岸で待っていた彩は、ギュッと父に抱きつき、鳥の彫像を指差した。

「……皆守クン」

「何だよ」

八千穂はアンリを背負う皆守を見上げる。

「あたし、日本に生まれてよかったって……戦争とか、テロとか、そういう話を聞くたびに思う……」

「ああ……そうだな……」

テロや戦争は、ニュースや映画の中だけの遠い国の話だった。けれど、彼らの友人はそれを知っている。それもあの小さな《宝探し屋》は二つを経験して天香に辿り着き、義理の父と一緒に鳥の彫像を動かしている。

そうこうしているうちに、彫像が見つめる先に何かの球体が現れた。葉佩は「おやおや」と指先でその表面をなぞって、何とも言えない微妙な顔をする。

「……ぬるぬるねばねばしてる……甲太郎ちゃんも触ってみるといいよ～」

飛び石を渡り終えた皆守を振り向き、葉佩は指先の『何か』をねばねばと指で伸ばして変な顔をしている。

「極力遠慮だ。そして、俺の手はアンリで塞がってる。代表して八千穂が触る」

「え、えエーッ?!」

「八千穂、遠慮するな。滅多に出来ない経験だぞ」

意地悪く笑う皆守に八千穂は何とも言えない顔をした。菌なのか、カビなのか、そんなわからないものは触りたくはない。

「絶対イヤ！」

断固拒否の姿勢を貫く皆守、八千穂に、葉佩は残念そうに溜息を吐いて、「つまんないの」とまるでアンリのような口ぶりで呟く。そんな父たちを見るに見かねたのか、

「……彩、いいものある」

彩は葉佩、皆守、八千穂に見つめられる中、羊リュックから一本の洗剤を出した。

「石碑読めないとき、洗う」

弱アルカリ性洗剤である。リュックの中からは、雑巾も出てきた。

「父、磨く」

「俺が？」

「うん」

彩は葉佩の手に洗剤と雑巾を手渡した。

「彩、見てる」

「やればいいのに」

「ぬるぬる嫌い」

確かに、彩はぬるぬる、てらてら、ねばねばしたものが好きではないことを思い出した。

葉佩は渋々ぬるぬる、ねばねばしたものに覆われる球体を磨く。

「はア……」

溜息を吐きながら。

そのとき。

「うにゅ～……！」

皆守の背で思い切り伸びをしたアンリの体が支えもない皆守の背中でグラリと後ろに向かって傾いた。

「う？ にゃ～！」

皆守はとにかくアンリの足を離さないようにしっかりと固定し、頭から下に落とすという最悪の事態を免れたのだが、アンリはぷら～ん、と皆守の背中から逆さにぶら下がって喜んでいる。

そして、ふと横を見たアンリが一言。

「明日香姉ちゃんのパンツ見～えたッ。白ピンクのシマシマ！ シマシマ！」

「キャ～ッ！」

八千穂は容赦なくテニスボールを宙に放り投げると、なぜか葉佩に向かって一発スマッシュを撃ち込んだ。見事後頭部にヒットし、そのままの勢いで吹っ飛ばされた憐れな男は、鳥の彫像の嘴に額を突かれる。

「んぎゃ……ッ！」

「父……」

「あ～あ～……」

「だって見えたんだも～ん」

「見ちゃダメでしょッ！」

葬祭神殿のロジックは、普段からパズルばかりやっている葉佩には簡単だったらしい。

あっさりとエリアを抜けて、非常に怪しげな雰囲気漂う場所に出た。

「雷神の至聖所だって」

H. A. N. Tがそう指し示している。

「何か、ピリピリするんだけど……」

八千穂が呟くとおり、入ってから何かがピリピリと肌に触る。

「あ、これかねエ……」

建御雷之男神周辺に、激しく何かが渦巻いていた。葉佩はH. A. N. Tを開け、確認する。

「これ、プラズマだって。気を付けないとビリビリだねエ」

「触れないの？」

アンリは首を傾げて父を見上げる。

「触ったら、光学迷彩壊れちゃうし、アンリも真っ黒コゲコゲになっちゃうかもねエ？」

にこやかだが物騒な返事に、アンリは伸ばしかけていた手を引っ込めて、後ろで手を組んだ。迂闊に触らないようにと自分を縛りつけてみたらしい。

「しかし、あれは必要なものなんだろう？」

皆守は建御雷之男神の腹の辺りにはめられている《秘宝》を指差す。

「あれを取らなきゃならないなら、頭使うしかないのか」

葉佩は「そうだねエ」と頷きつつ、ぐるりと周りを見回す。

「あ、あれなんだろう？」

葉佩が指差した先に、バチバチと何かがスパークしている部分があった。

「……普通に考えれば、絶縁体で間を塞げばいいってことだよな……」

「そうだねエ」

皆守の言葉に頷く葉佩は、アンリと彩を見る。

「ねエ、何かこう、ゴムとか、そういうものを持ってたりはしない？」

アンリと彩は、リュックの中をゴソゴソと漁った。

「輪ゴム？」

アンリは着ぐるみの指に器用に輪ゴムを引っ掛け、父の額に飛ばす。

「あ、イタ！」

葉佩は額をさすりつつ、「も、もう少し大きいもの……」と別の要求をした。

「……」

彩のリュックの中から、3-Cと書かれた黒板消しが現れたが、

「これ違う……」

「それ……！」

「気のせい……」

と、皆守の指摘もものともせず、彩は何食わぬ顔をしてしまう。そして、再び取り出したのは消しゴム1ダース。

「……なぜ、1ダース……？」

皆守の疑問はもったもだが、この1ダースが建御雷之男神の手の間を塞ぐことが出来る唯一の手段なのである。

「彩、お絵かきする。消しゴムたくさんいる」

「そうそう。それで、境の爺ちゃんのところでまとめ買いしといたんだっけねエ」

「それどうするの？」

「全部剥きます。で、組み合わせて、輪ゴムで止めて、あの間に押し込む、ということで……」

「彩の消しゴム……」

「ごめんねエ。新しいの、明日、売店で買っておくから……」

「ゴミ少ないのがいい……」

「はいはい」

「あ、僕、風船持ってた～」

まだゴソゴソとリュックを漁っていたアンリだったが、ゴム風船を取り出すなりプーッと膨らませ、飛ばす。ばぶぶぶぶぶ……と音を立てながら飛んだゴム風船は、父のゴーグルに引っ掛かって止まった。

「……」

「葉佩、我慢しろ。お前の息子だ」

「……い、いや、怒ってないよ……」

風船を取り除きつつも声が震えているが、本人曰く怒っていないらしい。

「これで道具が揃ったよ……工作します」

葉佩の手は、こういうときだけ器用に動くらしい。消しゴムを上手に組み合わせ、輪ゴムとゴム風船で器用に四角く固定すると、それを建御雷之男神の手の間に押し込む。

「止まった……！」

八千穂はパチパチと手を叩き、ぴよん、と段差を飛び降りた。

「取っていい？」

「いいよ～」

建御雷之男神の像からカポッと外れ、八千穂の手に入ったのが天鳥船。これで、先に進めるといふものだ。

「さ、先に進んでみよう。何がいるかな～？」

「いるかな～？」

「……な～」

天鳥船の間に魂の井戸が存在するのを確認した一行は、井戸で一時休憩を取ることにした。

「じゃ、十分間の休憩ね」

葉佩は銃火器の最終確認をし始める。アンリと彩、八千穂は持ち込んだペッドボトルのお茶を飲んで一息。皆守はというと、どうしてもさっきから気になっていたことを口に出して彩に尋ねていた。

「黒板消し、いつ盗んだ？」

彩は顔を上げ、首を傾げる。

「盗まない。落ちてたから、もらった」

「落ちてた？」

「うん。……教室の床。ばふばふすると、煙出て楽しい」

「……」

いつ忍び込んだのだろうか。気になってきた。とても気になる。黒板消しがひとりでに動いて

いたら不気味だろうが、誰も気付かなかったのか。それとも、彩が手にした瞬間に光学迷彩が発動するとでもいうのか。

「考えるだけ無駄だと、学習したはずだ……俺は……」

遠い目をして、皆守はアロマに火を点ける。

「アロマが美味いぜ……」

八十神の紀——化人創成の間。

「やはり来たか、葉佩九龍——。これが最後の警告ダ。命が惜しければ、即刻この場から退去セヨ」

「んふふ……」

葉佩は小さく微笑んでいた。

「これでも、かなり怒ってるんだよ？ 手前勝手な『正義』とかいう適当な名前をつけたものを振りかざして、お前さんは學園で何をした？ 何人傷つけた？ 到底許せないんだよ」

また、葉佩の小さな笑い声が聞こえる。

「んふふふ……。簡単に『正義』を口にして、人を傷つける奴は大嫌いなんだよねエ。……テロリストと変わらないじゃないか。んふふふふふ……」

葉佩の手に握られたM92F M A Y Aの銃口が真っ直ぐ墨木を向く。

「……九ちゃん……」

「ありゃあ、相当トサカに来てるらしいな……」

アンリと彩の母の病状に対するどうにもならない個人的な苛立ちと、墨木との放課後の一件が相まって、葉佩の頭の中に相当な混沌を産み出しているらしい。それが墨木に対する怒りという形でもって発露した、というところだろうか。

墨木にとって、半分はとばっちりとも言えなくはないが。

「貴様が何であれ、この場所だけは荒らさせるわけにはいかんのダ！ 覚悟を決め口！ 葉佩九龍——ッ！」

「……そのセリフ、そのままお返しするよ！」

そこから先は銃撃戦である。

リロードの必要のない墨木の銃と、リロードの必要がある葉佩の銃。しかし、葉佩はそんなことを感じさせないくらいの手際よさでリロードを繰り返す、墨木に向かっている。

「……パパ……パパ本気だ……」

「父、いっぱい怒ってる……」

皆守は自分も含めた四人の面倒を見ながら——当然流れ弾に当たらないようにしつつ移動し、ことの推移を見守っている。

「……笑ってるなア……葉佩は」

皆守はアロマに火を点け、揺らめく煙の向こうで銃撃戦をしている親友を眺める。

「本当に怒ってるのかなァ、九チャン……」

「パパ、すごい怒ってるよ～……怖いよ～……」

アンリはプルプルと震えながら彩にしがみついている。

「人間、突き抜けると笑い出すらしいからなァ……」

ぷかりぷかりとアロマが漂う中、皆守は僅かに頭を傾けた。チリッと髪の毛の先に銃弾が触る感覚の後、遺跡の壁に銃弾が当たる硬い音が耳に響く。

「九チャンは、いつも突き抜けてるってこと？」

「いや、あいつの薄らトボケた笑い顔は通常装備だろ。そうだろ、アンリ」

「あ、うん……パパ、優しくて、いつもニコニコしてるよ」

「なるほどな」

「でも、いっぱい怪我とかしてたの。今みたいに、すぐ治んなかったんだよ」

「それが普通の人間だからなァ」

「彩が僕の弟になったときには、僕、孤児院にいたんだけどね。パパが彩を連れて孤児院に来たの。『今日から、彩はアンリの弟だよ。仲良くしてね』って僕に言いに来たんだよ。そのとき……僕、パパがわかんなかったの」

「……『わかんなかった』……って」

八千穂は訊き返す。

「な、何で……？」

聞き返すまでもないことだと皆守は思う。

恐らく、本当に葉佩の人相は変わってしまっていたのだろう。アンリですら誰かわからなかったくらいの変貌があったということだ。爆風をまともに浴び、髪と顔半分を猛火に焼かれるというのは、聞いているだけで生き地獄だ。普通なら、それだけで気の一つも狂ってしまうかもしれない。毎朝鏡を見る。そのたびに自分の変わり果てた顔を見るというのは想像を絶する苦痛ではないだろうか。

「あ、でもね、声聞いて、頭撫でてくれて、わかったんだよ。パパだって……パパが笑ってるってわかった」

八千穂の手が皆守の袖を掴む。皆守は「はァ……」と一つ溜息を吐いて頬を搔くと、八千穂の腕を掴んで自分の方へと引いた。八千穂の頭のお団子を掠めて、銃弾が一発、壁に命中する。

彩はアンリにしがみつかれたまま黙っていた。葉佩の火傷の原因は直接的には彩の責任ではない。彩を助けた後、他の乗客を助けようとして負った火傷だ。

わかっているのだろうか。

彩は表情を動かさず、アンリの頭を肉球のついた手でぽふぽふと撫でていた。

「父、優しい」

彩は墨木に対して容赦なく銃弾を浴びせる父を見る。

「優しいから、怒る……。父、テロリスト、嫌い……。彩も、嫌い……。だから、怒る……」

「ぐあァーッ！」

くぐもった叫びが聞こえた。

膝を折った墨木から溢れ出た《黒い砂》は遺跡の壁に吸い込まれ、そして、大穴牟遅が現れる。

「葉佩！」

「九ちゃん！」

葉佩は振り返ると、湧き出す闇の中から現れる宇萬良を見て四人を手招きする。そして、先程まで四人がいた辺りに向かってガスHGを放り投げた。

大穴牟遅の大きさは圧倒的だった。アンリと彩は適当に距離を取りながら、興味津々の様子で観察している。

「……ど、どうするの、こんな大きなの……」

ポカーンと大穴牟遅を見つめる八千穂に、皆守は言う。

「俺に聞くな」

と。

葉佩は慌てず騒がず、本日初使用となる最終兵器を取り出した。

「ぱんぱかぱ～ん！ 買っておいて大正解！ タクティカルランチャー！」

すでにリロードしてあったらしいタクティカルランチャーを構え、

「ファイア～！」

あまりにも見え透いた弱点に弾を放り込む。が、効いているような、効いていないような、そんな反応だ。

「……おや」

葉佩にとっても、この反応は今一つつまらない。ドカンと破壊出来ると思っていたのだがそうはいかなかった。が、諦めなかった。高い買い物をしたのだから、しっかりと元が取れなければ人間納得がいかないものだ。

「彩！」

「？」

呼ばれ、彩は首を傾げる。

「黒板消し、パパにちょうだい！」

「……？ うん……」

「学校の備品だ、それは！」

一円単位にもうるさい《生徒会》会計の狐目が光る幻覚が見えた。皆守は彩を押し留めようとするが、間に合わない。

彩の手から葉佩の手に黒板消しが渡され、葉佩はそれを大穴牟遅に向かって投げつけたのである。

「備品だって言ってるだろうが！」

「皆守クン、結構細かいね～」

冷静な八千穂のツッコミ。

そして、葉佩は――。

「粉塵爆発狙えるかねエ？ んふふふふふ……」

ぼふんと黒板消しが煙を上げるのに合わせ、リロードしたタクティカルランチャーを構え、撃った。

「阿呆が――ッ！」

当然の如くぶっ飛ばされ、跡形もなくなる憐れな黒板消し。――と、大穴牟遅。

機嫌の悪い会計の顔が脳裏に浮かび、皆守は「し、知らん……」と誰にも聞こえないくらい小さな声で呟いた。

男子寮――深夜。

「葉佩ドノのお子さんだったのでありますカ……？ やけに大きな猫だとは思っていたのでありマスガ……」

猫だという前に、二足歩行しているという部分について疑問を持つべきである。

風呂上がりでホコホコしている子供たちは、墨木のプリクラをプリクラ帳に貼り付けて嬉しそうだ。

「可愛いでしょ。俺の息子」

人気がない風呂に洗濯物に偽装した子供たちと侵入して遺跡の汚れを落としてきた皆守と葉佩が、やはり洗濯物に偽装した子供たちを連れてコソコソと風呂場から戻るとき、廊下で墨木に会った。

「少し話そうよ」

という葉佩の言葉に頷き、墨木はそのまま葉佩の部屋へと邪魔していたわけである。

「うちのコたちは本当に可愛くてねエ～」

「また始まった……」

葉佩のベッドを不法占拠し、《協会》機関紙である月刊オーパーツをめくっている。表紙は笑えることに、すまし顔をした葉佩だ。無駄にいい写真で破きたくなる。

「葉佩ドノは、兄を思い起こさせるのであります。兄は、とても優しく、強く、自らの仕事を誇りにしていたであります」

「……そうかい。いいお兄さんだねエ」

その肯定は自分も『イイヒト』という括りだろう……というのは、皆守の心の声。

「当然であります。……大事な兄との《約束》を、葉佩ドノは思い出させてくれまシタ」

「んふふふ。どういたしまして。……ところで――」

微笑んだ葉佩は、何気ない様子で墨木に尋ねた。

「お前さんを言いくるめた仮面の男っていうの……《力》による支配を説いたのかい？」

「そうであります。『その《力》で《正義》を貫け』と、言われまシタ……」

「《正義》……《正義》ね……」

葉佩の指が、テーブルをタップする。

「《正義》って何だと思う？」

「《正義》でありマスカ……」

墨木はガスマスクの包まれた顔を伏せる。

「自分に、《正義》を語る資格はないであります……」

「じゃあ、甲太郎ちゃんはどう思う？」

自分に飛び火すると思わなかった皆守は完全に虚を突かれた。「はァ?!」と素っ頓狂な返事をして、雑誌をめくる指を止める。

「俺に訊くな、そういうことを……」

「仕方ない……答えを持たない甲太郎ちゃんには拷問を科さなきゃ。アンリ、彩、やっちゃいなさい」

「は～い！」

「うん」

「なぜ?! って、うぐ……ッ！」

皆守の背中の上にアンリと彩が乗った。

「甲太郎ちゃん、たまには俺と真面目なお話しようよ～」

「……知るかッ！ ……く、重い……」

呻く皆守を見て、葉佩はひとしきり楽しそうに笑うと、墨木に視線を戻した。

「《正義》って、難しく考えると、どこまでも答えは出ないことだと思う。だって、テロリストだって、自分達は《正義》のためって言うし、戦争ばかりしてる国だって、《正義》を振りかざしてるしね」

「……そ、そうでありますガ……」

「いいじゃない。みんな幸せなら。お前さんたちが笑ってて、アンリと彩と、あのコらのママが笑ってたら、俺、それで充分だもん。それを護るのが、俺にとっての《正義》なんだよねエ」

「葉佩ドノ……兄も、言っていました……『大切なものを護るために、引き鉄を引け』と……」

「ね？ そういうことなんだよねエ。突き詰めていけば、人にはどうしたって限界があるわけだから。んふふ……ん？」

「は、葉佩ィ……説教はそのくらいでいいだろう……ぐえ……飛び跳ねるな、アンリ……ッ！」

皆守の声に葉佩は「おや、忘れてたよ」とにんまり笑う。

「……こ、殺すぞ、オッサン……！」

「おや、そういう悪いコには、正義の鉄槌！」

彩の手が皆守の横に放り出してあった機関紙を取り上げ、くるりと丸めると、ポコン！ と皆守の後頭部を叩いた。

「鉄槌……」

「お、覚えてろ……！ ……うぐ」

三巻目のあとがき！

こんにちは。紫桐子です。

お手に取っていただき、ありがとうございます。

『《宝探し屋》子育て奮闘記・さん！』がようやくお披露目になりました。
時間かかり過ぎですね。

三冊目には、個人的に好きな話が入っています。

墨木の段、彩が家族になったときの『察しの良過ぎる、イイコ過ぎるあの子が、どうしてのんびり父さんの息子になったのか』という話ですね。

ちょっとだけ加筆しました。

真里野の段もかなり考えて書いていた気がします。

七瀬と入れ替わる葉佩の慌てっぷりをもう少しオーバーに書いたらよかったんでしょうかね。
まだちょっと迷いがあったんですかね。

ゲームではそんなことなかったですが、スタイリッシュに行かない探索風景を書いてみました。
ちょっと楽しかったです。

絶対に七瀬は運動不足でしょうね。

次は四巻目でお会い出来たらと思います。

では、また。

紫 桐子

天香學園狂騒曲～《宝探し屋》子育て奮闘記・さん！

<http://p.booklog.jp/book/50951>

著者：紫 桐子

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/underwaterlotus/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/50951>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/50951>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

九龍妖魔學園紀 ©2004,2006 ATLUS/SHOUT! DESIGNWORKS